

2020年11月（改訂版）

心はどこにあるのか？

脳によって仕掛けられた難解なトリック

白石 茂

改訂にあたり

今年の5月に「心はどこにあるか？」というテーマで原稿をインターネット上にアップしてから、1年余り経ちました。この間、いろいろとコメントをお寄せいただきました。「そんなはずはない」というご意見や、「目の前の世界は物質の世界ではない、と解釈することに納得はできないが、これまでの考えに疑問を感じるようになった」という感想もいただきました。さらには、「説明が分かりづらい」とのご指摘もいただきました。

前回の原稿は10数年前に書いたものであり、内容が一部古くなっている部分がありました。また説明に工夫をこらしてみたいという思いを持つようになり、新たに加筆してみました。どれだけ改善したかは不明ですが、分かりづらさに改善がみられたことを願っています。

目次

まえがき (P5)

心はどこにあるのか？／本稿の目的

第1章 常識を疑うことは難しい (P9)

第1節 心の世界、その本当の姿 (P9)

天動説から地動説へ／心と意識、科学からのアプローチ／科学と哲学
 ／(1)心、身体、外界の、一般常識としての解釈／(2)「目の前に広がる世界」の、哲学が示す解釈／難解なトリック／哲学のストラテジー／本稿の方針／常識から理解へ

第2節 疑問、それは探究への入り口 (P25)

疑問から探究へ／疑問の感じ易さ／レベル1 すぐに疑問に思えるタイプ／レベル2 人に指摘されると疑問に思えるタイプ／レベル3 人に指摘されても、何故不思議なのかが直ぐには理解できないタイプ／レベル4 レベル3 + 誤った理屈に裏付けされたタイプ／心の世界にまつわる常識を疑うことは難しい／不思議さに気付くかどうかを試してみる

第2章 見るという行為の探究 (P40)

第1節 2つの世界を絵で表す (P40)

2つの世界を表す2つの図／「目の前に広がる世界」を絵で表す／「物質の世界」を絵で表す／表現方法にこだわる理由／実は奇妙な物質の世界

第2節 見るという行為の3つの要素 (P50)

見るという行為の3つの要素／「物質の世界」での、見るという行為の3つの要素／「目の前に広がる世界」での、見るという行為の3つの要素／目の前の対象は二面性を持つ

第3節 見るという行為の物理的、生理的過程 (P59)

はじめに／見るという行為の物理的過程／見るという行為の生理的過程

程

第3章 心についての常識の解体 (P65)

第1節 目の前の対象は物質か？ (P65)

目の前の対象＝物質か？／間違い探しのパズル／色に対応する物理的な性質／色について2つの世界を重ね合わせてみる／2通りの反応／「このような説明は全くの誤りだ」とする反論に対する補足の説明／「疑問を感じはしたが、同時に新たな疑問を感じるようになった」とする感想に対する説明

第2節 感覚の存在は物質であることの証拠になるか？ (P76)

感覚の存在は物質の存在を示唆する／「物理的特性＝感覚」ではない／2枚の絵を比較する／物質の世界に感覚が投影されている、という反論／感覚が混在する奇妙な世界

第3節 目の前の対象は「見ている対象」か？ (P85)

「自分がいて、その自分が見ているのだから」というトリック／二重像／二重像の矛盾／目の前の対象は「見た結果」である／目の前の対象の二面性／逆さの網膜像／見るができない？／目の前の対象は見かけの物質であり、目の前に広がる世界は見かけの物質の世界である／投影という論理の破綻

第4節 目の前の身体は肉体としての身体か？ (P102)

身体についての考察／自らの身体の解釈／自らの肉体としての身体が存在はどのようにして確認されるか／見かけの身体／「見かけの身体」という考えに対して生じる疑問／同調というシステム／同調のシステムが乱れる例、鏡の中の世界／左右反転の鏡映像／見かけの身体には、

内と外とを分ける境界は存在しない／「見た結果」を見る、ということとは有り得ない／逆さの網膜像に対する回答

第4章 心の世界 (P121)

第1節 心はどこにあるのか？ (P121)

これまでの道のり／外界からの情報を処理した結果／心と意識の、言葉の定義／意識されている内容／心の世界／狭義の心の世界と広義の心の世界／心はどこにあるのか／心の世界、その生成と消滅／心の世界についての疑問と回答／(1)目の前のコーヒーカップが、何故心の世界の中の存在なのか？／(2)「いわゆる心」は特別な存在ではないか？／(3)心の世界中に、何故「いわゆる心」が内在しているのか？

第2節 心の世界における存在と認識 (P37)

認識という問題／認識という言葉の定義／「目の前の対象を見て、その存在を知る」というトリック／認識という観点からみた心の世界

第3節 「私」とは何か？ (P146)

「私」という存在／「私」という存在の問い直し／「私」とは何か？／自己意識／「私」という存在の形成／心の世界の中に、何故「私」が内在しているのか？／見かけの世界は空虚な世界ではない

あとがき (P164)

まえがき

心はどこにあるのか？

「心は一体どこにあるのだろうか？」という、一見無意味とも受け取れる問い掛けを耳にしたことがあるでしょうか。多分初めて耳にする人が多いと思いますし、またこのような問い掛けに対して一瞬奇異に感じることはあっても、真剣に考えてみようと思う人は少ないものと思います。「心は実体の無いものだから、どこと言われても分かるはずがない」というのが大方の見方でしょう。

確かに心は物質とは異なるものですから、どこにあると言われても実感が湧かないのは当然でしょう。しかし、「では心は存在しないのか？」と問われれば、やはり「ある」と答えざるを得ないものです。一見無意味にも思えるこの問い掛けは、実は心の有り様について核心をついたものなのです。

不思議さと、その奥深さを表現するのに、小宇宙という言葉が使われることがあります。心についても「心は未知なる小宇宙」とか、「心は内なる小宇宙」と形容されることがあり、小宇宙と形容されるように、心は大きな広がりを持つものとして理解されています。しかしその広がりには、例えばフロイトが創案した無意識という言葉に代表されるような類のものであり、心が大きな広がりを持つとはされても、暗闇を覗き込むような、あるいは雲を掴むような、曖昧で具体性に欠けるものとして理解されているようです。多少具体性を持った解釈としては、人間の記憶容量は膨大でスーパーコンピュータ数台分に匹敵する、というようなものであり、あくまでも心の生理学的な側面についての言及です。

確かに心の世界には、知、情、意という言葉で表されるような抽象的な漠然とした部分もありますが、それだけで構成されているわけではありません。目を開いたときにあなたの目の前に広がる世界、それもあなたの心の世界なのです。例えば今あなたが部屋の中に居るとして、視線を左右に動かしたときにそこに見える部屋の壁、机や本棚などの調度品、視線を上に向けたときに見える天井、下に向けたときに見えるあなたが踏みしめている床、更に視線を手前に引いてきたときに見えるあなたの身体、それらは全てあなたの心の世界であり、あなたの心の世界のことがらなのです。もちろんこれは、コンクリートや木材といった物質で構成された部屋、そこに備わっている家具、そして肉体としてのあなたの身体が存在するという前提に立っての話です。そのような前提に立った上で、あなたの目の前に広がる世界は物質の世界ではなく、いわば見かけの物質の世界であり、そこに在るものは物質ではなく見かけの物質であり、更にはそこに見えているあなたの身体は肉体としての身体ではなく見かけの身体であり、全ては心の世界なのだということをお話しているのです。

心の世界は、それこそ目に見えるような、手で触れられるような、より具体的なかたちで存在する部分もあり、小宇宙と形容されるにふさわしい大いなる広がりを持つものなのです。

このような心の世界の有り様については、一部の哲学者は以前から気づいており、その不思議さが研究の動機になってきたものと思われまます。しかし哲学者は心の世界の本当の姿を、哲学を専門としない人達に分かりやすく説明するという啓蒙活動はしてこなかったようです。あるいはしてきたのかも知れませんが、それは、元々理解している人には分かるがそうでない人には分からない、というレベルのものであったように思われます。今日、心の世界の真の有り様について理解が広まっていないことを考えれば、そう思わざるを得ないようです。

実は、心の世界をあたかも物質の世界であるかのように見せかける、いわばトリックとでも呼ぶべきものが脳によって仕掛けられており、そのトリックを解き明かすのは殊の外難しい作業です。

十七世紀に始まり今日に至る自然科学の急速な発展は、デカルトによって精神と物質とが切り離され、物質についての研究に専念すればよくなったことにその一因があるという考えがあります。その流れを受けて、心や意識は自然科学の研究対象とはなり難いという理由から、自然科学の分野では心や意識を扱うことはタブー視されてきました。

しかし、脳科学の進展に伴い、科学の立場から心や意識の謎を解き明かそうという気運が高まってきています。ただし、科学の立場からの心や意識についての理解は一般的な常識としてのそれと同じであり、真に正しい捉え方はなされていません。科学が心の世界を探究しようとするのであれば、心や意識についての正しい理解が必要であり、それには、いま持っている心の世界についての常識を一旦解体し、そして新たに再構築する必要があります。

心の世界についての常識は、それが間違いであるということの当然な帰結として内部矛盾を抱えています。その内部矛盾がもとで、一見したところ分からないものの、注意深く分析してみると、その常識からは説明できない不可思議な現象が生じていることが分かります。従って心の世界についての常識を解体するには、常識だと思われていることがらの中に潜む不思議さにまず気づく必要があります。そしてそれが常識を疑う気持ちに変わることによって、常識の中に潜む矛盾を解き明かす探究へとつながっていくこととなります。その一連の過程を辿ることによって、心の世界についての常識を解体し、そして新しい概念を再構築することができるようになります。

本稿の目的

小宇宙と形容される心の世界の本当の姿を、哲学ではなく科学の立場から分かりやすく説明したいと考えています。従って全てのことがらに先立ち、物質の世界が存在するという前提のもとに話を進めていくこととなります。特別な予備知識は全く必要ありません。事実を事実として認める気持ちがありさえすれば、それで十分です。「コーヒーカップを見る」という日常的なことがらの中に、トリックを見破るヒントが隠されています。

この原稿は単なる読み物というわけではなく、皆さんご自身でこの難解なトリックに挑戦していただくものです。従って楽しく読めるというものではないかもしれませんが、また多少の忍耐が必用かと思えます。道案内は私がします。話の道筋を辿っていくだけで理解できるように工夫してみました。

宗教やモラルを持ち込むつもりは毛頭ありません。しかし心の真の有様を理解すれば必ずや世界観が変わり、また人生観も少なからず変わるものと思います。人間一人ひとりが心の世界という如何に大きな広がりを持つ存在であるかが理解でき、その結果、一人ひとりの存在の重みを改めて実感し、尊重する気持ちが生まれるのではないかと思いますし、またそうなることを願っています。

第1章 常識を疑うことは難しい

第1節 心の世界、その本当の姿

天動説から地動説へ

近代自然科学が確立されたのは、およそ十六世紀から十七世紀にかけてであると言われていています。それ以前の人たちの自然観がどのようなものであったかと言えば、太陽や星々は地球を中心にして一昼夜で一回転するという天動説が信じられていました。また地球は広大な平面で構成された不動の存在で、その果ては垂直な断崖だと考えられ、遠洋航海に出かける船乗りたちから怖れられていたとのこと。もっとも、水平線に徐々に姿を現す船の様子から、地球も月や太陽と同じく球体ではないかという考えは早くからあったようです。紀元前3世紀頃エラトステネスは、地球が球形をしているという考えの下、エジプトの2つの地点で太陽の高度を測って地球の円周を割り出していますが、その値がかなりの精度であったということは、よく知られているところです。

コペルニクスが地動説を唱えたのは十六世紀半ばのことですが、地球が太陽の周りを回るという考えは当時の人々に嘲笑され、更にはキリスト教の教えに反する危険な思想とみなされ、彼の著書は禁書扱いされるに至っています。天動説はプトレマイオスによって二世紀頃に提唱されたとされますが、地球が不動の存在であるという考えは一般常識にかなったものであり、長期にわたって疑問が投げかけられなかったのはよく理解できます。その当時コペルニクスの地動説を支持したのは、ガリレオとケプラーの二人だけだったとも言われています。

今の時代においても同様のことが言えそうです。その果てが垂直な

断崖になっているというのはともかく、日々の生活を送る上においては天動説を信じていたとしても何ら不都合は生じません。地球が回転しているので太陽が東の空に現われると解釈するよりは、太陽が運動しているので東の海から昇り西の山の彼方に沈むと解釈した方が、日常の生活においては余程便利かもしれません。

しかし、天体の運動を正しく理解するということになると、どちらの説でもいいというものではありません。事実天動説では、恒星の運動はともかく惑星の運動をうまく説明することができず、その矛盾を埋め合わせるために周転円という考えを取り入れざるを得なくなり、理論は複雑なものになってしまいました。

あるいはまた、運動速度という点からみても矛盾が生じます。例えば太陽が一昼夜で一回転することは、地動説の立場からすれば地球の赤道上で自転速度である秒速460mで済みますが、天動説の立場に立つと太陽は光に近い速度で運動しなければならないことになります。ましてや遙か彼方の星々が天動説の考えの下に一昼夜で一回転するとなれば、光をはるかに超えた速度で運動しなければならないことになってしまいます。

天空にまつわるいろいろな事実を矛盾なく説明するには、天動説から地動説への移行が必要不可欠だったわけです。常識はあくまで常識であり、日常の限られた条件の下でのみ成り立つものであることが多いのではないのでしょうか。

心と意識、科学からのアプローチ

「脳は科学に残された最後のフロンティア」という言葉があります。生物学や生理学の世界では、J. ワトソンとF. クリックによって基本構造が明らかにされたDNAの遺伝情報の解析と並んで、脳についての研究が精力的に行われています。微少な電極を挿し込んで神経細

胞の活動を調べるという微少電極法は、脳の活動を明らかにする上で多大な貢献をなしました。例えば、この研究法を用いて行われたネコの視覚野についてのD. ヒューベルとT. ウィーゼルによる研究は、第2章第3節で簡単に触れますが、従来考えられていた視覚の情報処理の考えを根本から修正することになりました。

微少電極法は、実験方法の制約から対象が動物の脳に限定されますが、1980年代に実用化されたMRI（磁気共鳴断層撮影）により、人間の脳の活動をリアルタイムで調べることができるようになりました。視覚領、聴覚領、記憶領、統覚領などのダイナミックな繋がりが明らかにされつつあります。日進月歩という言葉がありますが、正にその言葉通りの進展を見せているのがこの分野だと言えます。

人間の脳についての研究が進むにつれて、それは研究のプロセスの当然の成り行きだと言えるのですが、脳の生理学的側面だけでなく、脳と心、あるいは脳と意識の関係という、ごく最近までは科学の研究対象とはなり得ないとされていた分野についても研究が開始されました。この分野での先駆的な仕事としては生理学者のW. ペンフィールドによる「脳と心の正体」や、J. エックルスによる「心は脳を超える」などの著作があります。彼らの主張するところは二元論的色彩の濃い論調となっており、著書のタイトルからも伺い知れるように、今の科学では心や意識を論じることはできないとする立場に立っています。

それに対して二十世紀末からこの分野に意欲をみせている物理学者のR. ペンローズは、「皇帝の新しい心」や「心は量子で語れるか」などの著作を通して、量子力学の立場から心や意識を論じています。まだ仮説の域を出ていないので当然批判は多いのですが、好意的な見方もあります。

また一方、電子工学の分野では、人間が持つような高度な情報処理能

力をコンピュータに持たせようとする、いわゆる人工知能の研究が行われています。ディープブルーと名付けられたスーパーコンピュータが1997年にチェスの名人を打ち負かしたという話題が、世間の注目を集めました。

その後人工知能の研究は一時停滞していたものの、脳の神経回路網を模した特徴抽出機能に大量のビッグデータを組み合わせたディープラーニングというシステムの下で飛躍的な発展がみられ、将棋や碁の名人に勝利したり、自動運転や画像識別の分野で大きな成果を成しています。

これらのシステムは特定の機能に特化したものであることから、特化型人工知能と呼ばれています。特化型人工知能の場合には、学習させるための膨大なデータを用意する必要がありますが、それに対し、自律性を備え、問題解決に向けて自ら情報を収集して推論を行うようなタイプの人工知能の開発も進められており、これは汎用人工知能と呼ばれています。まだ道半ばではありますが、人工知能が意思をもつようになるのではないか、そうすれば果たして人間が制御可能なのかななどの観点から、人類の存続を脅かす存在になるのではないか、という懸念を持つ研究者もいます。

科学と哲学

従来、心や意識は哲学が論じてきた分野です。心をその研究対象とする心理学も、心や意識を論じているかの印象を受けます。確かに心理学が哲学の一分野であった時代においてはそうだったようですが、二十世紀初頭に哲学から独立して科学の立場に立つようになってからは、意識そのものを科学的に取り扱うことはできないという理由から、心理学はもっぱら心の機能を研究対象とし、意識を扱うことをタブー視してきたのが実状です。

心や意識の解釈については、この分野での先駆者である哲学者と、それから新参者である自然科学者との間に大きな隔たりがあります。そもそも心や意識についての解釈は様々で、研究者の数だけ解釈がある、とまで言われているほどです。

科学者の心や意識についての考えは、一般に考えられている解釈、つまりこれからお話することになる一般常識としての心や意識についての考えとほぼ一致すると言ってよいものですが、それに対して哲学者の示す心や意識についての考えは一般常識とは完全に異なり、科学者はその解釈に接して大いに戸惑うか、あるいは、自からの考えと余りにかげ離れているときに有り勝ちなことですが、意味不明なこととして無視する傾向にあるように思われます。

両者の心や意識についての解釈の違いは、私たちの目の前に広がる世界、つまり目を開けたときに目の前に見えている世界をどのように解釈するかに集約されていると言っても過言ではありません。つまり、大多数の科学者は目の前に広がる世界を物質の世界であると解釈し、一方哲学者は、全ての哲学者とは言い難いようですが、それを心の世界、あるいは別の言い方をすれば、見かけの物質の世界であると解釈しています。

科学者と哲学者との間で心や意識について議論が交わされることがあるようですが、そのとき決まって両者の間に、心や意識の理解に如何ともし難い隔たりがあり、議論が噛み合うことがないと言われます。その食い違いを端的に示す事例は、繰り返しになりますが、目の前に広がる世界を科学者は物質の世界と捉え、哲学者は心の世界と捉えるところにあり、その溝は如何ともし難く、埋めることができないようです。

確かに近年自然科学者の中にも、目の前に広がる世界を見かけの物

質の世界であることに理解を示す研究者が現れるようになりました。しかしその多くは、依然として物質の世界であると捉えています。また心理学者は心を研究対象としていることから、心や意識についての捉え方が自然科学者よりも哲学者に近いものがあると思われがちですが、先ほどもお話したように、確かに心理学と哲学との境界が明瞭ではなかった時代においてはそうだったのでしょうが、心理学が科学としての立場を強く意識するようになった段階で、心理学者の多くが自然科学の立場から心理現象を捉えるようになり、今日では実のところ自然科学者の考えと何ら違いはありません。

生理学者は長年の研究を通じて、脳の生理学的な側面について豊富な知識を持つに至りました。心理学者は実験や調査を通して心の機能について相当量の知識を獲得してきました。しかし、心や意識の有り様についての理解は、独断的な言い方ではありますが、今日のところ哲学者が科学者を上回っているように私には思われるのです。

その一つは、心や意識の研究を始めるに至った動機の違いに見て取ることができます。科学者は、150億個とも300億個ともいわれる莫大な数の神経細胞からなる脳の機能の複雑さ、感覚、知覚、認知、記憶などにみられる情報処理の巧みさなどに魅せられて研究に入るケースが多く、心や意識については一般的な常識のもとで研究を始めるわけです。

それに対して哲学者は、目の前に広がる世界を物質の世界と捉えることによって生じる矛盾、例えば物質の表面に色がついていることの矛盾、あるいは触感覚が肉体としての指の先に存在していることの矛盾、あるいは音が空間の中に存在していることの矛盾など、存在することの不思議さから心や意識の研究に入るケースが多く、既にこの段階で一般常識とは異なる心や意識の真の有り様の一端に触れ、その不思議さに気が付いています。

科学者と哲学者の心や意識についての考えの違いは、目の前に広がる世界の解釈に端的に現れるとお話ししましたが、両者の解釈がそれぞれどのようなものであるかを、心、身体、外界という観点から説明したいと思います。最初は、科学者が立脚している一般常識としての解釈を、そしてその後で、哲学者の解釈を説明することにします。

(1) 心、身体、外界の、一般常識としての解釈

私たちは日頃、自分自身という、単なる物体とは明らかに性質を異にする自らの心と身体を意識しつつ、自らを取り巻く広大な外界の中で生活しています。そして、科学や哲学による明確な定義などは持ち合わせていなくても、どの辺りに心があり、どこからどこまでが身体で、そしてどこからが外界かという、それらの間に存在するある種の境界をよく弁えています。そこで、心、身体、外界の境界をどのように線引きしたらよいかを、さして疑問を感じることなく行うことができます。

心

まずは、心についてです。心という言葉の示す内容は余りにも曖昧ですが、その基本は自分自身という自覚、つまり自己意識が存在している部分とでも言えるでしょうか。

心では、知、情、意という言葉で表されるような、いろいろな営みがなされています。例えば、ツーリングで辿るルートを地図を頼りに考えて決める、というときにみられる思考と意思決定、新緑の心地よい風の中、峠道を走り抜けるときにみられる情動、これらは全て心と呼ばれる部分で行われている営みです。

それらは何れも見ること、手で触ることもできない抽象的なものですが、しかし抽象的ではありますが、「では心は存在しないのか？」

と問われれば、存在しないと答える人などいないことでしょう。物質が存在しているのとはその存在の形態が異なるのは明らかですが、心は確かに存在しています。

では、心はどこに存在していると一般には考えられているのでしょうか。もっともここで問題とする「どこ」というのは、いわゆる心身問題とか心脳問題とかで議論されるような、心は脳のどの部分で発生するのかとか、心は脳のどの部分に存在するのか、というようなことではありません。外界という自分を取り巻く環境の中であって、また自分自身の肉体との関係において心はどこに位置づけることができるのか、位置づけられると考えられているのかという、ごく常識的な問い掛けです。

試しに、春先の穏やかな海辺の高台に立ち、春のそよ風を受けながら憩いのひとときを過ごしているという状況を設定し、あなた自身をその場面の中に置き、心はどこに存在するのかというこの問題に思いを巡らしてみましよう。

それには目を閉じてみるのがいいでしょう。目を閉じると視界が遮断され、外界を見ることはできません。それまでの光に包まれた多彩な状況が一変し、明るい薄灰色の世界に変わります。しかしそれでも、波の音、潮の香り、そして頬に感じるそよ風などで外界の様子を伺い知ることができます。また眼球のわずかな動きや、潮の香りが感じ取れる鼻腔や、口元のかすかな動きで、目、鼻、口などの位置を、またそれらを統合した形で顔の位置を知ることができます。

このような状況の中で考えてみると、心は、直接自分では見ることのできない顔の内側に位置づけられていると考えるのが自然ではないのでしょうか。思考、情動、記憶などからなるものを仮に心と定義したとすれば、心は姿、形のあるものではないのでどことは言いがらいますが、やはり顔の内側に位置づけられると言えるでしょう。少なく

とも、指先に心があるとか、頭上に広がる青空に心があるとかなどは、詩の創作などでみられる比喩的な表現としてなら別ですが、そう考える人はまずいないことでしょう。

このような常識的な形での心の位置付けは、少し考えを巡らせると当然いろいろと問題点が浮かび上がってくるのですが、一般常識としての心の在り処の解釈はこのようなものだと言えるでしょう。

身体

次は身体です。身体は心とは異なり、その存在は明瞭です。海辺の高台に立ち大地を踏みしめている足、眩しい陽の光を遮ろうとして目の上にかざした手、これら身体の前面に位置している足や手、それから胸や腹は視線を向けることで見て取ることができます。一方、背中や顔は鏡を使えば別として直接見ることはできませんが、しかしそれらの部分も身体の表面に存在する感覚器からの情報を手掛かりにして、その存在を知ることができます。

また身体の内側のことも、食物の摂取、消化、排泄という一連の過程を通して、また呼吸と心臓の活動という心肺機能を通して、伺い知ることができます。

心と身体は密接な関係を持っています。心は、身体の表面や内部に存在する感覚器から外界の情報を受け取り、それらをもとにして効果器を通じて外界に働きかけます。例えば心の命ずるままに周りのものを掴むことのできる腕、行きたいところに移動するための足、見たいもの聞きたいものに焦点を合わせるために向きを変える顔、光に反応して情報を受け取る目、音に反応して情報を受け取る耳、これらの感覚器と効果器を備えた身体は、心と外界を結ぶ橋渡しの役割を担っているとと言えます。生物学者のR. ドーキンスは、「生物体はDNAの乗り物だ」と表現しましたが、その表現を借りれば、「身体は心の乗

り物だ」とでも言えるでしょうか。

知、情、意の統合として考えられている心は物質ではありませんが、身体は肉体と呼ばれる通り、物質で構成された存在です。従って心とは別の性質を示すものではありませんが、しかし「私の身体」というように自分自身に絶えず付随するものであり、同じ物質であっても次に登場する外界とは性質を異にします。

外界

身体の外側には、外界と呼ばれる広大な広がりが存在します。身体は容積にして高々

80リットルほどしかありませんが、外界はその身体を包み込み、その周りに広大な広がりを見せています。先ほどと同様、春先の穏やかな海辺の高台にたたずみ、自分を取り巻く外界を見渡している情景を思い浮かべてみることにしましょう。

春先のすがすがしいそよ風を頬に受けて遠くに視線を向けてみましょう。すると、ごくわずかにカーブした水平線が空と海とを分けています。春の日差しの下、海は濃い群青色をし、場所によって微妙な色の違いを見せています。沖の方は一様な平面に見えますが、視線を手前に引いてくると穏やかな海も緩やかなうねりを伴い、浜辺では白い波頭が見えます。

空は春特有の霞がかった水色をしており、その真中を飛行機雲が一直線に伸び、その先端にはジェット機が銀色の光を撥ね返しています。130億光年の広がりを持つという宇宙に向けての無限の広がりを印象付けます。

足元から浜辺にかけては砂地の急斜面になっており、やせた砂地に海浜植物が深い根を下ろし、小さな黄色い花を咲かせています。波打ち際は老人が、孫と思われる小さな子供とボール遊びに興じていま

す。

これらすべてが外界であり、物質の世界と呼ばれているものです。

(2) 目の前に広がる世界の、哲学が示す解釈

一般常識として考えられている心、身体、外界という3つの領域がどのようなものであるかを表現してみました。これら3つの領域の境界はかなりはっきりとした一線で区切ることができます。そしてこのような区切り方は常識として広く受け入れられていることであり、ごく一部の人たちを除いて疑いの気持ちを持つことはないでしょう。事実、私たちは心、身体、外界をこのように解釈することで日々暮らしていますし、そこには何ら不都合が生じることはありません。

例えば、波打ち際で遊んでいる老人と子供のところに行って自分も一緒に遊ぼうとするとき、そこには彼らのもとに向かおうとする心の面での意志があり、意志に基づく身体の動きがあり、そして足を取られがちな砂地の急斜面という外界があり、この行動に伴う心、身体、外界の間に存在する一連の関わりは、全てが理にかなったものです。

しかし、哲学が示す解釈は、もっともすべての哲学者というわけではないでしょうが、それとは異なっています。つまり、心、身体、外界をこのように区切ることは誤りであり、そこに示された境界は、いわば見かけの境界に過ぎず、自分の身体も、自分の身体を取り巻く外界も、自分が心と感じている部分と同じく、全てが心の世界だとします。

私の考えも同じです。確かに春先ののどかな海辺を彩るさまざまなもの、水と塩化ナトリウムを主成分とする比重が1.03の海水、およそ80%の窒素と20%の酸素で構成された空気、細かく砕かれた石英や長石などからなる砂浜、露点に達して細かい水滴となった飛行機雲など、物理の法則に則った世界である物質の世界は確かに存在します。

また、身体の支柱となる骨格と、その上に構築された筋肉や腱、細胞に栄養物を運搬し老廃物を回収する血液の通り道である血管、身体中に配置された受容器からの信号を中枢に伝える感覚神経と、中枢からの命令を筋肉に伝える運動神経などで構成された、肉体としての身体は確かに存在します。

しかし、いまあなたの目の前に広がる世界、水色と群青色のコントラストを織り成す空と海、頬に心地よい感触をもたらし、町の空気とは明らかに異なる潮の香りを運んでくるそよ風、浜辺に向かって砂の急斜面を下りだしたあなたに向かって手を振っている老人、あなたに向かって走り出した子供、それらの全てを含んだ外界は物質の世界そのものではなく、見かけの物質の世界なのです。また、あなたの目の前に見えている、動かそうと思えば思いのままに動かせるあなたの身体は、肉体としての身体そのものではなく、見かけの身体なのです。外界と身体と心の中に引かれる境界は見かけの境界であり、外界も身体も、そしてもちろん心も、全ては同じ心の世界なのです。そこに他の人が居合わせれば、その人もあなたとほぼ同じ光景を目にするでしょうが、しかし、いまあなたが目にしている世界は、あなた自身の、あなただけの心の世界なのです。春先の穏やかな景観に接することであなたの心に生じたくつろいだ気持ちがあなた自身の、あなただけの心の世界のできごとであるのと同様に、いまあなたが目にしている世界はあなたの心の世界のできごとであり、あなただけの世界なのです。

荒唐無稽な話に思われることと思います。これほどまでに広大な空間が心の世界だとは、信じられないことと思います。もっともこの広大な空間が、脳という容積にして高々1.5リットル程度の中にあると考えるべきなのかは、断定を下しかねます。ただ、脳にしても、分子、原子のレベルで考えれば広大な広がりを持っているわけですから、

脳の中と考えることには異論があるかもしれませんが、脳によって生み出されていると考えることに問題はないように思われます。

理由はこれからお話していくことになりますが、何故そのような誤解、つまり目の前に広がる世界を物質の世界であると考え、また目の前に見えている身体を肉体としての身体であると考えようような誤解が生じるのかということ、実は私たちの脳は、自分自身の身体を含めた外界を心の世界に構築しているからなのです。そしてその構築された世界は、物質の世界の出来事とぴたりと同調するようにできているのです。そこであなたが、あなたの目の前に広がる世界を物質で構成された外界であると考えても、また、目の前に見えているあなたの身体を肉体としての身体であると考えて振る舞ったとしても、何ら不都合が生じないようにできているのです。脳によって生み出された心の世界は、その当の本人さえも欺いているわけで、それはいわば脳によって仕掛けられた難解なトリックとでも呼ぶべきものです。

難解なトリック

哲学者は、心や意識の真の有りが一般常識のそれとは異なることを理解していながら、それを多くの人たちに伝えるという啓蒙活動を行って来ていません。もっとも、ただ私が知らないだけのことで行われてきたのかもしれませんが、しかし、心や意識の本当の姿が、それほど多くの人達に理解されているわけではない現状からすれば、十分な啓蒙活動が行われてきたとは思われませんし、また功を奏してきたとも思われません。これまで哲学者は、心や意識がどのようなものであるのかというその結果を示すことはしていても、何故そうなのかを分かりやすく説明することはしてこなかったように思うのです。

何故そうしてこなかったのかと言えば、一つには、それを平易に説明することが非常に困難であることを挙げることができます。心や意識

については脳によってトリックが仕掛けられており、しかも二重、三重に仕掛けられていることから、脳によって構築された世界は、それに疑問を挟むことができないほど巧みなものに仕上がっているからです。

地球という余りに巨大な球体の上に暮らしていると、その全てのものが高速で回転運動しているにもかかわらずその回転運動に気づくことが難しいものですが、それと同じことです。見かけの物質の世界の中に見かけの身体が配置されるという、脳によって構築された世界が余りに巧みに構成されていることから、自らの心と、目の前に見えている自らの身体と、目の前に広がる外界とが分離していると解釈してしまい、正しい理解ができない状況に置かれてしまうのです。

心や意識の本当の姿を理解している哲学者であっても、その思索の始まりにおいては同じことだったと思います。まず目の前に広がる世界を物質の世界とみなすことに疑問を持ち、その後の長い年月をかけた思索の後に、それが見かけの物質の世界であるという結論に辿り着いたのであり、一本の糸を手繰るようにして正しい理解に容易に辿り着いたということではないはずです。

哲学のストラテジー

もう一つの理由は、プラトンやアリストテレスの古来より続いている、「哲学はあらゆる仮定や前提を廃して、森羅万象の根本原理を問う学問である」という、哲学の方法論上の問題が足かせになっているように思われるのです。確かに物事を分析する上において疑わしいものは全て疑ってみるという、その研究姿勢は正しいと思うのですが、また一方で問題をはらんだ研究方法であると言わざるを得ません。デカルトは疑いに疑った結果、「我思う故に我在り」の結論に達したと言われています。確かに疑えば疑うことができ、疑い尽くすことで結

論に辿り着くことができ、それはそれでいいのです。科学においても同じことです。ただ、疑うことで辿り着いた結論からその先の針路をどのように切り開いていくのかという段になると、あらゆる仮定や前提を廃するという立場が今度は逆に足かせになるように思えるのです。

科学は最初から完璧なものを目指そうとはせず、仮定や前提を設定してそこから研究を始めようとします。未知の現象を説明するときにはまず仮説としてモデルを作り上げ、それが現実の現象を上手く説明できるかどうかを検証し、上手くいかないときは仮説に修正を加えるという手続きを繰り返し用いるわけです。

この手法の具体例として、原子、分子の概念を考えてみるのがいいでしょう。目で見ることでも手で感じ取ることでもできない微少な物質の世界の解明に、原子とか分子の概念を仮説として取り入れ、それによって物質の成り立ちを説明しようとしてきました。その歴史的な経緯は中学や高校の科学の教科書に載っている通りです。原子、分子、素粒子などという、直接認識できない概念で現象を説明しようとする方法は問題だとする意見も一方ではありますが、幾人もの科学者の仮説の積み重ねによって今日の理解に至り、自然の法則を知る上で成功を収めています。

自然科学が大きな発展を遂げた原因の一つは、そのような方法論にあると思われます。全てのことが理路整然と理解できないにしても、仮定や前提を設定し、まずは分かる部分から明らかにしていこうとする姿勢が大切です。

本稿の方針

心の真の有り様についての探究を始めるにあたり、一つの前提を設けることとなります。それは物質の世界の存在を認めるということです。つまり私たち人間のような意識活動を営む生物が存在するしない

にかかわらず、物質の世界は存在するという前提です。デカルトは「我思う故に我あり」と語りましたが、我思う以前に物質の世界が存在しているとして、話を進めることになります。

この前提の上に立ち、目の前に広がる世界の理解から始めることになります。つまり、脳によって仕掛けられたトリックは難解であり、それを見破るには幾つかのハードルを越えなければなりません。心の世界の本当の姿を、最初から完全な形で説明するのは難しいと言わなければなりません。そこで、まずは目の前に広がる世界が物質の世界とは異なる世界であるという説明から始め、それを糸口として心の世界の説明へとつなげていきたいと思います。目の前に広がる世界が物質の世界ではないことが理解できれば、心の世界の本当の姿を理解するのも少しは容易になります。

常識から理解へ

今では小学生でさえ地動説を知っていますが、地動説が意味するところを実感として感じ取ることがほとんど不可能でしょう。例えば、地球が地軸を中心として回転している自転速度は、人が歩いているときの様なゆっくりしたものではありません。赤道付近では秒速460mにも達します。更に地球が太陽の周りを公転している速度は、秒速30kmにも達するのです。宇宙船地球号という表現がありますが、ロケットが地球を脱出する速度が秒速11kmほどであることを考えると、その呼び方も妙に納得のいくものとなります。

自転速度でも音速に匹敵する速度で西から東に向かって回転しているわけですが、それを日常の生活の中で実感することは不可能です。地震のときは別として、この微動だにしない安定した大地の上にあっては、とても実感などできようはずもありません。その原因の一つは、私達の感覚の世界からすると地球が余りに巨大すぎるという点にある

のではないのでしょうか。

私たちの心の世界についても同じことが言えそうです。心、見かけの身体、見かけの外界が余りに整然と構築され、自らが築いた世界の中に自分自身が入り込んでいるような状態にあり、かつ、構築された世界が物質の世界と同調していることにより、そのからくりに気が付かなくても不思議ではありません。しかし、如何にうまく構築された世界とはいっても、注意深く観察してみるとそこかしこに綻びがあります。それを糸口にすればトリックを見破り、誤解を解きほぐすことができます。

日常生活を送る上においては、一般常識としての心、身体、外界の解釈の方が便利でしょうが、しかし、心や意識を科学の立場から明らかにしようとするとき、今の常識としての解釈では新しいステージに辿り着くことはできません。350年ほど前に、地球と天体という私たちを取り巻く世界の解釈に大きな変化が生じ、天動説という常識から地動説の理解へと向かったように、心や意識についても常識的な解釈から脱して、正しい理解へと向かうべきときにきていると思うのです。

第1章

第2節 疑問、それは探究への入口

疑問から探究へ

ワトソンとクリックが、DNAが二重らせん構造をしているのを発見したのは1953年のことですが、その背景にはウィルキンスによるDNAのX線回折と、シャルガフによるDNAの塩基組成の解析と

がありました。X線回折による写真でDNAがらせん構造をしていることが予測され、また塩基組成の解析でDNAを構成する4つの塩基であるアデニンとチミンの量、そしてグアニンとシトシンの量がそれぞれ等しいことが分かっていました。不思議なのは、アデニンとチミンの量、そしてグアニンとシトシンの量が何故等しいのかということでした。

ワトソンはその点に着目し、塩基同士の水素結合を考慮に入れてアデニンとチミン、そしてグアニンとシトシンを組み合わせるときちんとは結びつくことに気が付きました。そしてクリックが理論的な検証を行うことによって、DNAは二重らせん構造をとることが判明し、遺伝の仕組みが明らかになりました。歴史上の偉大な発見の背景には、その現象に直面して不思議に思い、何故だろうという疑問に思う気持ちがあるものです。

もともと、日常のほんの些細な事柄においても、新しい発見の背景にはやはり不思議に思い、何故だろうという疑問に思う気持ちがあるものです。いつもの見慣れた街角にいつもとは違って長い行列ができていれば不思議に思います。「はて何だろう？」と疑問に思う気持ちが生じ、行列の先頭まで行ってそれが何のための行列であるかを調べてみようとか、並んでいる人に尋ねてみようとする気持ちが生まれるというものです。

何事においても、不思議に思う気持ちや疑問に思う気持ちの存在しないところに探究心は生まれません。これから心の世界の真の有り様について検討していこうとしているわけですが、常識としての心、身体、外界の解釈について疑問を感じることはなければ、この問題を探究しようとする意欲は生じません。

長年慣れ親しんできた心、身体、外界についての解釈は、疑問を挟む余地のないほどまでに強固なものとなっています。心の世界の本当の

姿を理解できるかどうかは、心、身体、外界についての常識としての解釈に疑問を感じられるかどうかポイントになります。

疑問の感じ易さ

ある現象を前にして不思議に思い、疑問を感じるようになる背景には、その現象が自分には馴染みがないとか、自分の持っている知識では説明不可能であるとかの事情があるものです。

一口に「疑問を感じる」といっても、ものごとによって疑問の感じやすさには違いがあります。疑問の感じ易さと、その問題の解明のし易さとは単純に比例するものではありませんが、便宜的に次のような4つのレベルに場合分けをし、常識を疑うことの難しさについて考えてみたいと思います。

レベル1　すぐに疑問に思えるタイプ

一つ目は、ひとたびその現象を目にすれば、人に指摘されるまでもなくその不思議さに気がつき、たちまちのうちにして疑問を感じるようなタイプの現象です。

「日食」

レベル1の例として日食という現象を挙げることができます。ご存知のように日食は、太陽、月、地球が一直線上に並び、太陽が月によって遮られることによって生じるものです。月は地球の周りを一日一回公転しているわけですから、毎日、太陽、月、地球の位置関係になります。しかし、月の公転軌道が地球の公転軌道に対して傾いていることから、日食はそう頻繁に生じるものではありませんし、太陽全体が月に隠れる皆既日食ともなると更に希であり、また地球のごく一部の地域でごく短時間観測されるだけです。

太陽全体が月に隠れ、真昼が一変して夕暮れ時のような薄暗さに変

わる皆既日食は、神秘的なことこの上ないようです。遠い異国の地で生じるともなれば、それを見るためには多額の費用と時間がかかるわけですが、それを惜しむことなく大勢の人たちが訪れることから、その神秘性がよく分かります。理屈の分かっている現代でさえ人々の心を捉えて離さないわけですから、理屈の分からなかった遠い昔においては、不思議さを通り越し、世界の終わりを告げる不気味な現象として捉えられていたのも無理からぬことではないでしょうか。

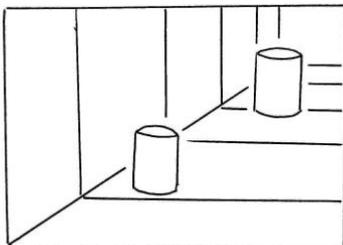
「月の錯視」

日食と同じく天体にまつわる現象ですが、レベル1のもう一つの例として「月の錯視」と呼ばれる現象を紹介してみましょう。

月の錯視というのは、満月の夜、地平線上に昇ったばかりの月が大きく見えるという現象を言います。折しも木立の陰から満月に魅せられて変身した狼男が現われるのではないか、と思うぐらいに劇的に大きく見えることがあったりもします。これはすごいということでカメラを引っ張り出して写真に撮ってみるのですが、生憎大きく写ったりはしません。中天にある月、つまり頭上にある月を撮ったときと同じ大きさでしか写ることはありません。

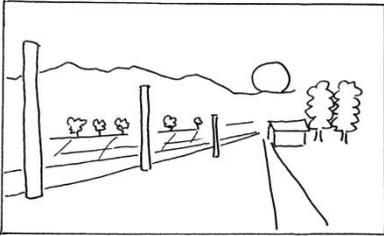
「月の錯視」という言葉を聞いたことがなくても、実際に体験した

図 1-1(a)



人は多いものと思います。夕暮れ時、西の空に沈みかけている太陽でも同じ経験をすることがあります。このときの錯視量、つまり地平線上の月を大きく見る度合いは年齢の低い子供の方が大きく、大人になるにつれて小さくなると言われています。

図1-1(b)



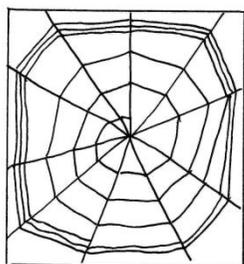
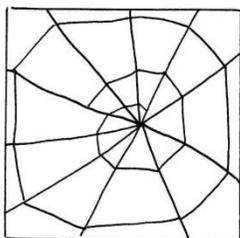
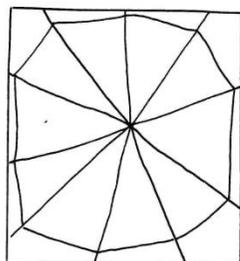
日食は物理的な現象ですが、月の錯視は心理的な現象です。地平線上の月が何故大きく見えるのかというその理由はまだはっきりしていません。図1・1(a)に示すように、遠近感のある状況においては「遠くにあるものの方が大きく見える」という規則性があります。事実、2つの円柱は同じ大きさなのですが、見かけ上遠くにある円柱の方が大きく見えます。月の錯視も、これに関係した現象ではないかという解釈が有力視されています。つまり、図1・1(b)に示すように、地平線までにはその途中に様々な対象物が存在していることから、何もない中天までよりも遠くに感じられ、その結果地平線上の月が大きく見えるというわけです。

日食とか月の錯視のような直ぐに疑問に思える現象というのは、日頃余り体験することのない、非日常的な現象であることが多いようです。

レベル2 人に指摘されると疑問に思えるタイプ

2つ目は、その現象を目にしても、そこに秘められている不思議さに自分では気づかないものの、人に指摘されると「なるほど、言われてみればその通りだ」と、その不思議さが理解でき、疑問に思えるタイプです。

図1-2



「クモの巣」

例えば、「クモの巣」という例を取り上げてみましょう。クモはねばねばした糸を使って巣を造り、昆虫などの小動物を捕らえて生きています。網を張って獲物を待ち伏せ、八本の細長い足を不気味に操るその姿からして余り好かれている生き物とは言えないようですが、しかしその巣造りの巧みさには目を奪われます。大きく隔たったところに糸を掛けたり、規則正しく放射状に糸を張る巧みさには、「よくもまあ！」と思わず感嘆してしまいます。本能という一言で片づけてしまいがちですが、確かに巣を造ろうとする欲求は本能でしょうが、しかし巣をかける技術は高度な知能の成せる技ではないでしょうか。

ここで指摘したいクモの巣の不思議さは、「クモはねばねばした巣で昆虫を捕えているのに、クモ自身は何故自分の巣に捕われてしまうことがないのだろうか？」ということです。皆さんはこのような疑問を持たれたことはないでしょうか。日頃ごく当たり前のことと思っているクモの巣のねばねばも、それとクモとの関係の不思議さを指摘されると、その背景にある疑問点を理解するのに苦労することはないでしょう。

クモの尻の部分には出糸突起と呼ばれる6個のイボがあり、それらのイボの先には糸を出すたくさんの管がついていて、使い道の異なる数種類の糸を出すことができるようになっています。

巣を造る行程を示したのが図1・2です。まず大まかな外枠を造った

あと、真中から四方八方に向けて放射状の糸を張り、次に中心から外側に向けて螺旋状に糸を張っていきます。これは足場糸と呼ばれるもので、粘り気はありません。この足場糸を張り終わると今度は逆に、その足場糸を伝って粘りのある横糸を外側から中心に向けて細かく張っていきます。このとき、クモの種類によっては、足場糸を順次外しながら横糸を張っていくという念の入れようですから、驚き入ります。

巣の外枠や足場糸、それから放射状の糸などは粘り気がなく、最後の横糸だけが粘り気があります。クモが何故自分の巣に捕まってしまうことがないかについてはまだ定説はないようですが、縦糸を伝って移動するようにしていること、また、足の裏から分泌される特殊な油で足裏が保護されていることで自らの巣に捕われてしまうことがない、という考えが有力視されているようです。

このタイプの現象は、現象そのものは日常的で目新しいものではないのですが、その中に潜む不思議さに普段気付くことはありません。しかし、人に指摘されるとその不思議さを理解するのに苦労することはありません。

レベル3 人に指摘されても、何故不思議なのかが直ぐには理解できないタイプ

3つ目は、レベル2と同様にその現象を目にしても自分から不思議さに気づくことはありませんし、また人に指摘されても、それが何故不思議なのかが直ぐには理解できないようなタイプの現象です。

「物体の落下」

例えば、物体が落下するという現象は如何でしょうか。かのI. ニュートンは、リンゴが木から落ちるのを見て万有引力の法則を思いついたと言われています。その真偽はともかくとして、物体が上から下に

落ちるのは日常茶飯の現象であり、重いリンゴが下から上に昇っていくのであればいざ知らず、上から下に落ちたとしても不思議に思う人はまずいないでしょう。更に、「物体は何故落ちるのだろうか?」という疑問点を指摘されても、不思議に思う人はいないでしょう。「重いから落ちるのだ」という、常識に裏打ちされた理屈が用意されているからです。

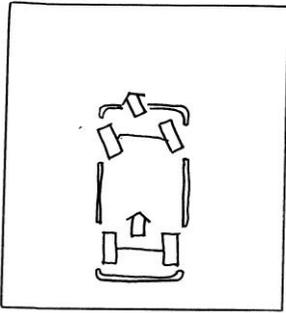
重いから落ちるという理屈は常識に適っており、間違っていない。しかし、重ければ何故落ちるのかという点は何ら説明されてはいませんし、またそれは、重いものほど速く落ちるという推測を生みやすいものです。中学の理科の実験で、空気を抜いて真空に近い状態にされたガラス管の中を、石と羽毛が同じスピードで落下するのを目撃した経験があれば、重いから落ちるという理屈の危うさに気がつくことでしょう。

物体が落下する理由としてニュートンは、物体の間には引力が働いているからだと説明しました。引力という概念を用いたことで全てが解決したと考えるわけにはいかないでしょうが、物体が落下することの不思議さに気が付き、疑問を持ったところに、ニュートンの並々ならぬ非凡さがあるのでしょう。

「ハンドルと車の運動」

レベル3の別の例として、「ハンドルを切ると車は回転運動を起こす」という現象は如何でしょうか。日頃見慣れている現象であり、疑問に思うことはないでしょう。ハンドルを切れば前輪の向きが変わり、それにともない車は向きを変えらるということ、ごく当たり前のことであり、小学生でも知っている理屈が用意されています。そのどこに

図1-3



不思議なところがあるのか、直ぐには思い当たらないことと思います。

しかしこの現象も一歩踏み込んで考えてみると、不思議な現象であることが分かります。図1・3は、ハンドルを切って前輪の向きを変えた状態を示しています。このまま車を動かせば左に回転運動を起こします。しかし、たとえ前輪が左を向いているからと言っても、前輪はあくまでもタイヤの向いている向きに真っ直

ぐ進もうとするだけですし、後輪もまたその向きに真っ直ぐに進もうとするだけのことです。前輪と後輪を別々に見た場合、そのどこにも車が回転運動を起こす要素はありません。矢印で示すように、前輪はあくまでもその向いている方向に進もうとしており、後輪は後輪でその向いている方向に進もうとしているだけのことです。

実は、前輪と後輪で進もうとする方向が異なる時両者は互いに干渉を起こし、前後輪のタイヤは、わずかずつですが外側に向けて滑る運動を起こします。その滑るという運動の結果、車は向きを変えることができるのです。タイヤが滑るといって意外な感じがしますが、タイヤが滑ることがなければ回転運動は起こりません。

4輪駆動車では前輪、後輪の両方に駆動力が伝えられています。その結果タイヤのグリップ力が強くなり、雪道などの滑りやすい路面を安定して走ることができます。しかし開発当初の4輪駆動車では、ハンドルを大きく切って小さな半径のターンをしようとする時、スピードが落ちて上手く走れなくなるという現象が起きたものです。これをタイトコーナブレーキング現象といいます。4輪駆動車では前輪、後輪のグリップ力が強すぎるためにタイヤが適度に滑るということがなく、そのために上手く回転運動を起こすことができず、速度が落ち

てしまったのです。

レベル3の現象はレベル2の現象と同様に、日頃見慣れた現象ですが、レベル2の現象とは異なり、その背後に潜んでいる問題点が簡単には理解できないタイプです。何故理解できないかと言えば、その現象を裏付ける常識としての理屈が備わっているからです。つまり、「物体は重いから下に落ちる」とか、「前輪が向きを変えるから車は曲がる」とかの常識にかなった理屈が用意されており、その理屈で現象の本質を理解できるとは言えないものの、その理屈が間違っていないことから、そこに潜む問題点に気付くことができないタイプです。

レベル4 レベル3 + 誤った理屈に裏付けされたタイプ

4つ目は、レベル3よりも更に厄介なタイプです。レベル4もレベル3と同じく、人に指摘されても何故不思議なのか俄かには理解できないタイプであり、またその現象を説明するかのようない理屈が用意されています。しかしレベル3とは異なり、その理屈は単なる思い込みに過ぎない間違った理屈である、というケースです。

世に手品とか奇術と呼ばれるものはたくさんあります。そこに秘められているトリックは知っている者の思い込み、つまり誤った理屈を巧みに利用したものが多いものです。手品を目にすればたちまち不思議に思うわけですから、その点からするとレベル4のケースにはあてはまらないかもしれません。しかし、そこに秘められているトリックそのものは、たとえ人に指摘されてもその不思議さが分からず、また不思議さを覆い隠してしまうような間違った理屈が用意されているものであり、レベル4の説明には好都合です。そこで、トランプによる手品の例を一つ紹介してみることにしましょう。

「トランプのカード当てのトリック」

これからお話するトランプのカード当ての手品は初歩的なものですが、初歩的とはいっても、仕組みられているトリックは巧妙です。手品師があなたに向かって手品をするときの手順を、図1・4を使って説明しますので、図を参照しながら手品のトリックを見抜いてみて下さい。

図1-4

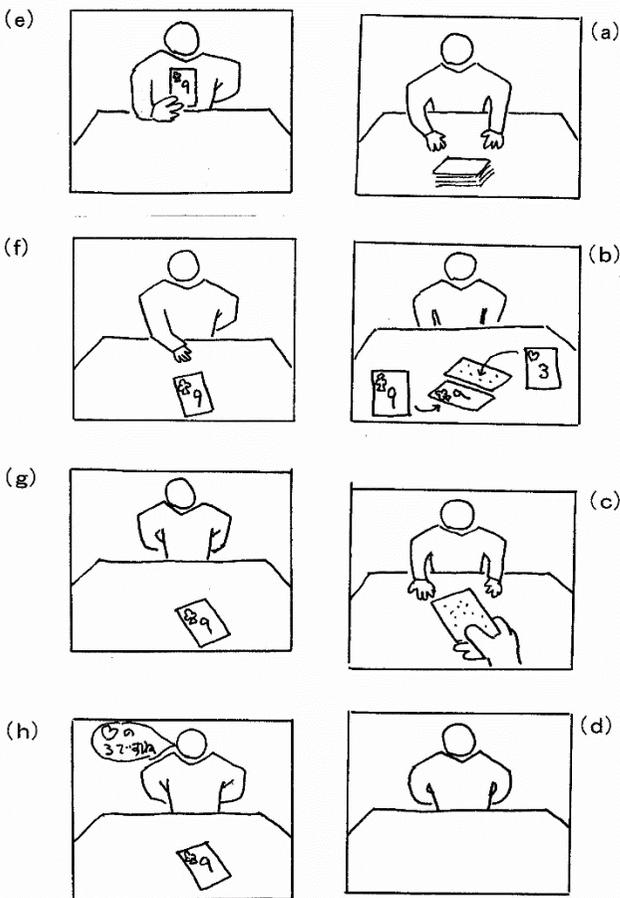


図1・4(a) まず手品師は客であるあなたにトランプを渡し、その中から当てて欲しいカードを1枚選ぶように言います。それから別のもう1枚のカードを選び、これはどのカードでも構わないのですが、それら2枚のカードを数字が描いてある面で重ね合わせ、当てて欲しいカードが上になるようにして渡すように指示します。

図1・4(b) そこであなたは当てて欲しいカードとしてハートの3を選び、そうでない方としてクラブの9を選んで両者を重ね合わせます。

図1・4(c) そして、手品師に渡します。

図1・4(d) 手品師はカードを受け取ると両手を背中に回し、カードが何であるかを吟味しているような素振りをします。

図 1・4 (e) その後、2枚重ねになっていた下の方のカードを右手に持ってあなたの前にかざします。

図 1・4 (f) そして、「こちらのカードではないですね」と念を押し、カードをテーブルの上に捨てます。

図 1・4 (g) 再び手品師は右手を後ろに回し、両手でカードの表面をなぞっているような素振りをします。

図 1・4 (h) それから、さももったいぶった言い回しで、「それはハートの3ですね」と見事に言い当てるのです。

この手品では、カードに細工はされていませんし、鏡などの小道具は一切使いません。図 1・4 の一連の内容からして、当てて欲しいカードは手品師の後ろに回した左手の中にずっとあると思われるから、手品師がカードの数字を見る機会は、カードを手品師に渡したその瞬間だけ（図 1・4 (c)）だと思われます。ところが何回やっても、そのときに盗み見ているようには思われません。事実、手品師はそのときカードを見たりはしません。実は、手品師がカードの数字を目にできるチャンスが1回だけあるのです。お分かりでしょうか。しばらく考えてみて下さい。

種明かしは P 26 でお話します。それを読んだ後に、次の項を読み進めるようにして下さい。

心の世界にまつわる常識を疑うことは難しい

第1章第1節の「心の世界、その本当の姿」の項でお話した常識としての心、身体、外界についての話は、正にレベル4の問題です。私たちは、目の前に広がる世界を物質の世界であると思い、そこに見える対象を物質そのものであると思い、また目の前の自らの身体を肉体としての身体であると思って生活しており、またそう考えることに表面上何ら不都合は生じません。そして心、身体、外界についての常

識としての解釈には、それを裏付ける理屈がいろいろと用意されています。例えば、目の前の対象は持てば重さや硬さが感じられる、目の前の自らの身体は自らの意思で動かすことができる、などの理屈です。

しかし、それらの理屈は誤った理屈です。そしてそれらの理屈の誤りに気付くことはとても難しいのです。「背中に回した左手にカードが握られている」という、単なる思い込みに過ぎない誤った理屈を見破るのが難しいのと同じことです。

しかし、表面上何ら不都合が無いとはいっても、もちろん全く無いというわけではありません。注意深く考えを巡らしてみれば、「目の前に広がる世界は物質の世界である」という命題も、そのほころびを示すに足る反例がいろいろと見つかります。もっともそれらの反例も、反例そのものが余りに日常的なことから、疑いを入れる余地のないものとして理解されているために、反例でありながら何故反例なのかさえも簡単には理解できないのが実状です。

世の中には不思議な現象がいろいろとありますが、不思議さに気付かないような現象にこそ、実は本当の不思議さが隠されているのではないのでしょうか。

不思議さに気付くかどうかを試してみる

これから分析していこうとしている目の前に広がる世界についての話は、全てレベル4の現象です。現象に潜む問題点を指摘されたときに、疑問を感じるかどうかポイントになります。問題点の詳細な分析は第3章から行うことになりますが、手始めに次のような問い掛けに疑問を感じるかどうか試してみてください。

問1 何故、目の前の対象に色がついているのか？

「何故、目の前の対象に色がついているのか？」という問い掛けは

如何でしょうか。目の前の対象に色が見て取れても、不思議に思う人はまずいないでしょう。物質の世界は色彩豊かな世界である、という先入観を持っているからでしょう。しかし、意外に思われるでしょうが、物質の世界に色は存在しません。「現に、目の前の対象に色がついているのではないか」と思われるでしょうが、物質そのものには色は付随していません。

原子、分子のレベルで考えていただくと分かりやすいのではないのでしょうか。原子や分子の表面に色がついているわけではありません。また、物質の世界で対象から伝わってくるのは電磁波です。物質は特定の波長の電磁波を反射しますが、その電磁波が網膜に到達し、脳で情報処理されて始めて色が生み出されます。

電磁波は色そのものとは直接的な関係はありません。「目の前の世界が物質の世界であり、目の前に見えている対象が物質であると言うのであれば、脳で生み出された色が何故目の前の対象の表面を彩っているのだろうか？」という問い掛けです。

ここで「光」ではなく「電磁波」という言葉をあえて用いましたが、それは光という言葉は、赤い光、青い光、などのように、色と密接な関係を持つ言葉であり、そのような先入観を避けるためです。赤い電磁波、青い電磁波と言い換えれば、そこの事情がお分かりいただけるかと思います。

問2 何故、指の先端になめらかさを感じるのか？

「何故、指の先端になめらかさを感じるのか？」という問い掛けは如何でしょうか。滑らかなテーブルの表面を指でなぞると、指先にツルツルとした感触が生じます。「指先には感覚器があるのだから当然だろう」という答えが返ってくるものと思います。

しかし、「触覚は指先からの信号が脳に伝えられて始めて生じるも

のであり、脳で生じた触覚が何故肉体である指の先端に感じられるのだろうか？」という問い掛けです。更に注意してみると、ツルツルした感触は指先の側ではなく、無機物であるテーブルの表面の方に感じられるではありませんか。

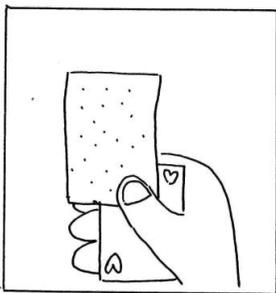
この節のまとめ

何ごとにおいても、疑問に思う気持ちのないところに探究しようという意欲は生じない。心、身体、外界についての一般常識としての解釈には、もっともらしい理屈が用意されていることから、それに疑問を感じるのは容易でない。しかし、疑問に感じることができるかどうか、心の世界の探究への最初の関門となる。

種明かし

種明かしをしましょう。図1・4(e)で手品師は2枚重ねになっていた下の方の不要なカードをあなたに示しましたが、このとき手品師は当てて欲しい方のカードを背中の後ろに回した左手には持っていないのです。図1・5に示すように、不要なカードをあなたに示すとき、右の手の平にカードを隠し持って読み取っているのです。

図1-5



背中に回した左手にあたかもカードを持ち続けているかのように振る舞っているところが、この手品のトリックです。「背中に回した左手が怪しいのではないかと、たとえ指摘されたとしても、不思議には思わなかったことでしょう。「背中に回した左手にカードが握られている」という常識としての理屈があるからですが、しかしそれは

結局のところ、単なる思い込みに過ぎない間違っただ理屈なわけです。

第2章 見るという行為の探求

第1節 2つの世界を絵で表す

2つの世界を表す2つの絵

第1章第1節「心の世界、その本当の姿」で、本稿の方針は、「物質の世界が存在する」という前提に立ち、その上で、「目の前に広がる世界の理解から始める」ことにある、とお話しました。

つまり物質の世界は、人間のような高次の精神活動を営む生物が生存するしないにかかわらず、それに先立って存在しているという前提に立つということ、そしてその前提の下で、目の前に広がる世界、つまり目を開ければそこに色彩豊かに三次元的な広がりをもって立ち現れ、目を閉じれば瞬時にして見えなくなる世界は、物質の世界とは異なる別の世界であることを明らかにし、それを手掛かりにして心の世界の本当の姿を探り出そうというわけです。

何事も絵で表すとものごとは理解し易くなります。初めて訪ねるお宅への道順も、言葉で説明してもらうよりも駅からの地図を描いてもらうことで、その道筋は一段と分かり易くなります。「目の前に広がる世界」であるとか、あるいは「物質の世界」であるとかなども、絵で表すことが理解の助けとなるはずです。そこで話の始めにあたって、「目の前に広がる世界を表す絵」と「物質の世界を表す絵」の2つをまず定めておきたいと思います。

もっとも皆さんは、ここで疑問を感じることでしょう。一般常識では

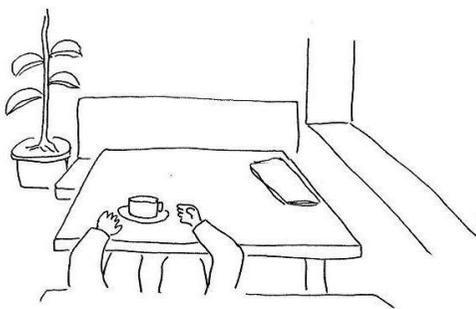
目の前に広がる世界は物質の世界そのものだと考えられているわけですから、そのような立場からすれば、2つの絵を定めるという提案は奇妙なことに、また無意味なことに思われることでしょう。「目の前に広がる世界は物質の世界なのだから、2つの世界を区別する必要はないし、また区別できるものではない。目の前に広がる世界を表すにしろ、物質の世界を表すにしろ、目の前に広がる情景をそのまま描けばよいだけのことだ」ということでしょう。

確かに、一般常識の立場からしてそのような考えを持たれるのはもっともなことなのですが、「目の前に広がる世界は物質の世界とは異なる世界である」ということを明らかにしようとしているわけですから、両者を区別できる絵、あるいは区別できるとは言えないまでも、両者を区別する絵を取り決めておきたいと思います。

「目の前に広がる世界」を絵で表す

図2-1

目の前に広がる世界



まずは図2・1をご覧ください。画面に配置されたものからして、これは喫茶店の一角を描いたものであることが分かると思います。正面一番手前にはシンプルな造りのテーブルがあり、その上にはコーヒーカップと、もう読み終わったのかそれともこれから読もうとしているのか、四つ折りにされた新聞が傍らに置

かれています。

どこにでもある喫茶店のいつもの光景で、これだけだと何の変哲もないのですが、それらに加えこの絵には、テーブルの上と下にこの席についている人物のものと思われる腕と膝の一部が描かれていま

す。腕や膝が描かれていることから一種奇妙な印象を持たれるかと思いますが、それらの様子からしてこの絵は、この席に座っている人自身の目を通して、その人の目の前に広がる光景を描いたものであることが分かると思います。

このような構図で描かれた絵そのものはまず目にはありませんが、私達が常日頃自分自身の目を通して見ている光景と同じあることからすれば、もっとも馴染みの深い構図の絵であると言えます。あなた自身をこの絵の人物に重ね合わせて見ていただくとよく分かると思います。

これまでたびたび、目の前に広がるという言葉を使ってきましたが、目の前に広がる世界とは正にこの様な情景を言い表したものです。あなたの、あるいは私の目の前に広がる世界のことです。瞼を開ければ色彩豊かにそこに広がり、視線を移せば更にそこに連続して新たな広がりを示し、そして瞼を閉じれば瞬時に見えなくなる世界のことです。それはあなたの、あるいは私独自の情景であり、他の誰にも取って代ることのできない情景です。

このように、あなたが、あるいは私が外界を見ているとき、あなたに、あるいは私に見えている世界を目の前に広がる世界と改めて定義することにします。そして、「目の前に広がる世界を表した絵」は、図2・1のように、絵の上部に「目の前に広がる世界」と断り書きをすることにします。

目の前に広がる世界が心の世界なのか、それとも一般常識の示す通り物質の世界なのかの議論は別にして、目の前に広がる世界がこのような形で表現できることに異論はないものと思います。

「物質の世界」を絵で表す

ものごとを絵に表すに際しては、「何を」、「どのように描くか」、

を決める必要がありますが、前項でお話した目の前に広がる世界を表す際には、選択の余地はありません。「何を」という点については、あなたの目の前に見えている様々な対象を描くことになり、「どのように描くか」という点については、見えているままに遠近法に則って描くことになります。他に方法はあります。

それに対して物質の世界を表す際には、「何を」は決まっているものの、「どのように描くか」ということは決まっています。つまり、これまでの話から分かるように、目の前に広がる世界が物質の世界とは異なるものであることを説明するために絵を利用しようとしているわけですから、「何を」という点については、少し持って回った言い方ですが、目の前に見えている対象と同じものを物質として描くことになります。

一方、「どのように描くか」という点については、更に「描く角度」と「描き方」の2つの点から分けて考える必要があります。例えば「目の前に広がる世界を表す方法」では、目の網膜に映った情景を基に描いているわけですから、「描く角度」はその人物の目の位置から描いていることになり、また、目に映った情景は凸レンズによって一点に収斂することによって得られる像ですから、「描き方」は遠近法に則って描くことになります。

このように「目の前に広がる世界を表す方法」では、その人物の目の位置から遠近法に則った描き方をしていることになります。絵を利用するのは、先ほどもお話したように、目の前に広がる世界が物質の世界とは異なることを説明するためですから、その点からすると、物質の世界を表すには「目の前に広がる世界を表す方法」と異なる方法で描く方が都合であることになります。つまり、その人物の目の位置とは異なる角度から、かつ遠近法とは異なる形で物質の世界を描く方が、両者を区別する上で都合が良いことになります。

図 2-2(a) 物質の世界

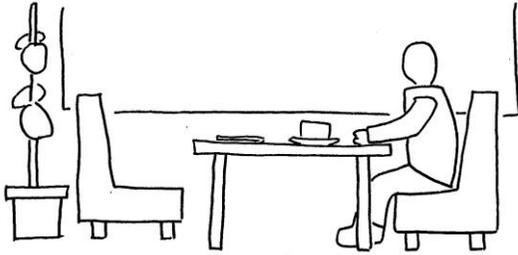


図2-2(b) 物質の世界

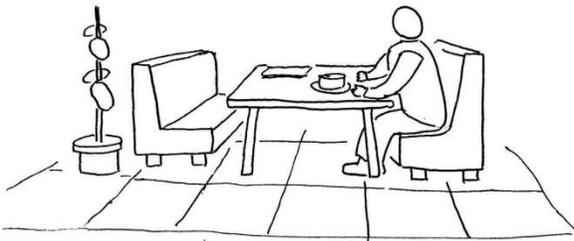


図2-2(c) 物質の世界

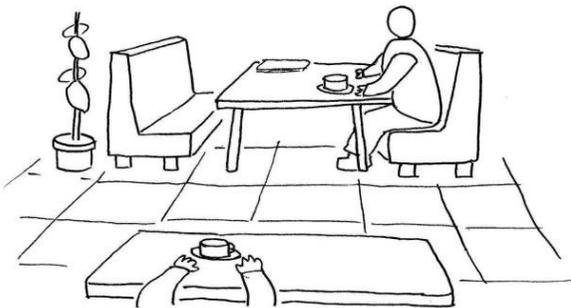


図 2・2 (a)は、物質の世界を「目の前に広がる世界を表す方法」と異なる方法で表してみたものです。図 2・1 に登場したコーヒーカップを見つめている人物の姿を、コーヒーカップとテーブルと共に遠近法を用いないで真横から描いています。ちょうど、設計図の側面図のようなタッチになっています。

もしこれを同じ横から描くとしても、少しリアルに描こうとして遠近法に則った描き方をすると図 2・2 (b)のようになり、それはある観察者の目を通して描いた絵になります。事実、この絵には観察者の身体が描かれていませんが、視線を手前に引いてくれば、図 2・2 (c)に示すように観察者の身体の一部が画面に現れてきます。

物質の世界を絵に表すという作業には、当然そこに人間が関与すること

になります。物質の世界を一旦人間が知覚し、そして絵に表すという手順を踏むことで一種のフィルターを通して描くことになり、つまりは誰かの視点を通して表現することになります。それらの要素をできるだけ排除したいという意図のもとに描かれたのが図 2・2 (a)であり、設計図のような筆致で物質の世界を表そうとしているわけです。今後、物質の世界を描いた絵には、絵の上部に「物質の世界」と断り

書きをすることにします。

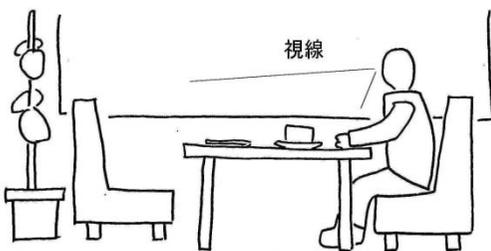
では、「目の前に広がる世界を表すのと同じ方法で物質の世界を描くとうなるか」ということですが、それはこの節の話の核心となる部分です。次の項でお話しすることになります。

表現方法にこだわる理由

何故これほどにまで目の前に広がる世界と物質の世界の表し方にこだわるのか、と疑問に感じられるものと思います。それは、これから目の前に広がる世界が物質の世界とは異なる別の世界であることを説明していくことになるわけですが、その説明の段階で両者を区別できる、あるいは区別できないまでも区別する絵を取り決めておく必要があるからです。

2つの世界が異なる世界であることを見抜くのはそもそも難しいことなのですが、その原因の一つは、2つの世界を同じような表現方法で描くことにあるのです。更に言えば、目の前に広がる世界を表す方法に問題があるのではなく、物質の世界を表すのに的確な表現方法が存在していないところに問題があるのです。

図 2-3 (a) 物質の世界



「何を言うか」と思われることでしょう。「目の前に広がる世界は物質の世界なのだから両者は区別できなくて当然である、区別する表現方法がなくて当然である」と思われる

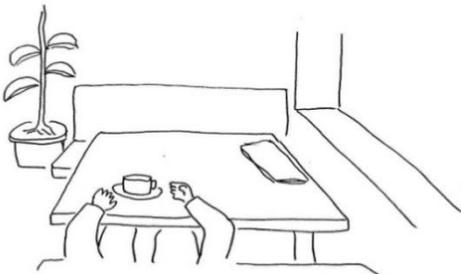
ことでしょうか、実は問題はそこにあるのです。その点について説明してみましょう。

図 2・3 (a)は図 2・2 (a)と同じものであり、前項で取り決めたように物質の世界を表した絵です。情景を横から描いています。ここに描か

れている人物を始めとしてコーヒーカップ、新聞、テーブルは物質としての対象を表しています。いまこの人物の目に注目すれば、2本の半直線で挟まれた部分は物質の世界においてその人物の目の前に広がる世界ですから、これも目の前に広がる世界と表現することが可能なわけです。つまり、物質の世界においても目の前に広がる世界を定義することができるわけです。

図2-3(b)

物質の世界



更に、物質の世界をこの人物の目の位置から遠近法に則って描いたとしましょう。すると、図2・3(b)に示すような絵が得られることになり、前々項で定義した目の前に広がる世界を表した図2・1と全く同じものが得られることになります。もちろん、図2・1はその人物の目を通して、見るという行為によって得

られる情景であるのに対し、図2・3(b)は、その人物の肉体としての目の位置から描かれた物質の世界の情景であり、両者は別のものです。「目の前に広がる世界＝物質の世界である」と考えてしまう原因はいろいろとありますが、その一つは、物質の世界を表した図2・3(b)の絵を、目の前に広がる世界を表した図2・1の絵に重ね合わせ、両者は同じであると解釈してしまうところにあります。確かに、2つの絵は一見したところ全く同じ絵ですが、その意味するところは同じではありません。これら2枚の絵にある条件を加味して分析すると、全く別の絵であることが判明します。つまりは、2つの世界は異なる世界であることが分かるのです。それについては第3章からお話することになります。

さて、物質の世界を表す方法として、図2・3(a)に示すような設計図

のようなタッチの絵を示しましたが、話の都合上敢えて図2・3(b)のような、その人物の目の位置から遠近法で描いた絵を用いることもあります。その際には絵の上部に「物質の世界」という断り書きを必ず記すようにし、目の前に広がる世界を表す図2・1と混同が生じないようにします。

また、図2・3(a)の2本の半直線で挟まれた部分のように、その人物の肉体としての目に着目したときの、物質の世界での目の前に広がる世界に言及するときは、必ず「物質の世界で定義される目の前に広がる世界」と表現し、先に定義した目の前に広がる世界と混同されないようにします。従ってただ単に、目の前に広がる世界と表現されている場合は、図2・1を使って定義した「目の前に広がる世界」のことだと解釈して下さい。

また「目の前の」、「目の前に」、「目の前に見えている」という表現も同様です。これらは何れも目の前に広がる世界における「目の前の」であり、「目の前に」であり、また「目の前に見えている」の意味で用います。例えば、目の前のコーヒーカップ、目の前にあるコーヒーカップ、目の前に見えているコーヒーカップ、というように用いますが、何れも目の前に広がる世界に存在するコーヒーカップに言及しているときに使います。この点を喚起するために、ときおり「目の前の」というように傍点をふって注意を促すことにします。

図2・3(a)に示すように、肉体としての身体の目に着目して、物質の世界での「目の前の」とか「目の前に」とか「目の前に見えている」という意味で使うときは、必ずその旨断り書きをします。例えば、「物質の世界での目の前のコーヒーカップ」というように使うことにします。

実は奇妙な物質の世界

物質の世界と心の世界という性質の異なる2つの世界が存在するという考えに対しては、さしたる異論はないものと思います。事実、これら2つの世界は、どこかに探しに行かなければ見つからないというような特殊なものではありません。物質の世界は私たちの身の周りに、そして心の世界は私たち自身と伴に存在しています。

物質の世界と心の世界についてのごく一般的な常識的な解釈からすれば、これら両者を表すのにどちらが難しいかといえば、物質の世界を表すのが容易で心の世界を表すのは難しいということになるでしょう。確かに一般常識では、私たちの目の前に広がる世界は物質の世界そのものであると解釈されているわけですから、物質の世界を表すには目の前に広がる光景をただ単純に絵に描くか、あるいは言葉で説明すればいいだけのことだからです。

例えばそれが繁華街の一角であれば、幾何学模様のタイルで敷き詰められた歩道、若葉を茂らせた街路樹、しゃれた服装で行き交う人々、街の風景を映し込んだショーウィンドウのきらめきなど、私たちの目の前に3次元的な広がりを持って存在している世界を絵に表せばいいだけのことです。三歳の頃ともなれば自分の両親など身の周りの親しい人物の姿形、興味を持っている自動車やぬいぐるみ、それに家や木などを絵に描くようになるわけですが、そこに描かれた情景はそのまま物質の世界ということになります。

それに対して心の世界は、常識的な解釈では知、情、意という言葉で表されるような抽象的な世界ですから、絵に描くのも言葉で表すのも容易ではありません。例えばフロイトの精神分析の解説にみられるような、心をイド、自我、超自我の3層構造で表したような類のものであり、いわば暗い井戸の中を覗き込むような極めて曖昧で抽象的で、掴まえ所のないものという印象でしかありません。

しかし、物質の世界をよくよく考えてみると、それは一般常識とは異なる奇妙な世界であることが分かります。中学や高校の理科の教科書に載っているように、物質は原子や分子から構成されているわけですが、原子の中心には原子核が、そしてその周りには電子が存在しています。ここで注目すべきことは、原子の直径が 10^{-8} c m であるのに対し、原子核の直径は $10^{-13} \sim 10^{-12}$ c m に過ぎず、原子の大きさを国立競技場に喩えるならば、原子核は競技場の中心に置かれたゴルフボール程度に過ぎないということです。つまり、原子は隙間だらけだということになります。地球上には宇宙から絶えず様々な宇宙線が降り注いでおり、私たちの身体を貫いているとのことですが、これだけ隙間があることで、宇宙線が身体を構成する原子に衝突する確率は驚くほど小さなものになります。

従って物質の世界を表すには、先ほどの図 2・2 (a) のような設計図のような表現方法ではなく、隙間だらけの絵を描く必要があることになります。もっとも、「そうする必要はない。物質の世界の微細な構造は眼の分解能を超えているので見ることはできないのだ」という反論がなされるかと思えます。「見えないだけのことだ」ということでしょうが、目の前に広がる世界を物質の世界だとする一般常識の立場からの発言としては、これは奇妙な論理となり、自己矛盾に陥ることになります。何故自己矛盾になるかという理由を説明するには予備知識を必用としますので、第 3 章第 3 節の「対象の二面性」の項で改めて取り上げることにします。

この節のまとめ

2 枚の絵によって表される 2 つの世界、つまり目の前に広がる世界と物質の世界は互いに異なる世界である。一方は心の世界であり、もう一方はその名の示す通りの物質の世界である。両者の違いを見極め

ることができれば、心の世界の本当の姿が理解できるようになる。

第2章

第2節 見るという行為の3つの要素

見るという行為の3つの要素

日頃、見るという行為はごく自然に行なわれていますが、見るという行為はただ単に対象の存在を知るというだけのものではありません。その背後には見るという行為に関連する様々な分野との間で、高度なレベルで情報のやり取りが行われています。

それは言葉遣いからも伺い知ることができます。同じ見るという言葉でも、「時計を見る」ということから時刻を読み取ること、「地図を見る」ということから地形の様子を読み取ること、「相手の表情を見る」ということから相手の心理状態を読み取ること、「本を見る」ということから文章の内容を読み取ることが意味されています。見るという行為に伴う視覚情報の処理には、大脳新皮質のおよそ30%が関係しているとも言われており、見るという行為が様々な分野との関連の中で行われていることがよく分かります。

見るという行為について分析を行なっていくにあたり、見るという行為は次のような3つの要素から成り立っていると定義して、話を進めていくことにします。

まず1つ目は、自らの身体の外に広がる物質の世界に、見るという行為の対象が存在しているということです。これを「見ている対象」と呼ぶことにします。これは当然のことながら物質です。今しがたの

例で言えば、時計、地図、顔、本ということになります。「見ている対象」が物質の世界に存在していなければ、それは実体の無い夢を見ているようなものであり、あるいは何かのほずみで幻覚を見ているようなものです。

2つ目は、見るという行為を行っている身体が存在しているということです。ここでの身体という言葉の意味は、外界からの情報を目で受け取ることにより、その情報が脳に運ばれて処理され、ある種の生理的、物理的な状態が生じるという、そこまでの部分を指します。これを、少々奇妙な表現ですが、「見ている身体」と呼ぶことにします。これは肉体としての身体であり、更に言えば物質としての身体です。「見ている身体」が存在しなくても、確かにそこに対象は存在し続けることではありますが、見るという行為は生じるはずがありません。外界からの情報を処理する身体があればこそ、見るという行為が行われます。

3つ目は、見るという行為によってもたらされる、何かしらの結果が存在しているということです。これを「見た結果」と呼ぶことにします。その意味するものが何であるかの解釈は難しいところですが、見るという行為によって、脳の生理的、物理的な現象とは異なる非物質的な現象（心理現象）が得られることを言い表したものです。例えば先ほどの例について言えば、一般的な解釈ではありますが、時刻であったり、地形図に盛り込まれた情報であったり、相手の心理状態であったり、あるいは文章の内容であったりするわけです。一般的な解釈とは言っても、少し狭い解釈ではあるものの、それらが「見た結果」の一部であることに間違いはありません。

これら3つの要素が揃ったところで見るという行為が完結する、と言えます。外界に対象が存在し（見ている対象）、そこから反射された光が目を受けとめられて網膜で電気信号に変換され、それが脳に

伝えられて情報の処理が行なわれ（見ている身体）、対象についての結果を得る（見た結果）、ということになります。これら3つの要素の中で「見た結果」の解釈が一番の難問であり、その解釈を巡ってこれから話を展開していくことになります。

もっとも、これら3つの要素を表した言葉は耳慣れないだけに、違和感を持たれるのではないのでしょうか。特に「見ている身体」という表現に対してその思いは強いことでしょうか。ここでの身体は、心とか意識とかを含まない肉体としての身体を意味しているわけですから、見ているという表現は使うべきでないかもしれません。ただ単に「身体」としてもいいのですが、身体の働きとしては、見るということの他に、例えば聞くとか、話すとか、触るとかいろいろあるわけで、それらの中で見るという行為を行なっている、ということを示すために、このように表現してみました。「見ている対象」も単に「対象」としてもよいところですが、同じ意味合いからこのように表現してみました。これから頻繁に出てくる言葉です。面倒ではありましようが、慣れていただけたらと思います。

では次に、前節で定義した物質の世界と目の前に広がる世界を表す絵の中で、見るという行為を構成するこれら3つの要素が、どのようなものであると解釈されているかを調べてみることにしましょう。

「物質の世界」での、見るという行為の3つの要素

図 2-4



図 2・4 は、ある人物がテーブルの上に置かれたコーヒーカップを見ている様子を表したものです。絵の上部に「物質の世界」と記してあるように、ここに描かれているテーブルもコーヒーカップも、そして新聞も、すべては物質とし

てのテーブルであり、コーヒーカップであり、そして新聞です。またこのテーブルに座っている人物も、「何を当たり前のことを」と思われることでは、その人物の肉体としての身体が描かれていることとなります。

「コーヒーカップを見る」という行為に伴う「見ている対象(物質)」、「見ている身体(肉体)」、「見た結果(心理現象)」の3つの要素を図2・4の絵の中に探してみましょう。ここに描かれている人物にとって「見ている対象」はコーヒーカップであり、「見ている身体」はこの人物そのものです。見ている対象が一方にあり、また一方でそれを見ている身体が存在しているわけです。これは単純な話です。

では、3つ目の「見た結果」は何でしょうか。このテーブルに座っている人物が実は人間型のロボットというのであれば、目にCCDカメラが組み込まれていて、それに接続されたコンピュータによって情報が処理され、幾つかの選択肢の中からコーヒーカップという出力が得られれば、それが「見た結果」ということになるでしょう。しかし、人間の場合にはそう簡単には済みません。

「見た結果」の解釈は様々だと思えます。ただ人間の場合、見るという行為の最終段階で意識が伴うという点においては、ほぼ異論がないと思えます。事実、先の例にもあったように、一般的な解釈では、それは時刻であったり、地形図に盛り込まれた情報であったり、相手の心理状態であったり、あるいは文章の内容であったりするわけで、それらはいずれも意識化されたことがらです。

外界からの情報は脳で処理されるわけですが、それと意識とがどのように結びつくのかは分からないものの、意識はここに描かれた人物のいわば頭の中のできごとであることから、「見た結果」は物質の世界を表したこの絵の中に表れることはありません。ごく当たり前のことですが、この点は注意しておかなければなりません。

「目の前に広がる世界」での、見るという行為の3つの要素

図2・5(a)、(b)は共に、目の前に広がる世界を表したものです。ある人物の手と膝の一部と、テーブルとコーヒーカップ、それに新聞とが描かれており、描かれている対象は図2・4と同じですが、その意味するところは異なります。図2・4は物質の世界を描いたものであるのに対し、図2・5(a)、(b)は、この絵に描かれている手と膝の持ち主の目を通して得られる情景が描かれています。

目の前に広がる世界についての本論での解釈は、一般的な解釈とは根本的に異なっています。そこで図2・5(a)では一般的な解釈について、図2・5(b)では本論での解釈について説明することにします。

(1) 一般的な解釈

図2-5(a) 目の前に広がる世界
<一般的な解釈>



まずは一般的な解釈、つまり目の前に広がる世界は物質の世界であるとする立場から考えてみましょう。ご自分を図2・5(a)の人物に重ね合わせて考えてみると分かりやすいでしょう。まず「見ている対象(物質)」ですが、これは目の前に見えている対象です。自らの腕を置いているテ

ーブルであったり、香ばしい香りを漂わせるコーヒーカップであったり、傍らに置かれた新聞であったりします。一方「見ている身体(肉体)」は、ここに描かれている自らの身体です。ここに描かれているのは手と膝だけですが、これに自らを重ね合わせたときの自分自身の身体です。

ここまでは分かりやすいでしょう。それもそのはずです。目の前に広がる世界は物質の世界であると解釈しているわけですから、前項で

行なった物質の世界での分析と同じことを繰り返しているだけのことで、ただ描く角度が異なるので、対象物の配置が違っていただけのことです。「何とも無意味なことを」と思われることかもしれませんが、しかしここはしばらくご辛抱いただき、付き合っていていただくことにします。

では「見た結果（心理現象）」は何になるのでしょうか。先ほどもお話したように、一般的な解釈の下では、「見た結果」は時計を見ることで得た時刻であるとか、相手の顔を見ることで得た相手の心理状態であるとかの、頭の中の朧げなイメージであったり、対象に関する知識であったりするわけです。従って、目の前に広がる世界は物質の世界だと考える立場からすると、先ほどの図2・4の場合と同様に、図2・5(a)の中にも「見た結果」が現れることはありません。

(2) 本論での解釈

図2-5(b) 目の前に広がる世界
<本論での解釈>



では、本論での解釈はどうかと言いますと、いまお話した一般的な解釈とは完全に異なります。目の前に広がる世界は物質の世界とは異なる世界である、更に言えば、目の前に広がる世界は心の世界であると解釈しているので、目の前の対象は全て見るという行為によってもたらされた「見た結果」

であることになります。

つまり図2・5(b)に示すように、目の前に見えているコーヒーカップは「見ている対象（物質）」ではなく「見た結果（心理現象）」であり、視野の手前に見えている手と膝は「見ている身体（肉体）」の一部ではなく、これも「見た結果（心理現象）」ということになります。

す。コーヒーを前にしてくつろいだ気持ちがあるが、コーヒーによってもたらされた心の世界のできごとであるのと同様に、目の前に見えているコーヒーカップも、身体の一部である手と膝も、見るという行為によって得られた「見た結果」であり、心の世界のできごとであることになります。では、「見ている対象（物質）」と「見ている身体（肉体）」はどこにあるのか、ということになりますが、「見ている対象」と「見ている身体」は物質であり、目の前に広がる世界は物質の世界とは異なる世界であると解釈しているわけですから、それらはこの絵に現れることはありません。

「観念論か！」と思われるかもしれませんが、そうではありません。第1章1節でもお話したように、物質の世界が存在するという前提のもとで話を進めています。その前提のもとで話を進めていても、目の前に広がる世界は物質の世界ではなく心の世界である、という結論が得られるのです。

あるいは、「見ている対象も見ている身体も存在しなくて、どのようにして見ることができるのか」と思われるかもしれませんが、「見ている対象」も「見ている身体」も物質であることから、目の前に広がる世界を表した図2・5(b)には現れてこないだけのことであり、物質の世界には当然ながら存在しています。事実、物質の世界を表した図2・4には存在しています。

目の前に広がる世界の本当の姿は難解なトリックによって覆い隠されており、そう簡単に見抜けるものではありません。これから幾つかのステップを踏むことで、その本当の姿を徐々に明らかにしていこうと思います。

目の前の対象は二面性を持つ

言葉は心理活動と深い関わりを持っています。他人の心や意識の内容を外部から直接伺い知ることはできませんし、またその人自身も自らの心や意識の内容を直接他者に伝えることはできません。自分の心や意識の内容を表現するには、言葉の助けを借りることになりますが、その結果言葉は、私たちの理解に先立ち心や意識についての本質を捉えていることがあるものです。

のちほど第3章第3節で改めてお話することになりますが、目の前の対象、あるいは言い換えて目の前に見えている対象は、一般常識では「見ている対象（物質）」と解釈されているわけですが、ときにはそうと気付かれることなく、本論での解釈のように「見た結果（心理現象）」であると解釈されることもあるものです。つまり、目の前の対象は見るという行為の2つの要素を合わせ持つという二面性を有しており、それは言葉遣いから窺い知ることができます。

見るという行為に関しては、「～を見る」と「～が見える」という2つの表現方法があります。「～を見る」という表現は、網膜の中心に像を結ぼうとして視線をその対象に向けて焦点を合わせるというように、見るという行為の身体的な動作に力点を置いた表現であると言えるでしょう。そして、対象に視線を向けて焦点を合わせるという意味から、目の前の対象は「見ている対象」であると解釈されているのが分かります。例えば「コーヒーカップを見る」と言った場合、物質としてのコーヒーカップに視線を向けるという身体的な動作を表していると言えるわけで、目の前のコーヒーカップは「見ている対象」であると解釈されています。

それに対して「～が見える」という表現は、見るという行為によってある結果が得られたということ、つまり「見るという行為の結果、見ることができた」という意味合いがありますから、それは「見た結果」

を表していると言えるでしょう。例えば「コーヒーカップが見える」と言った場合、見るという行為によってコーヒーカップという像が得られたことを意味しているわけで、このときの目の前のコーヒーカップは「見た結果」であると解釈されていることになります。

何気なく使っている「～を見る」と「～が見える」という表現ではありますが、目の前の対象はときに「見ている対象」として、ときに「見た結果」として解釈されているようであり、言葉は、私たちの理解に先立ち、目の前に広がる世界の本質を鋭敏に感じ取っているようです。

この節のまとめ

目の前に広がる世界に隠されたトリックは巧妙なだけに、それを見破るには細心の注意が必用である。見るという行為には「見ている対象」、「見ている身体」、「見た結果」の3つの要素がある。最初の2つは物質であり、最後の1つは物理現象ではなく、心理現象である。

第3章以降では、これら3つの要素と前節で話した2つの図を使い分けて話を進めることになる。いま取り上げられている話題はどの要素についてなのか、そしてどちらの世界についての話なのかに、十分注意して欲しい。

注：次の第2章第3節は、視覚の情報処理がどのように行われているかについての、ごく初歩的な話です。従って、読み飛ばしていただいても、本稿の内容の理解には支障はありません。

第2章

第3節 見るという行為の物理的、生理的過程

はじめに

外界の対象で反射した光が目には到達し、眼球の凸レンズで屈折されて網膜に上下左右が反転した像を結ぶまでが、見るという行為における物理的過程であり、その後、網膜で光の信号は電気信号に変換されて中枢に伝えられ、そこで情報の処理が行われるまでが生理的過程となります。

本稿の主題である「心はどこにあるのか」という問題を探究する上で、これらについての深い知識は格別必要としません。従ってこの節では、これらの話に深入りするつもりはありません。視覚の情報処理の流れの概略をお話することで、視覚の情報処理が一般に考えられているものとは異なるということをお伝えするだけに留めるつもりです。

見るという行為の物理的過程

外界の情報を生体内に取り込むには、その媒体となる信号を利用することになります。分かりきったことではありますが、外界の対象そのものを生体内に取り入れているわけではありません。視覚では、光を介して外界の情報を取り入れます。外界の対象で反射した光が目には到達し、凸レンズによって網膜に外界の対象の逆さまの像が結ばれますが、私たちが手にしているのはその網膜像であって、外界の対象そのものではありません。

視覚機能の優れている点は、凸レンズを用いることで外界の広範囲に渡る情報を一度に取り入れることが可能だという点です。しかも身体から遠く離れた対象の情報を取り入れることが可能です。触覚は、

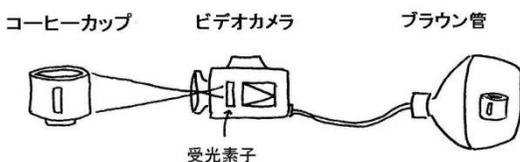
身体と接触している対象のごく一部の情報しか取り入れられないわけですから、それと比べるとその優位な点がはっきりします。

動物には目が2つありますが、そのことによって視野が広がります。草食動物では目が顔の左右についていることで視野が広くなり、敵の接近をいち早く察知することが可能です。ウサギは顔を正面に向けたままで、ほぼ360度に近い視野を確保できると言われています。それに対して肉食動物では目は顔の正面に並んでついているので、視野は180度程度であるとされますが、その代わり両目の視野が重なり合っていることから奥行きを把握する能力に優れているとされています。肉食動物では獲物までの正確な距離を把握する能力が必要とされますが、そのためには視野の広さを犠牲にしても両目が正面に付いている方が有利なわけです。

見るという行為の生理的過程

外界の対象が網膜上に像を結ぶ様子は、フィルム式のスチルカメラの機構によく喩えられます。つまり、目のレンズがカメラのレンズに、網膜がフィルムに喩えられるわけです。しかし光の信号が網膜で電気信号に変換されることを考えれば、スチルカメラよりもビデオカメラに喩える方がより現実に即していると言えるのではないのでしょうか。つまり、網膜を含めた眼球がビデオカメラに、更には眼球と大脳の関係はビデオカメラとテレビ受像機の関係に喩えられそうです。

図 2-6(a)



ビデオカメラには、図 2・6 (a) に示すように、光を受ける部分に CCD 素子などの受光素子があり、光を電気信号に変換します。一方テレビ受像機のブラウン管には、電子線を受けると発光する感光素子が並んでいます。受光素子

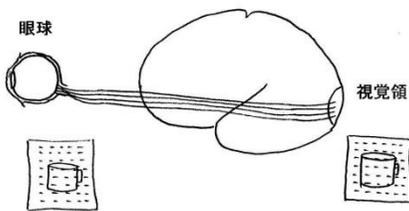
と感光素子の間には一体一の対応関係があり、受光素子で得られた光の強弱や色の情報は電子線を通して感光素子に伝えられます。もっとも一対一の対応関係にあるとはいっても、受光素子と感光素子のそれぞれが信号線で結ばれているわけではありません。受光素子で光の信号が電気信号に変換され、その変換された電気信号は受光素子の一方の端から他方の端まで順次読み取られ、一本の信号線によってテレビ受像機に転送されます。テレビ受像機では信号の空間配列に基づいて電子線をブラウン管に照射し、映像を再現します。

人間の目も同じような仕組みになっているものと、一般には思われているのではないのでしょうか。つまり図2・6(b)に示すように、網膜には一億個ともいわれるたくさんの視細胞があり、それらは

規則正しく並んでいる。一方、中枢にも脳細胞がやはり規則正しく並んでいて、視細胞と脳細胞とは一体一の対応関係にあり、それぞれが神経細胞で結ばれている。そこで外界の対象が視細胞の上に像を結ぶと、視細胞から中枢に向けて電気

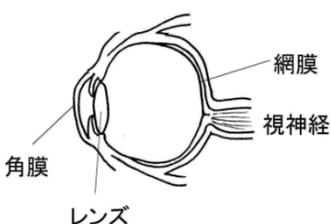
信号が伝えられ、網膜像と同じパターンで脳細胞が興奮し、外界の像が再現される、というように考えられているのではないのでしょうか。しかし現実の視覚の情報処理は、それとは全く異なっています。

図2-6(b)



網膜

図2-7(a)



まず網膜についてですが、図2・7(a)に示すように、網膜は眼球の内側に貼り付くかたちで眼球と一体になっている組織です。網膜には竿体と錐体と呼ばれる2種類の視細胞があります。竿体は円柱形をしており、その大部分は網膜の周辺部に

分布しています。弱い光にも反応できるという特徴がありますが、色には反応しません。一方錐体は円錐形をしており、そのほとんどが視野の中心部に分布しています。明るい光にしか反応できませんが、色に反応できるという特徴を持っています。

視細胞に光が当たると、視細胞に含まれる色素の構造に化学的な変化が生じて視細胞の電位が上がり、それが一定値（閾値）を超えると電気信号（インパルス）を発します。中枢に向けて電気信号を送り出すのは神経節細胞であり、図2・7(b)に示すように、視細胞と神経節細胞の間には3種類の神経細胞があり、相互に複雑な結びつきを持っています。そのため、神経節細胞の段階で既に情報の処理が行われています。

図 2-7(b)

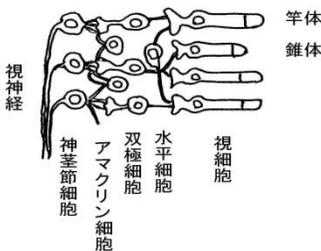
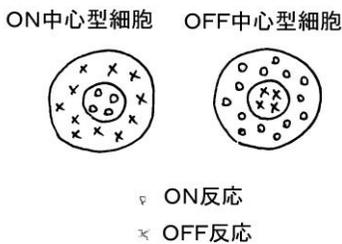


図 2-7(c)



つまり、神経節細胞は光の強さに単純に反応するわけではなく、図2・7(c)に示すように、光が中心に当たり周辺部には当たっていないときに電気信号を発するON中心型細胞と呼ばれるものや、逆に光が周辺部に当たり中心部に当たっていないときに反応する

OFF中心型細胞があります。このような光に反応する領域を受容野と呼びますが、網膜上には受容野が規則的に並んでいます。

視細胞の機能は大変優れており、1個の視細胞に1個の光粒子が到達しただけでも光を感じ取ることができるとされています。また、接近した2個の点を別々の点として識別できることを分解能と呼びますが、分解能は視細胞の密度よりも高いとされています。

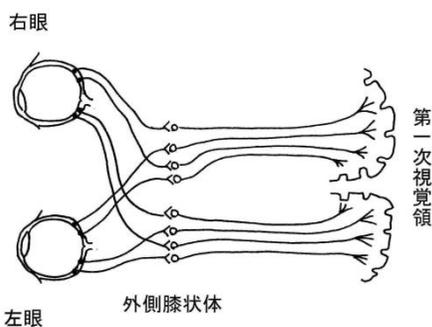
視細胞は網膜の中心部に圧倒的に多く分布しており、周辺部では少なくなっています。従って、視野全体にわたって外界が鮮明に見えて

いるわけではなく、鮮明な像が得られるのは中心部だけです。試しにこの本の1個所を凝視したままで、数 cm 離れたところの文字を読むかどうか試してみてください。ほんの数 cm 離れただけで、活字であることは分かるものの、何の文字であるかは分からないと思います。人の顔の写真で試してみると、更に鮮明に体験できると思います。

神経伝達経路と視覚野

網膜から中枢に至る神経経路を示したのが図2・8です。網膜からの視神経は、網膜の左右半分ずつが一まとまりになり、外側膝状体に進みます。ここでシナプスを介して視神経の乗り換えが行なわれます。左右の網膜の左半分からきた視神経は左側へ、右半分からきた視神経は右側へと進み、それぞれ大脳の後頭部にある第一次視覚野と呼ばれる領域に進みます。第1次視覚野は他の大脳皮質と同様に6つの層から成り立っており、表面から下に向かって第I層から第VI層までに分類されています。外側膝状体からの神経は第IV層に入ります。

図 2-8



D. ヒューベルとT. ウィーゼルによって1950年代末から発表されたネコの第1次視覚野についての一連の研究は、画期的なものでした。彼らはネコの第1次視覚野に微少な電極を挿入し、スクリーン上に呈示された光の点や、あるいは黒い点に対する反応性を調べました。第1次視覚野の神経細胞も、網膜の神経節細胞と同じように光の点や黒い点に対して反応するものだと、当初彼らは考えていました。ところが予想に反し、それらの刺激に対しての反応は一定していませんでした。

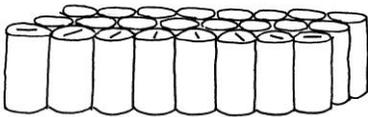
刺激の呈示はスライドで行なうようになっていましたが、あるとき

ガラス製のスライドがたまたまプロジェクターの光を横切り、黒い影がスクリーン上を横切ったとき、神経細胞が激しく反応するということがありました。つまりその神経細胞は、特定の傾きを持つ直線に対して反応していることが分かりました。

網膜の段階で既に情報の処理が行なわれていることから、第1次視覚野においても何らかの情報の処理が行なわれているだろうと予想は

図 2-9

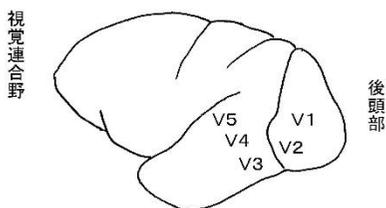
第1次視覚野の神経細胞層



されていたものの、ここまで進んだ処理が行なわれているとはそれまで考えられていなかっただけに、彼らの研究は従来の視覚情報の処理の考えを根本から変えることになりました。

神経細胞が反応する線の傾きには選択性があり、図 2・9 に示すように、ある特定の傾きに対して同じように反応する細胞がほぼ垂直に並んでおり、それらの細胞群が円筒形の構造をしていることから、これをコラムと呼んでいます。各コラムに属する細胞は反応する線の傾きが異なっており、水平方向で 0.5 ミリから 1 ミリ程度の範囲で 0 度から 180 度回転してもとの角度に戻るような構成になっていることが分かっています。

図 2-10



その後の研究で、図形の角に対して特徴的に反応する神経細胞や、図形の動きに対して反応する神経細胞、あるいは色に対して反応する神経細胞などが見つかっており、それらの細胞群はやはり円筒形の構造をしていることが分かっています。

す。

第1次視覚野（V1）の前方には視覚前野と呼ばれる領域があり、第2次視覚野（V2）から第5次視覚野（V5）までが分類されて

います。図 2・10 に示すのはサルの視覚経路についての模式図ですが、対象の形や色についての情報は $V1 \rightarrow V2 \rightarrow V3 \rightarrow V5$ という経路を辿って前頭部に位置する視覚連合野へ運ばれ、一方、対象の動きや立体視については $V1 \rightarrow V2 \rightarrow V4$ という経路を辿ってやはり視覚連合野へと運ばれ、そこで情報の統合が行なわれているのだろう、ということが明らかになりつつあります。

この節のまとめ

見るという行為の物理的、生理的過程はスチルカメラに喩えられることが多いが、実際の情報処理の仕組みはそのような単純なものではない。対象の特徴が抽出され、それから統合される、というステップを踏んで行なわれているようである。

3 章 心についての常識の解体

第 1 節 目の前の対象は物質か？

はじめに

ここで改めてお断りしておかなければならないのは、「目の前の」とか「目の前に」という言葉の意味についてです。先に第 2 章第 1 節「2 つの世界を絵で表す」の P27, 28 でお話ししたように、ただ単に「目の前の」とか「目の前に」と表現したとき、それは、あなたの、あるいは私の目の前に広がる世界でのことを表しており、物質の世界の話ではありません。ご注意いただきながら読み進めていただけれ

ば幸いです。

目の前の対象 = 物質か？

私たちは自分の心と、その心とは切っても切り離せない身体を伴って、現実の世界とでもいうべき物質の世界の中で生活しています。

ある日曜日の昼下がり、気分転換のために馴染みの喫茶店でコーヒーを飲もうと家を出る。静かな住宅街には家、立ち木、看板など見慣れた光景が広がっている。日曜日の午後とあって、買い物にでも行くのか家族連れとすれ違う。バス通りに出ると車が行き交い、聞こえてくる音も騒々しいものに変わる。サンシェードを下ろした喫茶店のドアを開けるとカランというカウベルの音がして、「いらっしゃいませ」とマスターの声が出迎えてくれる。窓際の席に腰を下ろし、いつものブルーマウンテンを注文する。腕を伸ばしてマガジンラックからスポーツ新聞を取り出し、昨日の高校野球の結果に目を通す。

このように、私という存在は肉体としての身体と密接な関係を保ちながら物質の世界の中で暮らしているわけで、これは紛れもない事実です。物質の世界が存在するという前提の下にこれまでも話を進めてきたわけです。

この前提の下で是が非にも提起しなければならないのが、目の前に広がる世界は物質の世界ではないし、目の前の対象は物質ではないし、そして、目の前に見えている自らの身体は肉体としての身体ではない、ということです。この理解が、「心はどこにあるのか？」という問題を解き明かすための出発点になるからです。

今しがたの話为例にとれば、家、立ち木、看板、バス通り、喫茶店、新聞などは全て物質として存在し、家族連れ、マスター、それに自分自身は、それぞれ自らの肉体としての身体を持って存在し、それらの全てを収める物質の世界は確かに存在しています。しかし、いまあな

たに、あるいは私に見えている家、立ち木、看板、バス通り、喫茶店、メニュー、新聞などは全て見かけの物質であり、家族連れ、マスター、それに自分自身の身体は全て見かけの身体であるということです。

日常の生活においては、目の前に広がる世界を物質の世界だと考え、目の前に見えている自らの身体を肉体としての身体だと考えていても、そのどこにも矛盾を感じることはありません。太陽が東の空から昇り、ぐるりと一回りして西の山の彼方に沈むと考えても矛盾を感じないのと同じことです。

しかし、心の世界の本当の姿を理解しようというのが本稿の目的です。それには、目の前に広がる世界は物質の世界ではなく見かけの物質の世界であることを理解することが必要であり、それを足掛かりとすることで心の世界の理解へと進むことができます。それにはまず、第一段階として「目の前の対象＝物質である」という一般常識に疑問を持っていただく必要があります。疑問に思う気持ちの存在しないところに、探究しようという意欲は生まれてきません。

それでは、目の前の対象、あるいは目の前に見えている対象と言い換えてもいいでしょうが、これを物質と考えると矛盾が生じる例を挙げ、皆さんに疑問を感じていただきたいと思います。

間違い探しのパズル

図 3-1(a)

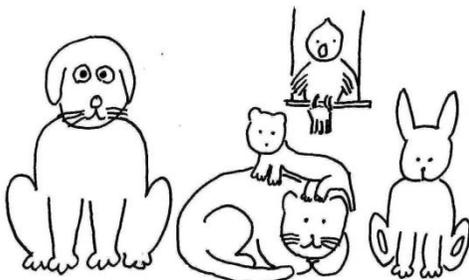


図 3-1(b)

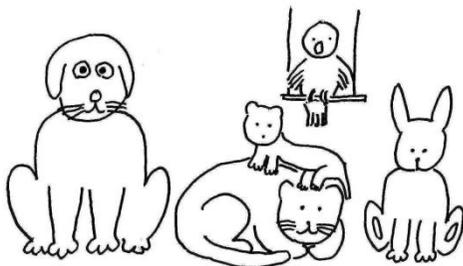


図3・1に示すのは、雑誌などで見かける間違い探しというパズルです。元になる絵に対し、写しの絵には元の絵と異なる部分があり、その異なる部分を探し出すというものです。これはパズルですから2枚の絵はとてもよく似ており、その違いを探し出すのはそれなりに骨の折れる作業となります。

間違い探しのパズルは正にそれがパズルであることから、2枚の絵には必ず違うところがあります。違う部分を探し出す方法としては、2枚の絵を幾つかの部分に分けて交互に見比べるのが一般的ですが、もし2枚の絵を重ね合わせて透かして見ることができれば、より容易に見つけ出すことが可能でしょう。2枚の絵が同じであれば両者はぴったりと一致するはずですし、違う部分があれば両者の間に食い違いが見つかるはずです。

目の前に広がる世界が一般常識の示す通り物質の世界なのか、それとも物質の世界とは異なる別の世界なのかは、物質の世界と目の前に広がる世界を表した2枚の絵を、重ね合わせてみることで明らかにすることができます。因みに図3・1においては、止まり木に止まったオームの頭に違いがあります。

色に対応する物理的な性質

目の前の世界に彩りを添えるものに色があります。普段は色のもたらす影響について余り関心を払うことはありませんが、その存在意義の大きさに驚くことがあります。例えば往年のモノクロームの映画をテレビで観ているとき、観ているときはさして違和感を持たないものの、CMに変わった途端に色彩がもたらす映像の豊かさに感嘆するものです。あるいは、新緑の頃の若葉のみずみずしさ、夕立の後すっきりと晴れ上がった空にかかる虹、全山朱や黄に染まった山々など、人々に憩いや感動を与えてくれることもあります。

色に対応する物理的な特性は電磁波の波長で表すことができます。波長が380～770 nmまでのものが可視光（光）と呼ばれています。それ以上波長の短い電磁波は紫外線と呼ばれ、一方波長の長い電磁波は赤外線と呼ばれます。

電磁波が物質に当たると、物質は特定の波長の電磁波を吸収し、それ以外の電磁波を反射するという性質を持っています。目の前の対象はそれ固有の色を持っているわけですが、反射された電磁波はその対象の色そのものとは直接的な関係ではないものの、間接的な関連を持っています。例えば緑色植物はその名の示す通り緑色をしていますが、緑色植物の葉は440（青紫色）～660 nm（赤色）の波長の電磁波を吸収し、550 nm前後（緑、黄色）の波長の電磁波を反射しているからです。

このように色は電磁波の波長と密接な関係がありますが、色そのものは物質の世界には存在しません。燃えるような赤、深海のような群青、萌えるような黄緑、と表現されるところの色は、物質の世界のどこにも存在しません。色そのものは心理的な現象であり、電磁波が網膜に達して電気信号に変換され、脳に到達して始めて生み出されます。

ここで留意すべきことは、光という言葉はもともと色と密接なつながりを持っているという点です。つまり、赤い光、青い光、緑色の光というように、光そのものが色である、という先入観を私たちは持っているということです。しかし光は電磁波であり、あくまでも無機質であり、色とは直接的な関係を持っていません。赤い電磁波、青い電磁波、緑色の電磁波と言い換えてみれば、光という言葉の特殊性が分かると思います。もちろん電磁波は色とは無関係です。赤い電磁波が物質の世界を伝播するなどということは決してありません。

色について2つの世界を重ね合わせてみる

では、図3・2に示す3枚の絵をご覧ください。その何れにもコーヒーカップと、それを見つめている人物とが描かれています。図3・2(a)、

図3-2(a) 物質の世界



図3-2(b)

物質の世界



図3-2(c)

目の前に広がる世界



(b)は物質の世界を、図3・2(c)は目の前に広がる世界を描いたものです。図3・2(a)は物質の世界を横から描き、図3・2(b)は重ね合わせがし易いように図3・2(c)と同じ角度から遠近法に則って描いてあります。

これらの絵で注目して欲しいのは色です。今しがたの話から分かるように、色は心理的な現象であり、物理的な現象ではありません。目の前に広がる世界は普段私たちが目にしている通りのものであり、色彩豊かな世界ですから、図3・2(c)に描かれたコーヒーカップには当然色がつけられています。それに対して物質の世界には色そのものは存在しないので、図3・2(a)、(b)のコーヒーカップには色はつけられていません。

もし、図3・2(c)に示される目の前に見えているコーヒーカップが物質としてのコーヒーカップであるのなら、それは

図3・2(b)に示されている物質としてのコーヒーカップと一致し、2枚の絵は重ね合わせることが可能なはずですが、実際はどうでしょうか。両者を重ね合わせることができません。目の前に広がる

世界に示されたコーヒーカップには色がついており、物質の世界のコーヒーカップには色がついていません。つまり、目の前のコーヒーカップは物質ではないことになります。さらに、それら目の前のコーヒーカップやテーブルを含む目の前に広がる世界は、物質の世界ではないことになります。

ところで、図3・2(c)は本来、コーヒーカップだけでなく全ての対象に色が付けられていなければなりません。コーヒーカップに焦点を合せるという意図から、コーヒーカップにだけ色が付けられています。

2通りの反応

これだけの説明で、「その通りだ、目の前に見えているコーヒーカップは物質としてのコーヒーカップではない」と納得してもらえたでしょうか。あるいは、納得はできないものの、「目の前のコーヒーカップを物質としてのコーヒーカップであると解釈することに疑問を感じるようになった」と思ってもらえたでしょうか。納得してもらえたのであれば尚更ですが、そうでなくても疑問を感じてもらえたのであれば、まずは私の当初の目的は達成されたことになります。

ここでお話していることは単純なことがらではありませんので、疑問を感じたとしてもそれですんなりと納得できるというものではありません。疑問を感じたことで更に新たな疑問が生じたり、あるいは漠然とした腑に落ちない気持ちが生じたものと思います。しかしそれらの疑問や、腑に落ちない点についてはこれから順を追って説明していきますので、その過程で解消していくことができます。

しかしほとんどの人は疑問を感じなかったと思いますし、疑問を感じなかったどころか、このような私の説明に対して、「何を馬鹿げたことを、子ども騙しもいい加減にしろ」ということで、いろいろと意見をしてやらなくては、という気持ちになられたのではないでしょう

か。

前者の「疑問を感じはしたが、同時に新たな疑問を感じるようになった」という感想についてはのちほどコメントするとして、後者の「何を馬鹿げたことを」とする反論について、まず補足の説明をすることにしましょう。

「このような説明は全くの誤りだ」とする反論に対する補足の説明

「目の前に広がる世界は物質の世界であり、目の前のコーヒーカップは物質である」とする立場からの発言を反論とし、「目の前に広がる世界は物質の世界ではない、目の前のコーヒーカップは物質ではない」とする立場からの発言を答弁として、対話形式で話を進めてみることにしましょう。

反論 変な論法を用いているが、そもそも2つの世界に分けることに問題があるのだ。目の前に広がる世界は物質の世界そのものであり、それが物質の世界とは異なると主張するところに問題がある。2つの世界が重なり合わないと言うが、目の前に広がる世界が物質の世界でないと言うのなら、物質の世界は一体どこにあると言うのか。

答弁 確かに、「物質の世界はどこにあると言うのか」という反論は当然なことだ。ただし今は、目の前に広がる世界が本当に物質の世界なのか、物質の世界と考えることに矛盾が生じることはないのか、という点について検討し直してみようということまで話を進めている。

目の前に広がる世界を物質の世界だと考えると矛盾する例はいろいろとあり、その一つとして色の問題を取り上げたわけだ。「色に対応する物理的な性質」の項で説明したように、燃えるような赤とか、深海のような群青とかの色そのものは心理的な現象であり、脳の活動に伴って始めて生じるものであり、色そのものは物質の世界には存在し

ない。その色が目の前の対象に見て取れるのは、目の前の世界が物質の世界ではないという証拠になるはずだ。

反論 色は物質の世界に存在しないと主張し、その証拠として燃えるような赤とか、深海のような群青とかの色そのものは物質の世界には存在しないと言う。しかし炎色反応という現象があるように、リチウムは燃焼時に赤色を示し、銅は緑色を示す。これは物質が色の性質を備えている証拠になるはずだ。

答弁 そうではない。炎色反応というのは原子を構成する電子が燃焼による熱エネルギーを得て励起状態になり、外側の電子軌道に移る。しかし、その状態はもともと不安定なので、元のエネルギーレベルの軌道に戻る。そのときに特有の波長の電磁波を放出するという現象である。その電磁波の波長と色との間に関係があるのは事実だが、電磁波を発生する電子に色が付いているわけではないし、電磁波に色が付いているわけでもない。色は心理的な現象であり、脳の活動に伴って始めて生じるものだ。

反論 電磁波と色は直接的な関係はないものの、間接的な関係があることは認めるわけだ。仮に色は脳のレベルで生み出されるとして、その色が目の前の対象に反映されて物質の表面を彩っていると考えることはできるのではないか。

答弁 では問う。仮に目の前の世界が物質の世界だとして、脳の活動で生み出された色が、どのようにして目の前の対象を彩ることができるのだろうか。目を閉じて色を再現しようとしても、目の前の対象を彩っているような鮮やかな色は思い浮かべることができない。色は目の前の対象と一体になっている。

反論 投影という考えがある。光源とスクリーンの間にものを置くと、スクリーンの上にそのものの姿が浮かび上がる。色についてもこの考えを適用することができる。光源の前に置かれた対象を心理的な現象

にたとえば、スクリーンは物質の世界にたとえることができる。物質の表面に色そのものは存在しないが、しかし投影ということによって物質の表面に色の性質が現れることになるのだ。つまり、色という心理的な現象が物質の世界に投影されているのであり、物質の表面に色が見て取れたとしても矛盾は生じない。

答弁 投影という概念を用いても何ら問題は解決しない。色の発生を「外界→刺激の取り込み→色の発生」というプロセスで考えてみた場合、「外界→刺激の取り込み→色の発生→外界への色の投影」ということになるのだろうか。

投影という概念は、物質の世界と心の世界という2つの世界の間にはいわば遠隔的な作用があることを意味している。では、物質の世界と心の世界の間に存在している相作用とは何だろうか。そのメカニズムについて明らかにされない状況で投影という言葉を使うのは、問題のすり替えに過ぎない。いまここでは仮説を述べるのではなく、事実の積み重ねで議論を進めなければならない。

反論 では視点を変えて色そのものではなく、「見えなくなる」という観点から反論する。目を閉じれば目の前の対象が見えなくなるではないか。それは肉体としての瞼を閉じることで、外界からの刺激が入らなくなることによるわけだ。だから目の前の対象は物質であり、そこに広がる世界は物質の世界のはずだ。

答弁 確かにその通りで、瞼を閉じれば外界からの情報が入らなくなる。これを物質の世界のこととして捉えるのであれば何ら間違いではない。「見えなくなる」という考えは、目の前の世界の真の姿の理解を妨げる高いハードルになっている。それを解消するには、第3章第2節以降の話を待たなければならない。また、色についての疑問、反論、さらには腑に落ちなさについても、その過程で明らかになるはずだ。

*

このように答弁の側は、色が目の前の対象の表面に見て取れることを示し、それを突破口にして目の前に見えている対象は物質ではない、目の前に広がる世界は物質の世界ではない、という話につなげていきたいわけです。それに対して反論の側は、目の前に広がる世界＝物質の世界である、という考えを譲りたくないわけです。そこで、物質の表面に心理的な現象である色がついていることの矛盾を避けるために、投影という切り札を用いて困難を乗り越えようとしているわけです。

私たちは普段、色は目の前の対象の表面に付随する性質であり、目の前の対象から切り離すことはできないと考えているはずですが。ところが、目の前の対象が物質であることを意識することで、また色は心の中で生じる現象であるということを改めて意識することで、色は目の前の対象から切り離された現象である、という思いを抱いてしまうようです。その思いは、朱色というように言葉に置き換えられることで更に強まることになり、色は目の前の対象と切り離せない現象であるにもかかわらず、その事実は受け入れ難くなるようです。

*

投影とは何か？

ここで投影という概念について簡単に触れておきましょう。空に浮かぶ雲を見ているといろいろなものに似て見えることがあります。例えば、アイスクリームやハンバーグのような食物に見えたり、あるいは犬や猫のような小動物に見えたりすることがあります。投影は、影を投げかけるとという言葉の組合せから分かるように、自らの心理状態、例えば空腹であるとか、近々ペットを飼おうとしているとかの心理状態が雲に投げかけられ、雲の解釈に影響を与えるという考えです。

投影という言葉は便利な言葉です。物理現象と心理現象との間の相互の関連に言及することなく、両者を取り扱えるようにする言葉だと

言えます。もっともそうだからといって、そのような解釈が正しいということにはなりません。当面する困難を避けるための方便に過ぎません。

「疑問を感じはしたが、同時に新たな疑問を感じるようになった」

という感想に対する説明

反論 色は物質の世界には存在しない。その色が目の前の対象の表面に見て取れることから、目の前の対象＝物質と考えることに確かに疑問を感じはした。しかしそうだからと言って、目の前の対象が物質ではないとする考えをすんなりと受け入れることはできない。何故なら、そう考えたとするとそこから新たな疑問が生じるからだ。それらの疑問を挙げてみると次のようになる。

疑問その1 感覚の存在

先ほどの、目の前に広がる世界を表した図3・2(c)を例にとってみるが、目の前にあるコーヒーカップは持てば重さを感じるし、触れば硬さや温かさを感じる。もし目の前のコーヒーカップが物質でないのなら、そのような感覚は生じないはずだ。事実、如何にリアルな夢をみても、実体の伴わない夢には感覚が生じないではないか。

疑問その2 見ている対象

目の前のコーヒーカップは、私がいて、その私が見ている対象だ。だから、第2章第2節の「見ている対象（物質）→見ている身体（肉体）→見た結果（心理現象）」という図式に当てはめてみれば、私の身体が現に目の前に存在していて、その私が見ているのだから、目の前のコーヒーカップは「見ている対象」であり、従って物質だと言わざるをえない。先の「反論」にもあったように、目を閉じれば見えな

くなるではないか。

疑問その3 身体の外に存在している

「疑問その2」と関連するが、私がいて、その私が見ているのだから、目の前のコーヒーカップは私の身体の外にあることになる。私の身体は肉体としての身体であり、身体を含め身体の外側は物質の世界である。目の前のコーヒーカップは私の身体の外にあるのだから、物質の世界に属していることになる。だから、目の前のコーヒーカップは物質であると言わざるを得ない。

これらの疑問があるので、「目の前の対象＝物質」という考えを否定するわけにはいかない。

*

確かにそのような疑問を持つのは当然なことです。特に、「私がいて、その私が見ているのだから」という論法は、脳によって仕掛けられたトリックの中でも一番難解なものであり、それを見破るのは容易ではありません。しかし如何に巧妙に仕掛けられたトリックにも必ずほころびがあります。それを突破口にすれば、これら3つの疑問も理詰めで解決することができます。次の節からはこれら3つの疑問点について説明していくことになります。

問題なのは、心理現象である色が目の前の対象についているということに何ら疑問を感じないというケースであり、そのような人たちにどのようにして疑問を感じてもらおうかということです。疑問を感じないことには、探究しようという気持ちも生まれてきません。

次の節以降でも、目の前の対象を物質であると考えると矛盾が生じるケースをいろいろと取り上げ、話を進めていきます。その段階で、「なるほど不思議だ」と疑問を感じてもらえるかもしれませんので、いましばらく辛抱して読み進んでいただければと思います。

この節のまとめ

「目の前の対象は物質である」という命題を否定するには、反例を一つ示せばよい。その反例として「目の前の対象には色がついている」という事実を取り上げた。色は心理的な現象であり、その色が目の前の対象に付随していることから、「目の前の対象は物質ではない」、という結論が導かれる。

第3章

第2節 感覚の存在は物質であることの証拠になるか？

感覚の存在は、物体の存在を示唆する

物質は心や意識とは対照的な存在である、と考えられています。「物質のイメージは？」と問われれば、「形や大きさがあり、重さ、硬さ、温かさなどの感覚をもたらすものである」、という答えが返ってくるものと思います。いわゆる実体がある、ということであり、それ特有の形と大きさがあり、触れれば硬く、持てば重く、そして温かさ、冷たさが感じ取れるということです。

それに対して、「心や意識についてのイメージは？」と問われれば、「形や大きさはなく、見ることも触ることもできない実体のないもの」、という答えが返ってくるものと思います。

例えば、あなたの目の前のテーブルの上にコーヒーカップがあるとしましょう。コーヒーカップは円筒形をしていて取っ手がついており、それ特有の形があります。そしてその表面には色がついています。夢の中の、あるいは想像上のコーヒーカップとは異なり、持てば重さが感じ取れ、また陶磁器に特有の硬さを感じ取ることができます。更に、中に熱いコーヒーが入っていれば温かさが伝わってきますし、コーヒー特有の香ばしさを感じ取ることができます。コーヒーにまつわる如

何にリアルな夢を見ていても、ここまでの感触を得ることはありませんし、また、昼下がりにいつもの喫茶店でいつものコーヒーを飲みたいと心の中で思ったとしても、ここまでリアルにコーヒーを思い浮かべることができません。

目の前の対象が物質であると考えている人達は、これらコーヒーカップにまつわる特質、つまり、形や大きさ、そして重さ、硬さ、温かさ、香りなどのコーヒーカップにまつわる様々な感覚の存在は、目の前のコーヒーカップが物質であることの証拠になると考えることでしょう。物質でないものが何故、形や大きさ、そして重さ、硬さ、温かさ、香りという性質を持ち得るのかということ、目の前のコーヒーカップは物質であるという論理を展開することになるでしょう。

確かに、重さや、硬さや、温かさや、香りなどを導く物理的な特性は存在します。重さはその物体の質量に比例します。硬さはその物体を構成する分子の構造で決まります。また温かさはその物体のもつ熱エネルギーによって決まります。そして香りはコーヒーの化学成分によって決まります。従って、感覚の存在は物質の存在を示唆すると結論づけて間違いはないでしょう。

「物理的特性＝感覚」ではない

しかしここで注意しなければならないのは、それらの物理的な特性がそれぞれの感覚と対応関係にあるのは事実ですが、物理的特性即ち感覚、とはならないということです。たっぷりと水の入った薬缶の質量がどうであれ、それを手にしたときに手の平から腕にかけて感じ取れる重さという感覚そのものは、心理的な特性です。鉄やスポンジの原子、分子レベルでの構造がどうであれ、それを握り締めたときに感じ取れる硬さとか柔らかさという感覚そのものは心理的な特性です。その物体を構成する分子の熱エネルギーのレベルがどうであれ、手の平に感じ取れる温かさという感覚は心理的な特性です。また、コーヒ

一の化学成分がどうであれ、香ばしい香りそのものは心理的な特性です。

目の前のコーヒーカップが硬さ、重さ、温かさ、香りという心理的な特性を備えているということは、物質としてのコーヒーカップが存在していることを示唆しはするものの、目の前のコーヒーカップそのものが物質であることの証拠とはなりません。それらの感覚が目の前のコーヒーカップと共に存在していることで、逆に目の前のコーヒーカップが物質ではないことの証拠となるはずです。

繰り返しになりますが、物質としてのコーヒーカップは確かに存在します。ブラジル産のコーヒーを注いだ陶磁器製のコーヒーカップは確かに存在します。一度テーブルの上に置かれたならば、あなたが何かの用事でその場を離れたとしても、コーヒーカップは確かにテーブルの上に存在し続けます。しかし、いまあなたの目の前であって香ばしい香りを漂わせ、持てば重みと温かが感じ取れ、飲めば安らぎを与えてくれるそのコーヒーカップは、それらの心理的な特性と共に存在するという理由から、物質としてのコーヒーカップとは言えないのです。

2枚の絵を比較する

目の前に広がる世界が一般常識の示す通り物質の世界であるのか、それとも物質の世界とは異なる別の世界であるのかを調べるために、前節では2つの世界を表した2枚の絵を色について比較しました。ここでもやはり感覚について2枚の絵を比較してみることにしましょう。

図3・3をご覧ください。コーヒーを前にした人物が、コーヒーカップに手を伸ばしてコーヒーを一口飲もうとしている様子が描かれていま

図 3-3(a) 物質の世界

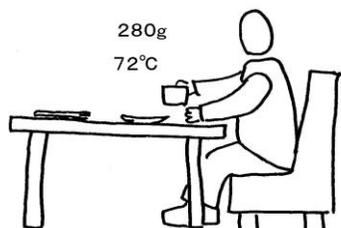


図 3-3(b)

物質の世界

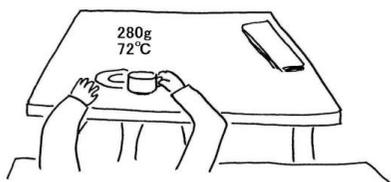


図 3-3(c)

目の前に広がる世界



す。図 3・3 (a)、(b)は共に物質の世界を表したものであり、図 3・3 (a)は横から、図 3・3 (b)はその人物の目の位置から物質の世界が描かれています。これらの絵は物質の世界を表したものですから、コーヒーカップの質量はグラムで、コーヒーの熱エネルギーは温度で図に記されています。感覚は心理的な現象であり物理的な現象ではないので、物質の世界を表したこの図のどこにも感覚は描き込まれていません。

一方、図 3・3 (c)は目の前に広がる世界を表したものであり、私たちが日頃体験している通り、感覚が存在する世界です。もっとも感覚を直接絵に表すことはできないので、コーヒーカップの取っ手にからめた指先に感じ取れる陶磁器の「硬さ」が、また指先や手首に感じ取れる「重さ」、指先に伝わる「温かさ」が絵に言葉で記入してあります。

図 3・3 (b)と (c)の 2 枚の絵を重ね合わせて比較してみましょう。「重なり合うのでしょうか?」、重なり合うことはありません。一方の世界には感覚は存在せず、もう一方の世界には感覚が存在しています。いまあなたがコーヒーカップに手を伸ばしてコーヒーを一口飲もうとしているとき、あなたが目にしている、あなたが体験しているコーヒーカップはどちらの絵と一致するのでしょうか?

試しに実際にコーヒーカップを手にしてみて下さい。コーヒーカップの取っ手に指をかけた瞬間、陶磁器のもつ硬さ、中に入っているコ

ーヒーの温かさがあなたの指先に伝わってくるはずですが、あなたの目の前のコーヒーカップは、図3・3(c)の目の前に広がる世界に描かれたコーヒーカップと一致します。従って、目の前のコーヒーカップは物質ではないことになり、そのコーヒーカップが存在する目の前に広がる世界は物質の世界ではないことになります。

物質の世界に感覚が投影されている、という反論

前節の色の問題のときと同様に、目の前に広がる世界は物質の世界だとする立場からは、投影という概念が持ち込まれて、反論がなされることになります。

反論 確かに感覚そのものは心理的な現象であり、物理的な現象でないことは認める。しかし感覚は物質に伴う性質であり、物質が存在しなければ感覚が生じることはない。コーヒーカップが存在することで様々な感覚が生じているのだから、目の前のコーヒーカップは物質だ。

答弁：先ほども話したように、感覚の存在は物質の存在を示唆する。それは間違いのないことだ。硬さ、重さ、温かさなどの感覚をもたらす物質としてのコーヒーカップは確かに存在する。ただし、その物質としてのコーヒーカップは目の前のコーヒーカップそのものではないということだ。そうでないと、物質と感覚という異質のものが同じ世界に共存することになる。物質と感覚という異質のものが、同一の世界に共存できるだろうか。

反論：我々の頭の中に色の感覚が生じるのではなく、その物体の表面に色が付随するのと同じように、硬さなどの感覚も物体に付随するものである。目の前に広がる世界は物質の世界であり、そこに感覚が投影されることで物質と感覚という異質のものが共存できると考えるべきなのだ。

*

本論の立場（答弁）からは、心理的な特性である感覚が存在する世

界は物質の世界では有り得ないという主張がなされるのに対し、反対の立場（反論）からは、目の前に広がる世界はあくまでも物質の世界であり、そこに感覚が投影されるのだという主張が繰り返されることになります。

感覚が混在する奇妙な世界

目の前に広がる世界が物質の世界であるとする、心理現象である感覚が物質の世界に混在すると考えなければならなくなり、前節で取り上げた色の問題もそうでしたが、説明のつかない現象がいろいろと生じてしまうことになります。そのような例を更に2つ取り上げてみることにしましょう。

（1）鉛筆の先の感覚

鉛筆の先端に感覚が生じるという例をお話しましょう。簡単に体験できるので、試してみてください。

まずは表面が滑らかなテーブルを指でなぞってみてください。当然指先にツルツル感が生じます。指先には感覚器が存在しているわけですから、ごく当たり前のことだと思われることでしょう。では次に鉛筆を手に持って、同じようにテーブルの表面を鉛筆の先でなぞってみてください。ツルツル感はどこに生じたのでしょうか。指でなぞったときと同じように、鉛筆の先端だと思います。

指でなぞったときは、指先に感覚器が存在しているので奇妙に思わなかったでしょうが、鉛筆の先にツルツル感が生じたことに対しては意外な印象を持たれたのではないのでしょうか。何故なら鉛筆の先には感覚器が存在しているわけではありませんし、またこのような動作で、鉛筆を持った指先にものをこするような動作が生じているわけではありません。

指先でこすったときも鉛筆でこすったときも、同じようなツルツル

感がそれらの先端に生じたということは、ツルツル感是指先の感覚器に基づいて生じるのではなく、手から腕にかけて、それがスムーズに動かせることによるものだと考えられそうです。更に気を付けてみると、そのツルツル感是指や鉛筆の先端ではなく、テーブルの表面に生じているように感じられるのではないのでしょうか。

そのツルツル感が鉛筆の先端に生じるにしろ、あるいはテーブルの表面に生じるにしろ、物質の世界に感覚が混在するという奇妙な現象が生じていることになります。目の前のテーブルや鉛筆を物質であると考えた立場からは、この現象をどのように説明するのでしょうか。前節の色や、先ほどのコーヒーカップにまつわる感覚のときと同じように、投影という説明を繰り返すことになるのでしょうか。

(2) 鏡の中の感覚

次は、鏡の中に感覚が生じるという例についてお話しましょう。これも簡単に体験することができます。

唐突ですが、まずは手で頬に触れてみて下さい。当然ですが、触れられているという感覚が頬に生じます。手にも頬にも感覚器が存在しているわけですから、これについては疑問を感じることはないでしょう。では次に、鏡に顔を映しながら再び手で頬に触れてみて下さい。余り意識し過ぎると上手くいかないかもしれませんが、今度は鏡に映った頬に触覚が生じたのではないのでしょうか。鏡の中の世界という、現実には存在しない世界に感覚が生じたことになります。

心理学ではこれを視覚の優位性と呼んでいます。視覚と触覚が同時に存在するとき、その存在位置は視覚が優先されるという原理です。今の例でいえば、本来頬に手を触れているので触覚はその頬の部分に感じ取れるはずですが、顔を鏡に映していることから、鏡に映った頬の位置が優位になり、鏡の中に映った頬に触覚が感じ取れるということです。

視覚と聴覚が同時に存在するときも視覚が優位になります。テレビの音声をイヤフォンで聞いているとき、登場人物の声はイヤフォンから聞こえているはずですが、実際は、画面の人物の口元から聞こえてきます。これも聴覚に対する視覚の優位性の例です。

これらの現象にはなるほど視覚の優位性という名前が付けられていますが、目の前の世界を物質の世界であると考えている限り、矛盾を抱えたままの奇妙な現象ということになります。しかし、これら一見奇妙な現象も、目の前に広がる世界が物質の世界ではないということになれば、何ら奇妙な現象ではなくなります。その理解に至るには、まだ幾つかのステップを踏まなければなりません。

この節のまとめ

感覚は物理的な特性に基づいて生じる。従って、感覚の存在は物質の存在を示唆する、と言える。しかし、感覚を引き起こす物理的な特性はあくまでも物理現象であり、心理現象ではない。目の前に広がる世界に感覚が存在しているという事実は、目の前に広がる世界が物質の世界ではないことを意味している。

第3章

第3節 目の前の対象は「見ている対象」か？

「私がいて、その私が見ているのだから」というトリック

「目の前に広がる世界は物質の世界であり、目の前の対象は物質である」という一般常識を支えている一番大きな理由は、「私がいて、その私が見ているのだから」という思いでしょう。例えばコーヒーを一口飲むという行為一つとってみても、それがよく分かります。

まずコーヒーを飲みたいという欲求があなたの心の中に生じます。

そこで読んでいた新聞から視線をテーブルの上のコーヒーカップに移し、取っ手に手を伸ばす。コーヒーカップの重さに合わせて取っ手を掴む指先に力を込める。そしてコーヒーカップを口元まで運び、コーヒーが熱すぎないかを確認してから一口飲む、というわけです。

この一連の動作のすべてに「**私**がいて、その**私**が見ている」という思いが伴います。もっとも、足場の悪い山道を一步一步確かめながら歩を進めているような場合とは異なり、自らの行動をさほど強く意識することはなく半ば自動化されてはいますが、その要所、要所は意識されています。目の前のコーヒーカップは「**私**がいて、その**私**が見ている対象」であり、目の前のコーヒーカップは「**私**がいて、その**私**が働きかけている対象」である、というその思いの下に、目の前のコーヒーカップは物質としてのコーヒーカップであると考えられているわけです。

「私がいて、その私が見ているのだから」という思いが心の世界の本当の姿を見抜けなくしているのですが、その理由はこの節以降の話で徐々に明らかになります。ただここで、「私がいて、その私が見ているのだから」という思いに潜む、言わばからくりについて、図3・4を使って簡単に説明しておくことにしましょう。

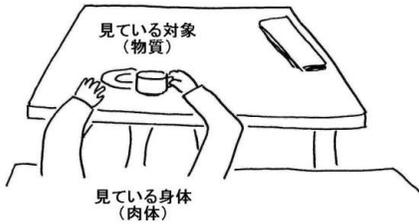


図3・4(a)をご覧ください。いまお話した様子を物質の世界で表したものであり、視点を横に取っています。確かに物質の世界にはあなたの肉体としての身体があり、物質としてのコーヒーカップがあります。コーヒーを飲むためにあなたの肉体としての手がコーヒーカップ

に伸ばされ、コーヒーカップが口元まで運ばれ、コーヒーが一口飲まれるという一連の物理的な動作が生じています。それは間違いのない事実です。そこには「見ている対象」である物質としてのコーヒーカ

図 3-4 (b)

物質の世界



が言えます。物質の世界にあなたの肉体としての手があり、物質としてのコーヒーカップがあります。あなたの肉体としての手がコーヒーカップを掴み、カップが口元まで運ばれ、コーヒーが一口飲まれる、という一連の物理的な動作が生じます。そこには「見ている対象」である物質としてのコーヒーカップと、「見ている身体」であるあなたの肉体としての身体が存在しています。

図 3-4 (c)

目の前に広がる世界



更に次に、目の前に広がる世界を表した図 3-4 (c)で考えてみましょう。今回も図 3-3 (c)と同様に、第 3 章第 1 節の図 3-2 (c)とは異なり、色は付けてありません。従って図 3-4 (b)と全く同じものになっています。図 3-4 (c)においてもコーヒーを飲むという行為に伴い、目の前のコーヒーカップにあなたの手が伸ばされ、コーヒーカップが口元まで運ばれ、コーヒーが一口飲まれる、という一連の行為がそこに展開されます。

このように、その何れの場合においてもコーヒーを飲むという一連の行為が見てとれます。そして、その何れもが現に生じている状態を表しており、間違いということはありません。ただし、「私がいて、その私が見ているのだから」という言葉の意味する内容を正しく表わしているのは図 3-4 (c)の情景であり、図 3-4 (b)ではありません。何

ップと、「見ている身体」であるあなたの肉体としての身体が存在しています。

次に、図 3-4 (b)について考えてみましょう。これも図 3-4 (a)と同じく物質の世界を表した図ですが、視点を観察者の目の位置にとり、遠近法に則って描いてあります。この場合も図 3-4 (a)と同じこと

更に次に、目の前に広がる世界を表した図 3-4 (c)で考えてみましょう。今回も図 3-3 (c)と同様に、第 3 章第 1 節の図 3-2 (c)とは異なり、色は付けてありません。従って図 3-4 (b)と全く同じものになっています。図 3-4 (c)においてもコーヒーを飲むという行為に伴い、図

ら詳しい説明をしていない現段階ではもちろん納得がいかないでしょうが、「私がいて、その私が見ているのだから」という言葉の持つからくりは、正にここにあります。

つまり、図3・4(c)の目の前に広がる世界で展開される一連の行為が、図3・4(b)の物質の世界で生じる一連の動作と全く同じものであるかのように思われることから、「私」を図3・4(c)の中の人物に重ね合わせるのではなく、図3・4(b)の人物に重ね合わせてしまいます。そしてその上で、「私がいて、その私が見ているのだから」という論法を用いることで、目の前の自らの身体は肉体としての身体であり、身体を含めその外側は物質の世界である。従って、目の前のコーヒーカップは物質の世界に属する「見ている対象（物質）」である、という考えを持ってしまうことになるのです。

たびたびお話していますが、目の前に広がる世界は物質の世界ではありません。両者が異なる世界であることを見抜けなくしている原因の一つは、図3・4(b)と図3・4(c)とが同じ表現方法で描かれているという点にあります。物質の世界はこのようなものだという思いの表れである図3・4(b)に、目の前に広がる世界である図3・4(c)を重ね合わせてしまう。そして両者が一致するように思えることから、目の前に広がる世界は物質の世界である、と考えるしまうわけです。

両者が異なる世界であることを示すために、第3章第1節では色について検討しました。この節では、「自分がいて、その自分が見ているのだから」というトリックを突き崩すために、目の前の対象は「見ている対象」ではなく「見た結果」であることを、二重像という現象を分析することで説明したいと思います。

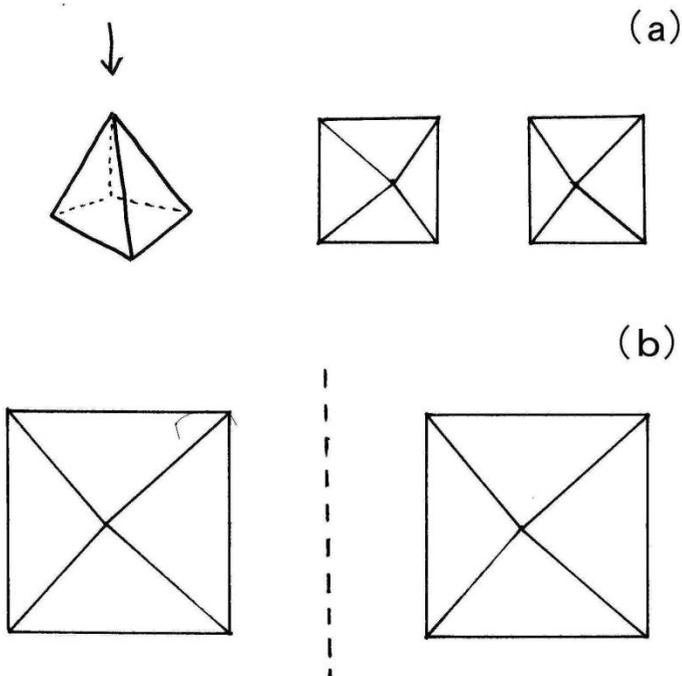
二重像

私たちの目は顔の正面に左右並んで付いています。そこである特定の対象を見るときは両方の目の向き、つまり視線をその対象に向けま

す。両目の視線を一点に合わせることを「輻輳を合わせる」といいますが、その結果、対象は左右の網膜の中心部に像を結び、一個の像として見ることができます。

左右の網膜像が完全に一致するのは、網膜の中心のごく限られた部分に過ぎません。中心部から少し離れるだけで、左右の網膜像は一致しません。試しに目の前に消しゴムのような立体物をかざし、左右それぞれ片方の目で交互に見比べてみて下さい。像の違いを確認することができます。

図 3-5



左右の像のズレが小さいうちは、そのズレは対象を立体的に見る際の手掛かりとして働きます。図 3・5 (a)は、ピラミッドのような四角錐を上から見たときの左右の目に映る像を示しています。左右の目には頂点の位置が少しズレて見えることになります。

図 3・5 (b)は、立体視を体験できるように描き直したものです。図の

点線部分に鏡を鏡面が左になるようにして置き、右目で右の図を左目で鏡に映った左の図を見て、両者が重なるように調整します。すると四角錐を真上から見たような立体図形が立ち現れます。

鏡の向きを逆にして、左目で左の図を、右目で鏡に映った右の図を見るようにすると、今度は四角錐を逆さにして上から覗き込んでいるような立体図形が見えます。このように、左右の像のズレが小さいうちは、対象を立体的に見る際の手掛かりとしての働きを持ちます。

ズレが大きくなると左右の像を一つのものとして見るのが難しくなり、像は一つではなく二重になって見えるようになります。試しに視線を手前に引いてきて、いわゆる寄り目の状態にしてみてください。それまで一つに見えていた目の前の対象が二つになって見えます。見るという行為においては、視野の中心部のごく限られた部分にしか意識は集中していないため日頃気付くことは希ですが、視野の中心から少し離れたところでは常に二重像が生じています。

二重像の矛盾

図 3-6(a) 物質の世界

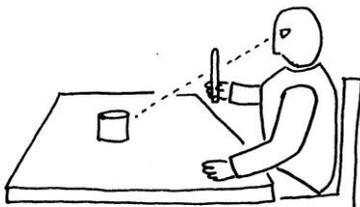
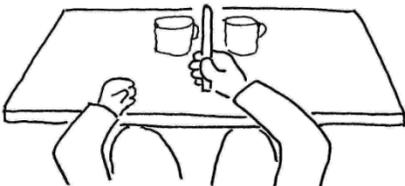


図 3-6(b) 目の前に広がる世界



二重像についての予備知識を持っていただいたところで、目の前に見えている対象が「見ている対象」ではなく「見た結果」であることを説明することにしましょう。

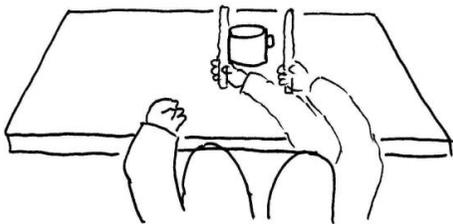
図 3・6 (a) は物質の世界を表したのですが、この図に示すように、テーブルの上のコーヒーカップを背景にして鉛筆を 1 本持ち、その鉛筆に視線を合わせて見てみて下さい。すると、図 3・6 (b) の目の前に広がる世界を表した図にあるように、少しピントが

外れてぼやけた2個のコーヒーカップを背景として、そこには1本の鉛筆がはっきりと見て取れると思います。「当たり前のことではないか」と言われることと思いますが、問題は、そこに見えている鉛筆がどのように解釈されているのか、ということにあります。

重ねてお断りしておきますが、あなたの目の前に広がる世界に見えている鉛筆についての話です。

一般的な解釈では、それは物質の世界に実在する物質でできた鉛筆である、というように解釈されることでしょう。現に自らの意志によって傾けようと思えば傾けることができ、前後に移動させようと思えば移動させられるわけで、幻やイメージなどでは断じてない実在の鉛筆がそこに在ると解釈されることでしょう。見るという行為の図式、つまり、「見ている対象（物質）→見ている身体（肉体）→見た結果

図3-6(c) 目の前に広がる世界（心理現象）」に当てはめてみれば、「見ている対象」としての鉛筆であると解釈されることでしょう。



その解釈は取り敢えずそれでよしとして、次に進みましょう。今度は鉛筆ではなく、テーブル上のコーヒーカップに視線を向けて見て下さい。すると

図3・6(c)の目の前に広がる世界を表した絵に示すように、コーヒーカップの手前に、先程まではっきりと見て取れた鉛筆が少しぼやけた二重像になって見えると思います。

さて、ここで問題が生じます。一般的な解釈では、最初鉛筆に視線を向けていたときに見えていた鉛筆は物質でできた実在の鉛筆である、あるいは「見ている対象」である、と解釈されたわけですが、では視線を後ろのコーヒーカップに移したとき、二重像となって見える2本の鉛筆はどのように解釈されるのでしょうか。1本に見えていたときの鉛筆だけが実在の鉛筆で、視線を移したときの少しぼやけた2本の

鉛筆はただのイメージに過ぎない、というような解釈がなされるのではないのでしょうか。

しかし、果たしてそのような理屈が通用するのでしょうか。事実、視線を鉛筆に戻せば、それまでのぼんやりとした2本の鉛筆は1本の鉛筆となります。1本に見えていたときの鉛筆が実在の鉛筆であるとするのなら、視線を移したからといってその実在の鉛筆がどこかに消えてしまうということは有り得ません。2本になったとき、そのどちらが実在の鉛筆ということになるのでしょうか。1本に見えている鉛筆も2本に見えている鉛筆も、共に目の前の同じ空間に見えているという事実を見落としてはなりません。

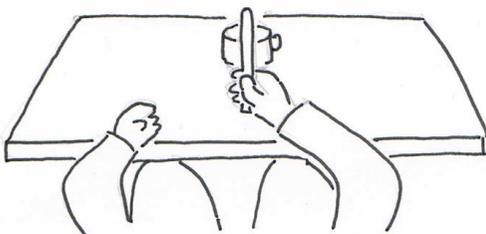
目の前の対象は「見た結果」である

二重像は、見るという行為の中で何に基づいて生じるのかと言えば、網膜に結んだ像に基づくと考えることに異論はないでしょう。試しに図3・6(c)のように二重像が見えているとき左目をつむって右目だけで見てみると、コーヒーカップの左側に1本の鉛筆が見えるはずですし、右目をつむって左目だけで見ると、今度はコーヒーカップの右側に1本の鉛筆が見えるはずで、その両者が合わさって二重像となって見えるわけです。

もっとも網膜に像が結ばれても、それだけで二重像が見えるわけではありません。網膜の像が電気信号に変換され、それが中枢に伝達さ

図3-6(d)

物質の世界



れて初めて生じるものであり、あくまでも大脳の中核部分での情報処理の最終段階で生じるものです。見るという行為の「見ている対象→見ている身体→見た結果」の図式に当てはめてみれば、「見ている対象（物質）」ではなく「見た結果（心理現

象)」ということになります。つまり、二重像は「見た結果」です。

事実、物質の世界を図3・6(a)のような側面からではなく観察者の目の位置から表してみると図3・6(d)のようになり、焦点を鉛筆とコーヒーカップのどちらに合わせたとしても、1本の鉛筆と1個のコーヒーカップが存在するだけで、二重像は存在しません。

二重像が「見た結果」であるのであれば、一重像も同様に「見た結果」であるはずですが。事実、2本に見えているとき、視線を鉛筆の方に向け始めると、2本の鉛筆は徐々に近づきやがて1本になります。2本のときは「見た結果」でイメージとしての鉛筆であり、1本のときは「見ている対象」で実在する鉛筆である、という論法は成り立ちません。

あるいは、二重像になって2本に見えているときに片目をつぶってみて下さい。1本に見えるはずですが。両目で見ているときの2本の鉛筆は「見た結果」としてのイメージであり、片目で見ているときの1本の鉛筆は「見ている対象」で実在する鉛筆である、という論法は成り立ちません。

「見た結果」は、一般常識では頭の中のおぼろげなイメージのようなものであると考えられています。例えば、りんごという言葉聞いてりんごの姿を思い浮かべるのと同様な漠然としたものであったり、あるいはコーヒーカップを見ていて目をつぶったときの、その直後のおぼろげなイメージのようなものが「見た結果」である、と解釈されています。しかし、見るという行為によって得られる「見た結果」はそのような朧げなイメージなどではなく、目の前に見えているコーヒーカップそのものが「見た結果」なのです。「見た結果」は見るという行為の結果として、目の前に広がる世界の中に存在しているのです。

現に立体視のことを考えてみると分かり易いでしょう。3D画像は、左右異なる2つの画像が中枢に送られて処理されることで立体的に見えるようになる、というように説明されます。確かにその通りなので

すが、しかし、図3・5(b)で鏡を使って体験してみれば分かるように、立体的に見えているのは目の前の3D像そのものであり、決して私たちのいわゆる心の中で見えているわけではありません。

目の前の対象の二面性

第2章第2節で簡単に触れたことですが、目の前に見えている対象は、一般的な解釈の下では「見ている対象」であるとされているわけですが、しかし私たちは、そうとは気付くことなく、ときにはそれを「見た結果」とであると解釈していることもあり、目の前の対象の解釈には二面性があるものです。

見るという行為には、知覚に関連した他の動詞にもみられることですが、「～を見る」という他動詞と、「～が見える」という自動詞とがあります。「～を見る」という言葉は、自分自身の存在が強く意識されていて、自分の身体の外にあるものを見る、というときに使われる傾向があります。つまり「私がいて、その私が見ている」ということであり、そこには「見ている身体」と「見ている対象」の区別があります。

それに対して「～が見える」という言葉には、自らがその対象を見ているという意識が薄く、つまりは見るという行為に自らが関与しているという意識が薄く、見るという行為の結果として対象がそこに存在している、という意味の下で使われる傾向があります。つまり、見るという行為の結果として、対象がそこに存在しているということであり、そこからは、目の前の対象が「見た結果」とであると解釈されることが読み取れます。

例えば、「コーヒーカップを見る」という表現は、目の前のコーヒーカップが物質の世界の「見ている対象（物質）」であると解釈されており、「コーヒーカップが見える」という表現は、目の前のコーヒーカップが「見た結果（心理現象）」であると解釈されていると言えま

す。

前の項で、二重像に関連してお話した目の前の鉛筆についての話は、正にこの例に当てはまると言えます。1本に見えているときは物質の世界に実在する「見ている対象（物質）」としての鉛筆であり、その鉛筆を私が見ている、という解釈がなされています。一方、少しぼやけて2本に見えているときはイメージとしての「見た結果」としての鉛筆であり、それらが私に見えている、という解釈がなされています。

ときに「見ている」と解釈され、ときに「見えている」と解釈され、2つの解釈が意識されることなく使い分けられることにより、目の前に広がる世界は物質の世界である、という一般常識が破綻しないように仕組みられているのでしょう。

しかし、目の前の対象がときに「見ている対象」と解釈され、またときに「見た結果」であると解釈されることにより、混乱が生じることがあります。その例として「逆さの網膜像」と「見ることができない？」という問題を紹介してみましょう。

*

逆さの網膜像

私たちの目は凸レンズで構成されているので、網膜には外界が逆さに映ります。そこで、「見るという行為は網膜像に基づくものだから、外界は逆さに見えるはずだ。ところが実際には正立した外界が見えている。網膜には逆さに映っているのに何故正立した外界を見ることができるのだろうか？」、という疑問が生じることになります。これが「逆さの網膜像」という問題です。

この問い掛けは、第3章第1節でお話した「目の前の対象に色がついている」という問題に比べれば、疑問に感じる人は比較的多いようです。色の問題は余りに日常的なことからであるのに対し、逆さの網膜像の問題は余り耳にしなだけに、意外性があるからかもしれません。

この疑問に対する回答は、次の節で行なう身体についての考察を待たなければなりません。従って次の節でもう一度取り上げて詳しく説明することにしますが、何れにしても、このような疑問の背景には、目の前で見えている対象を一般的な解釈である「見ている対象」とは捉えずに、「見た結果」であると捉えているところに原因の一端があります。

事実、もし目の前に広がる世界を物質の世界であると解釈し、目の前の対象を一般的な解釈である「見ている対象」であると考えているのであれば、「見ている対象」は自らの身体に対してもともと正立しているものであり、網膜像はそれの倒立したものであるに過ぎないので疑問は感じないはずですし、また論理的な問題も生じないはずです。疑問を持つのは、目の前で見えている対象を一般的な解釈とは異なり、そうとは気付かぬままに「見た結果」であると捉えているところに原因があります。つまり、目の前の対象は「見た結果」であるはずなのに、何故倒立していないのだろうか、という思いが疑問を生じさせるわけです。もっとも目の前の対象を「見た結果」であるとするのは正しい解釈です。

*

見ることができない？

第2章第1節の「実は奇妙な物質の世界」の項で、「物質は原子、分子といった微細な粒子によって構成されているのだから、物質の世界を表すには隙間だらけの絵を描く必要がある」という意見に対し、「そうする必要はない。物質の世界の微細な構造は眼の分解能を超えているので、見ることはできないのだ」という反論が出るだろう。しかしそれは、目の前に広がる世界を物質の世界だとする一般常識の立場からの発言としては奇妙な論理であり、自己矛盾に陥ることになる、とお話しました。

この「見ることはできないのだ」という発言は、目の前の対象を「見

ている対象」であると考えていると同時に「見た結果」であると考えているところに矛盾があります。つまり、この発言は目の前の対象は物質であるという立場に立っての発言であり、目の前の対象を「見ている対象」であると考えているはずです。ところが「見ることはできないのだ」という表現は、「見るという行為の結果として、微細な構造は見ることはできなかつた」という意味であり、それは、目の前の対象が「見た結果」であることを意味しているはずです。

例えば、顕微鏡で植物の葉の裏の気孔を観察しているとしましょう。顕微鏡の倍率を上げることにより気孔の詳細を見ることができるようになりますが、それは顕微鏡のレンズの組合せにより接眼レンズのところ得られる対象の像に変化が生じたことによるものであり、その状態を指して「微細な構造を見ることができるようになった」と発言しているわけです。しかし、顕微鏡の倍率の如何にかかわらず、物質の世界の存在である植物の葉には何ら変化はありません。

私たちが対象を裸眼で見える場合も同じです。「原子、分子は、眼の分解能を超えているので見ることはできない」という発言は、眼の凸レンズと網膜による対象の情報の収集に始まり、中枢での処理の結果「見ることができない」ということによるものであり、目の前の対象は「見た結果」であることを意味しているはずです。つまり、見ることはできない原因は人間の側にあるわけで、物質の世界は私たちの目の分解能の如何にかかわらず、同じ状態のままです。物質の世界を表すには、やはり隙間だらけの状態を表すより他に手はないはずです。

「見ることはできないのだ」という発言は、目の前の対象を「見ている対象」であるとする立場からの発言ではあるものの、同時に目の前の対象を「見た結果」であるとも考えているわけで、この場合もそうと気付くことなく目の前の対象を二面的に解釈していることが見て取れます。もちろん、目の前の対象を「見た結果」であると捉えるのは正しい解釈です。

*

目の前の対象が「見た結果」であるという結論に対して、腑に落ちなさがつきまとうかと思いますが、その原因の1つは、私たちが常日頃、2つの動詞を巧みに使い分けていることにあると言えましょう。つまり、ときに「私が見ている」と思い、ときに「私に見えている」と思うことで、目の前の対象の解釈について矛盾に陥らないようにしているからでしょう。忘れてはならないのは、「～を見る」という動詞も「～が見える」という動詞も、目の前の同じ対象に対して使われているという点です。

目の前の対象は見かけの物質であり、

目の前に広がる世界は見かけの物質の世界である

二重像についての分析から、目の前に見えている鉛筆は「見た結果」であるという結論を導きました。それは鉛筆やコーヒーカップに限られたことではありません。あなたの目の前のテーブル、踏みしめている床、視線を上に向けたときそこに見える壁、更に上に向けたときの天井など、目の前に見えている対象のすべてが「見た結果」です。更には視線を窓の外に向けたとき、そこに広がる街並み、大地、空なども、そのすべてが「見た結果」です。

「見た結果」は、光という形で運ばれた外界からの情報が網膜で電気信号に変換され、それが中枢へと伝えられることによる、見るという行為の最終段階で得られるものですから、それは心理現象です。視線を向けることで目の前の空間に時々刻々と連続して立ち現れるそれら目の前の対象は、一般常識では物質であると考えられていますが、しかしそれらは物質ではありません。いわば見かけの物質ということになります。

もっとも、それら目の前の対象は、持てば重さ、硬さ、温かさなどの感覚が生じるわけですから、それら感覚を伴うものは物質ではないか、

という反論もあろうかと思えます。しかし、前節でお話したように、感覚の存在は物質の存在を示唆しはしますが、感覚の存在は即ち物質だ、ということにはなりません。

目の前に広がる世界はこれらの見かけの物質によって構成されているわけですから、それは物質の世界ではなく、いわば見かけの物質の世界ということになります。目の前に広がる世界は物質の世界とは異なる世界であると言いつけてきましたが、それはこのように、目の前の対象は「見た結果」であるという事実から導かれることになります。

物質とはこのようなものだという一般常識、あるいは、物質の世界とはこのようなものだという一般常識、それらはあくまでも常識であり、物質や物質の世界を見る、聞く、触るなどの行為を通して得られた結果であり、物質や物質の世界そのものというわけではありません。

事実、現代物理学が示す世界観は、一般常識とは全くと言っていいほどに異なっていますが、それは当然だと言えましょう。私たちが常識として知っている物質の世界は、可視光線によって、また目の分解能の範囲で捉えられた物質の世界の一側面に過ぎないからです。

もっとも、「目の前の対象は見た結果であるから見かけの物質である、それらから成り立つ目の前に広がる世界は見かけの物質の世界である」というこの結論は、直ぐに納得できるというようなものではないでしょう。今の今まで目の前の対象は物質である、目の前に広がる世界は物質の世界である、と思ってきたわけですし、そして今もそう思っておいでのことでしょうから、二重像というごく日常的なことがらから、たとえ理詰めでその理屈が示されたところで、どうにも納得がいかないことでしょう。どこかに論理的に無理があるはずだということ、その矛盾点を探そうという気持ちになられることでしょう。それは多分、立場が替れば私もそうするだろうと思えます。

しかし、心の世界の解明につながる道筋は、「目の前の対象は見た結果である」という事実を端を発します。理詰めでも得られた事実を事実

として認め、常識にとらわれることなくその意味を探る作業を積み重ねていく必用があります。

もっともそうは言っても、納得のいかない思いはあるでしょう。それら数ある納得のいかなさの中で最大のものは、目の前の自らの身体についての疑問だと思います。「目の前に広がる世界は見かけの物質の世界だと言うが、目の前の自らの身体は肉体としての身体だ。その肉体としての身体が何故見かけの物質の世界の中に存在していると言うのか？」ということについての疑問でしょう。それについては次節で詳しくお話することになります。

投影という論理の破綻

目の前に広がる世界は物質の世界ではない、ということを説明するために、第3章第1節では色について、第3章第2節では感覚についてお話ししました。「もし目の前に広がる世界が物質の世界であると言うのなら、色や感覚という心理現象が物質の世界に存在することになる」という矛盾点を指摘したわけです。それに対し、目の前に広がる世界＝物質の世界と考える立場からは、「色や感覚という心理現象が物質の世界に投影されるのだ」という反論がなされました。

同様の反論は二重像についても行われるものと思います。「もし目の前に広がる世界が物質の世界であると言うのなら、二重像という心理現象が物質の世界に存在することになるではないか」という指摘に対し、「二重像という心理現象が物質の世界に投影されるのだ」という反論がなされることでしょう。

確かに色は物体に付属する性質であり、感覚は肉体としての身体に基づく性質であることから、色や感覚という心理現象が物質の世界に投影されるという論理は、正しくはないにしろ自然な思いかもしれません。

例えば、コーヒーカップを例にとってみましょう。色はコーヒーカ

ップに付随する性質であり、重さや硬さなどの感覚は身体に基づく性質であり、かつその元となる見かけのコーヒーカップと身体は目の前の世界に存在しています。従って、色や感覚が目の前のコーヒーカップに投影されるという思いを持つのも無理のないことかと思えます。

しかし、二重像についてはその論理は成り立ちません。何故なら、もし目の前に広がる世界が物質の世界であり、イメージである二重像が物質の世界に投影されていると言うのであれば、イメージの元になる物質としての対象が目の前に広がる世界に存在していなければなりません。

先程の鉛筆を例にとれば、2本の鉛筆がイメージで物質の世界に投影されているとするのであれば、元の物質としての1本の鉛筆も、反論の立場の人たちが物質の世界であると主張するところの目の前に広がる世界に存在していなければならないはずです。しかし鉛筆が2本に見えるとき、物質としての1本の鉛筆はどこにも見当たりません。

前項の結論にもあったように、目の前に広がる世界は見かけの物質の世界です。色や感覚という心理現象が物質の世界に投影されるという反論も、目の前に広がる世界が物質の世界ではないということが明らかになったことで、投影という論理は色や感覚についても破綻することになります。

この節のまとめ

目の前の対象は「見ている対象」ではなく「見た結果」である。これが心の世界を解明する出発点となる。この事実を元に理詰めで辿ることで、目の前の対象は物質ではなく「見かけの物質」であり、それらの存在する場である目の前に広がる世界は物質の世界ではなく「見かけの物質の世界」である、という結論が導かれることになる。

第3章

第4節 目の前の身体は肉体としての身体か？

身体についての考察

「私がいて、その私が見ているのだから」という思いは、心の世界の真の姿を理解するのを妨げる、手強いトリックです。この思いを「私が見ている」という動作に着目すると、そこからは、「目の前の対象は見ている対象である」という考えが導き出され、目の前の対象は物質であり、目の前に広がる世界は物質の世界である、という一般常識を支える論理となります。

一方、「私がいて」というように自らの身体の存在に着目すると、そこからは、「身体の内と外」という考えが生じます。つまり、自らの身体が存在するということから、身体の内と外とで異なる2つの領域が存在するという考えが導き出されます。そしてその考えの下に、「目の前の身体は肉体としての身体であり、その身体をも含め身体の外は物質の世界である。目の前の対象は私の身体の外に存在している。だから目の前の対象は物質である」という考えが導き出されることになり、これもまた、目の前の対象は物質であり、目の前に広がる世界は物質の世界である、という一般常識を支える論理となります。

これらのトリックにまつわる2つのポイントのうち前者、つまり、「目の前の対象は見ている対象である」という考えは前節の分析で否定され、それは「見た結果」であることが明らかになりました。しかし否定されはしたものの、後者の「身体の内と外」という考えに関連して次のような疑問が生じるものと思います。つまり、「目の前の対象は見ている対象ではなく見た結果であると言うが、見た結果は心の中で生じるはずだ。では、心の中で生じたものが何故私の身体の外に存在するのか」という疑問です。

この疑問も、そして「身体の外は物質の世界である」とする一般常識

も、そのどちらもが「身体の内と外」という考えに由来しています。そこでこの節では、自らの身体について考え、身体にまつわる誤解を解消したいと思います。

自らの身体の解釈

私たちは、自分には固有の身体があると確信しています。確かにその通りで、肉体としての身体は間違いなく存在しています。その外見は身長、体重、顔形というように人それぞれで異なっていますが、その根本を成す骨格、筋肉、神経系、消化器系、呼吸器系、そして皮膚などは全ての人に共通しているわけで、そのような肉体としての身体は確かに存在しています。

この生物学的な身体を基に、人々は衣服をまとい、髪を整え、言葉を操り、表情をつくろうなどして社会の中で生活しています。駅までの道を歩いて移動するのは自らの足であり、カードを改札機にかざすのは自らの手であり、ホームで電車の来るのを待つのも自らの身体です。肉体としての身体があることで物質の世界での行動が可能になり、他者との交渉も可能になります。

このように、人それぞれに固有の肉体としての身体が存在することを否定するつもりはまったくありません。人間のような意識活動を営む生物の存在に先立ち物質の世界の存在を認める、という前提の下で話を進めてきたわけですから当然なことです。しかしながら、この前提の下では是非とも問題として取り上げなければならないのは、目の前の自らの身体についての解釈です。つまり、目の前に見えている自らの身体を肉体としての身体であると解釈していいのか、ということなのです。

目の前に見えている自らの身体を、肉体としての身体であると思う気持ちには根強いものがあります。それは自らの意志によって操ることが出来ます。行きたいところに行くことができ、掴みたいものを掴

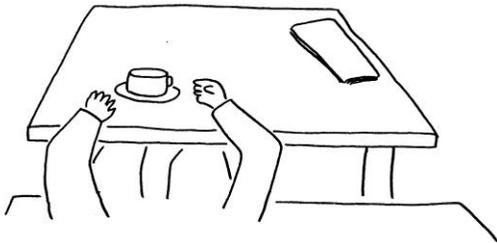
むことができ、見たいものを見ることができ、聞きたいものを聞くことができ、ときには怪我をして痛い思いをし、血が出ることさえあります。これほどにまでリアルに存在する身体を、自らの肉体としての身体だと考えられない理由などありはしない、と考えておいでのことと思います。しかし、実際にその通りなののでしょうか。

自らの肉体としての身体の存在はどのようにして確認されるか

まず、自分に固有の肉体としての身体が存在するという思いが、どのような事実に基づくものであるかについて考えてみましょう。

図 3-7

目の前に広がる世界



一つには目で見ることで、その存在を確認できると考えられています。確かに、自分の頭部や背中では直接見ることはできませんが、腕や足、それに胸から腹部にかけては常に視野の中に捉えることができます。

図 3・7 は目の前に広がる世界を表したものです。目の前のテーブルの上にコーヒーカップがあり、テーブルの手前にはこのテーブルに向かって座っている人物の手と膝とが描かれています。この人物は自らの意志で手を伸ばして目の前のコーヒーカップを掴み、コーヒーを飲むことができます。あるいは所要で自らの足を使ってその場を立ち去ることもできます。自らの意志に基づいて目の前の手と足は動くわけですから、それを自らの肉体としての身体であると考えたとしても、無理はありません。ごく自然なことだと言えます。

自らの肉体としての身体の前は、もう一つには、感覚によって確認できると考えられています。試しに目をつぶってみると、今まで見えていた身体は見えなくなります。しかし、腕を上げればその重量感で腕の存在が確認できますし、物に触れれば物の存在と共に手の存在を

確認することができます。顔にあたる風で顔の位置が分かります。頭を動かすことで、そのときの感覚で頭の存在が分かります。手で身体の各部位に触れば、物体を触ったときとは異なり、その双方に触覚が生じて身体の存在が感じ取れます。それらが渾然一体となって自らの肉体としての身体の存在が確認できます。

見かけの身体

自らの肉体としての身体は見るという行為を通じて、また感覚の存在で知ることができると考えられています。確かに、身体が見えているということは、自らの肉体としての身体の存在を示唆しますし、また身体にまつわる感覚が存在しているということは、自らの肉体としての身体の存在を示唆します。それは事実です。しかしだからと言って、そこに見えている身体を、あるいは感覚の生じている身体を、肉体としての身体であると結論してよいことにはなりません。

前節で二重像の分析を行いました。目の前にかざした鉛筆が1本に見えるときは実在の鉛筆で、2本に見えるときはイメージとしての鉛筆であるという論法は通用しないとお話しました。それと同じ分析は、目の前に見えている自らの身体についても適用することができます。

目の前に指を1本立ててそれに視線を向けて見て下さい。そこには1本の指が見えます。それが一般常識でどのように解釈されているかと言えば、それは実在する肉体としての指であると解釈されています。それでは次に視線を前後にズラして見て下さい。すると、少しぼやけた2本の指が見えると思います。1本るときは肉体としての指であり、2本るときはイメージとしての虚像の指であるという論法は通用しません。1本るときも2本るときも、目の前に見えている指は「見ている対象（肉体）」としての指ではなく、「見た結果（心理現象）」としての指であり、肉体としての指ではありません。

あるいは、夢の中で見るご自分の身体のことを考えてみて下さい。夢

の中で見慣れない街角を歩いているとき、そこには確かに自分の身体が見てとれますが、それは肉体としての身体ではありません。自らの身体が見えるということは肉体としての身体が存在を示唆しますが、見えている身体そのものは肉体としての身体ではありません。

あるいは、感覚が存在しているからそれは肉体としての身体である、とする論法も当てはまりません。第3章第2節でお話したように、感覚が存在するということは物質の存在を示唆しています。従って触覚などの身体にまつわる感覚が存在するということは、肉体としての身体が存在を示唆してはいます。事実その通りで、肉体としての身体は確かに存在するのですが、感覚の存在が即ちその感覚を伴う身体が肉体としての身体であることの証拠とはなりません。

感覚はどこに生じているのでしょうか。第1章第1節の「不思議さに気付くかどうかを試してみる」の項でお話したことですが、試しに机の表面を指でなぞってみてください。当然机の表面にツルツルした感覚が得られます。指先に感覚器があるとはいえ、感覚器は外界からの刺激を受け取り中枢に伝えるための入り口に過ぎません。指先の感覚器そのものに感覚が生じるわけではなく、感覚は脳の活動があって始めて生じるものです。そのツルツルした感覚が指先に生じる、それも指先の側に生じるのではなく机の表面に生じているのです。そして同じようなツルツル感は、鉛筆で机の上をなぞったときにも生じるのです。

このような理由から、あなたが自らの肉体であると思い込んでいる目の前の身体は、あなたの目の前のコーヒーカップが見かけの物質であるのと同様に、いわば見かけの身体であり、肉体としての身体ではありません。

あなたと表情豊かにおしゃべりをしている目の前の人も、街中で目にした流行の服をまとった見知らぬ人も、あるいは久しぶりに会って握手をしている目の前の友人も、確かにそれらの人の肉体としての身体が存在しているのは事実ですが、しかしそこに見えているそれらの

人々の身体は「見た結果」としての「見かけの身体」です。握れば温かさと圧迫感を感じられるその人の手も、全ては「見かけの身体」です。

「見かけの身体」という考えに対して生じる疑問

目の前に見えている自らの身体を、肉体としての身体ではなく「見かけの身体」であると考え、ことに大きな抵抗があり、また疑問を感じるものと思います。目の前に身体が現に見えているではないか、とか、感覚が生じるではないか、とかの疑問については既に説明した通りなので、繰り返しお話することは避けます。

それ以外の疑問、あるいは反論と言い換えた方がいいかもしれませんが、その一つは、

「自己意識を伴う心は身体と一体のものであり、常に自らの身体と共にある。その心は目の前の自らの身体に宿っているのだから、この身体は肉体としての身体である」というものでしょう。

この反論は、「心」と「私」の関係についての核心的な部分に関連したものです。従ってこの反論に対する回答は改めて、第4章の第1節と第3節で行なうこととなります。いまここで一言お話できることは、ここで使われている心という言葉で表される内容は、主として知、情、意に関する部分であり、一般常識で心と呼ばれているものです。確かにこの知、情、意に関する部分も心ではありますが、それは心の構成要素の一部分に過ぎません。そしてそれは、見かけの身体に見かけの手や足などがそれぞれの部位に位置づけられているのと同様に、見かけの身体の顔の内側に位置づけられているに過ぎないということです。

いま一つの反論は、「物質の世界には肉体としての身体が存在している。目の前に見えている自らの身体は周りの世界と全てにわたって整合性が取れている。だから目の前の身体は肉体としての身体だ」というものでしょう。

目の前のコーヒーカップを掴むという行為を例に取ってみれば、自らの意思に基づいて手がコーヒーカップに伸ばされ、それを掴んでいるのではないか。コーヒーカップが口元まで運ばれ、うまいコーヒーを一口飲むことができているのではないか、ということでしょう。つまりは、目の前のコーヒーカップと目の前の身体は、物質の世界における物質としてのコーヒーカップと肉体としての身体の関係とぴったりと一致しているのだから、目の前の身体は肉体としての身体ではないか、という反論です。

見かけの身体と見かけの物質の世界の関係を上手く調整しているのが同調というシステムであり、この疑問はそのシステムについて説明することで解消することができます。

同調というシステム

物質の世界とその中に存在する肉体としての身体の相互の関係が、目の前に広がる世界と見かけの身体との間にも成立していますが、それは脳による情報処理システムの働きによるものです。これを「同調のシステム」と呼ぶことにしますが、このシステムは主に次の2つのことが成り立つように働いており、見かけの物質の世界をあたかも物質の世界であるかのように、また見かけの身体をあたかも肉体としての身体であるかのように見せかける役割を果たしています。

まず1つ目は、肉体としての身体は物質の世界に含まれているということ、そして、物質の世界は不動でその中を肉体としての身体が移動する、ということです。事実、この相互の関係は同調のシステムの中に取り入れられ、見かけの物質の世界である目の前に広がる世界の中に自らの見かけの身体が含まれ、かつ、目の前に広がる世界は不動の存在であり、その中を見かけの身体が移動するようになっています。

目の前に広がる世界や見かけの身体は、網膜像に基づいて構成されています。従って、顔を動かすたびに、あるいは身体を移動する

たびごとに網膜に映る外界は変化しているわけですから、本来なら目の前に広がる世界も上下左右が目まぐるしく変化することになるはずですが。しかし実際は、肉体としての身体の動きにもかかわらず、目の前に広がる世界は固定されて不動の存在であり、その中を見かけの身体が動き回るとい形になっています。

ビデオカメラには手ぶれを防止する機能が備わっており、手ぶれによって映像がぶれるのを防いでいます。しかし、目の前に広がる世界と見かけの身体の相互の関係を支えている脳による同調のシステムは、それとは比較にならない程の素晴らしい働きをしているのが分かります。頭を左右に動かしたことでたとえ部屋の壁が網膜上を大きく移動したとしても、目の前に広がる世界では壁は元の位置に存在し続けるわけです。もしこのような同調のシステムがなければ、目の前に広がる世界が物質の世界ではなく見かけの物質の世界であることは、直ぐに分かってしまうことでしょう。

2つ目は、物質の世界に存在する物質相互の位置関係と、目の前に広がる世界でのそれら見かけの物質相互の位置関係を一致させる、ということですが。

例えば、目の前のコーヒーカップに腕を伸ばし、位置を違えずに掴むことができるためには、物質の世界における物質としてのコーヒーカップと肉体としての腕の位置関係と、目の前に広がる世界におけるそれらの位置関係とがぴたりと一致する必要があります。もし一致していなければ、目の前に広がる世界が見かけの物質の世界であることが分かってしまいます。

もっとも、同調のシステムといえども完璧ではありません。それが崩れることがあります。例えば、その場でぐるぐるっと10回も回転してから立ち止まれば、気分が悪くなって姿勢を保つことができなくなり、周りの世界も揺れ動くことになります。これは、同調のシステムを支えている半規管や前庭に一時的な混乱が生じ、システムが正常に

機能しなくなることによるものです。もっとも、このような体験をしたからといって、目の前に広がる世界が物質の世界ではなく見かけの物質の世界である、という思いを抱くことにはならないでしょう。目眩がして気持ちが悪くなって、物の見え方が少しおかしくなったといった程度の理解に留まることでしょう。しかし実際は、同調のシステムに支障をきたし、外界を正しく再現できなくなった結果によるわけです。

同調のシステムが乱れる例、鏡の中の世界

同調のシステムに支障をきたす例としてもう少し気の効いた例としては、鏡に映った世界の中での身体の動きを挙げることができます。鏡に映った世界は実在しない世界だという反論もあろうかと思いますが、同調のシステムが乱れる例としては、興味深いものです。

レストランなどで、壁全体に大きな鏡が貼り付けられているのを目にすることがあります。ガラス製造の技術が進んだことに伴い歪みの少ない鏡が作れるようになりました。その結果、鏡に映る情景は歪みが少なく、思わずそこにも空間が広がっているかと思ってしまうほどです。もしそこに自分の姿が映っていれば鏡であることは分かりますが、そうでないと区

図 3-8



別がつかないほどです。

鏡を使うことで同調のシステムに乱れを生じさせることができます。図 3・8 に示すように、対象を直接見ることができないようにして、鏡に映った像を見ながら、例えば手を伸ばして対象を掴んだり、あるいは上下、左右に動かしてみてください。

鏡に映った世界も見かけの物質の世界ですが、単なる見かけの物質

の世界とは異なり、そこでは物質の世界との同調が乱れています。つまり、鏡に映った空間は上下左右の関係は実在の空間と同じですが、奥行きが反転しています。従って対象を直接目に行っている状況の下では、対象に向かって手を伸ばせば手は対象に近づきます。しかし、鏡に映った状況の下では、対象に向かって手を伸ばすと逆に手は対象から遠ざかってしまいます。

動作が単純なときは記憶に基づいて行うことができるので、案外簡単に行うことができるかもしれません。しかし、空き缶のようなものを用意して、それを上に持ち上げて一回転させ、そして再びテーブルの上に水平に置く、というような複合的な動きをしようとする、突然混乱が生じてしまうものです。

このように、鏡に映った世界では上手く対象を操ることができませんが、それは同調のシステムに乱れが生じているからです。

左右反転の鏡映像

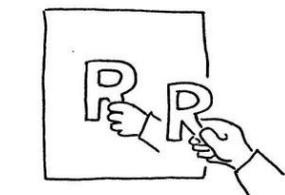
鏡の話が出たついでに、余談になりますが「左右反転の鏡映像」という問題を取り上げておきましょう。つまり、鏡に向かって自分自身を映してみると、その鏡に映った像は上下方向の関係は正しく保たれているのに、右手を上げると鏡の中では左手を上げることになり、左右が反転して映っている、というものです。

第1章第2節でお話した疑問のレベルからすると、ランク2に属するとでも言えるでしょうか。日頃頻繁に体験していながら、自分ではその不思議さに気が付かないものの、指摘されると多くの人が不思議に思う現象です。

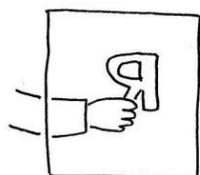
「上下関係はそのままなのに何故左右が反転するのか？」という問い掛けに対し、両眼が左右に並んでいるからだとか、身体が重力に対して垂直になっているからだ、というような回答のなされることがあります。両眼が左右に並んでいるからだという回答に対しては、片目

を閉じて見てみればいいでしょう。重力が関係しているからだという回答に対しては、身体を横にして鏡を見てみるといいでしょう。やはり上下関係が維持され、左右が反転していることに変わりはありません。

図 3-9



(a)鏡の前に
かざして見た状態



(b)鏡の裏から
透かして見た状態

そこで、この鏡映像の問題は幾何光学の問題ではなく、網膜から先の高度な情報処理の過程で生じる現象であると結論されたりもし、またそれがまことしやかに信じられていることがあります。昔から鏡は不思議な力を持つとされてきたことにもよるのかもしれませんが、しかしこれは何ら不思議な現象ではありません。鏡映像は上下方向が反転していないのと同様、実は左右方向でも何ら反転はしていないのです。反転しているのは前後方向についてだけです。

鏡映像の問題を分かり易い形に変えてみましょう。図 3・9 (a)に示すように、型抜きをした R という文字を鏡の前にかざしてみます。すると当然ですが、R の形で文字が見え、また鏡にも R の形で文字が映って見えます。上下左右のどこにも反転はありません。

反転していると思うのは、鏡にかざした R の文字を鏡の側に回り込んで見ようとするからです。事実、図 3・9 (b)のように鏡の側に回り込んで文字を見れば、R は反転してЯ と見えることになります。自分が鏡の向こう側に回り込んで、そしてこちらを見ていると考えるので、左右が反転していると思いついてしまうのです。

あるいは、他の人に頼んであなたと向かい合って立ってもらいましょう。そして自分が手を上げたらそれと同じ側の手を上げて欲しいと頼みます。そこであなたが右手を上げれば向かい合っている人は左手を上げるでしょう。しかし、その人との間に、上一上、下一下、

右一右、左一左というように対応関係が保たれているのは明らかです。鏡映像で本当に左右が反転しているというのなら、自分が右手を上げたとき鏡に映った像はこちから見て左側の手を上げることになるはずです。

鏡映像で変わるのは奥行き関係です。事実、前項の話にもあるように、鏡を見ていて間違った動きをするのは、奥行き方向についてであり、それは櫛を使うときのことを考えてみると分かると思います。

見かけの身体には、内と外とを分ける境界は存在しない

アメーバのような単細胞生物においても、細胞膜1枚によって生体の内と外とが分けられ、そこに個体としての独自の領域が生じることになります。人間の場合も同じです。肉体としての身体が存在し、その皮膚を境にして身体の内と外とが分けられます。身体の内側がその人個人であり、単なる物質の世界から独立した領域となります。

私たちは、「私がいて、その私が見ているのだから」という表現で表されているように、自分には固有の身体があり、その身体によって外界と交渉を行なっているという思いを持っています。そしてそこからは「身体の内と外」という考えが生じ、身体の内と外とで異なる2つの領域が存在するという考えが導き出されることとなります。確かに物質の世界においては、肉体としての身体を境にして身体の内と外とがはっきりと区別されます。それは間違いのない事実です。

しかし、「私がいて、その私が見ているのだから」という表現の中の「私がいて」という言葉で指し示されている自らの身体とは、物質の世界における肉体としての身体ではありません。自分では物質の世界における肉体としての身体について言及しているつもりでいますが、実はそうではなく、そこで指し示されている自らの身体とは、目の前で見えている身体のことであり、その見かけの身体を指して「私がいて」と表現しているのです。

ここで指摘しておきたいことは、目の前に見えている見かけの身体についてであり、見かけの身体には「身体の内と外」とを分ける境界は存在しないということです。何故なら、見かけの身体も見かけの物質の世界も共に「見た結果」だからです。前者は、肉体としての身体を見るという行為によって得られた「見た結果」であり、後者は、物質の世界を見るという行為によって得られた「見た結果」であり、それらの意味する内容は異なるものの、「見た結果」という存在そのものについては何ら質的に異なるところはありません。

それが肉体としての身体であれば、その中には身体を維持していく仕組みが備わっています。また物質の世界では、様々な物体が物理法則に則った運動をしています。そこには、肉体としての身体を境にして明らかに「身体の内と外」とを分ける境界が存在しています。それに対して、見かけの身体は肉体としての身体の「見た結果」であり、そこには肉体としての身体が持っているような機能は備わっていません。もっとも手術の際に腹部を開ければ、胃や腸などの臓器が見て取れるのではないか、という反論があろうかと思いますが、しかしそれも、それらの臓器を見たことによる「見た結果」であり、臓器そのものではありません。

あくまでも、目の前の身体は「見かけの身体」であり、その外は「見かけの物質の世界」であり、共に「見た結果」として質的に異なるものではありません。つまり、見かけの身体による境界はあくまでも見かけの境界に過ぎません。例えば、目の前にコーヒーカップがあり、それに向けて見かけの身体としての手を伸ばしてそれを掴むとき、寸分違わずにコーヒーカップの取っ手に指を絡めることができ、また絡めた指に硬さ、重さ、温かさが感じられるのは、全て同調のシステムのお陰です。もっともそのことによって、目の前の身体は肉体としての身体であり、目の前に広がる世界は物質の世界である、という思いを抱いてしまうことになります。

目の前の身体は見かけの身体であり、見かけの身体には「身体の内と外」とを分ける境界は存在しないということから、この節の最初のところでお話した次のような反論や疑問は解消されることになります。

その反論は、「目の前の身体は肉体としての身体であり、その身体も含め身体の外は物質の世界である。目の前の対象は私の身体の外に存在している。だから目の前の対象は物質である」というものであり、もう一方の疑問は、「目の前の対象は見ている対象ではなく見た結果であると言うが、見た結果は心の中で生じるはずだ。では、心の中で生じたものが何故私の身体の外に存在するのか」というものでした。何れも、目の前の身体は肉体としての身体であり、肉体としての身体の外は物質の世界である、という一般常識に由来する反論、あるいは疑問です。

前者の反論については、目の前の身体が見かけの身体であることが明らかになったことで、その考えは否定されます。つまり、目の前の身体は肉体としての身体ではなく見かけの身体であり、また、見かけの身体の外も物質の世界ではなく見かけの物質の世界です。従って目の前の対象が見かけの身体の外に存在していても、それが物質であることにはならないからです。

「見た結果」を見る、ということは有り得ない

「私がいて、その私が見ているのだから」という表現は、デカルトの「我思う、故に我在り」という言葉と一種似たところがあります。事実、「私がいて、その私が見ているのだから」という表現を逆にすると、「私が見ているのだから、私がいる」という形になり、見るという行為を行なっている私が存在する、というようにも解釈されます。もっとも両者の意味するところは違います。デカルトの言葉は、我と

いう自らの存在の根幹についての言及です。それに対し、「私がいて、その私が見ているのだから」という表現は、目の前の自らの身体を肉

図3-10 (a) 物質の世界



体としての身体であるとし、そのことによって、目の前に広がる世界は物質の世界であると主張するための誤った論法です。

では、「私がいて、その私が見ている」という表現の意味を、図を使って考えてみましょう。

図 3-10 (b)

物質の世界



図 3・10 (a)、(b)は物質の世界を表したもので、物質の世界に肉体としての身体が存在し、その身体が物質としてのコーヒーカップを見ているという状況を表しています。「私がいて、その私が見ている」という表現を物質の世界において解釈してみると、「私には、肉体としての身

体があり、その肉体としての身体を用いてコーヒーカップを見ている」、ということになります。事実、物質の世界には肉体としての身体と物質としてのコーヒーカップが存在し、コーヒーカップで反射された光が肉体としての身体の目に到達し、網膜で電気信号に変換されて、中枢に伝えられます。そこには、見るという行為に伴う「見ている身体（肉体）」と「見ている対象（物質）」の関係が間違いなく存在しています。従って、「私がいて、その私が見ているのだから」という論法は、物質の世界において用いられるのであれば、何ら問題はありません。

しかし、ここで注意していただきたいのは、「私がいて、その私が見ている」という表現は実のところ、目の前に広がる世界における目の前の自らの身体と、目の前のコーヒーカップとの間の関係について

使われているのだ、という点です。つまり、「私がいて、その私が見ている」という表現で言い表されていることは、物質の世界でのことではなく、目の前に広がる世界でのことである、ということです。

前節の結論である「目の前の対象は見ている対象ではなく見た結果である」ということと、この節で導かれた「目の前の自らの身体は見かけの身体である」という2つの事実から、重要な考えが導かれることとなります。それは、目の前に広がる世界においては、「見ている身体（肉体）」と「見ている対象（物質）」の関係は存在しない、と

図 3-10 (c) 目の前に広がる世界



いうことです。つまり、「私がいて、その私が見ている」という関係は成り立たないということです。

図 3・10 (c) は目の前に広がる世界を表したものです。ここに描かれている人物にあなた自身を重ね合わせて考えてみて下さい。一般常識では、目の前に見えている手と膝はあなたの

肉体としての身体の一部であり、目の前のコーヒーカップは物質としてのコーヒーカップであり、私が目の前のコーヒーカップを見ていると解釈されています。つまり、「私がいて、その私が見ている」という状況にあると考えられています。言い換えれば、あなたと目の前のコーヒーカップとは「見ている身体（肉体）」と「見ている対象（物質）」の関係にあると思われています。

しかし、実際はそうではありません。両者は「見かけの身体」と「見かけの物質」であり、そこには見るという行為に伴う「見ている身体」と「見ている対象」の関係は存在していません。そもそも、目の前に広がる世界においては、空間を移動する光などというものは存在しておらず、目の前のコーヒーカップからあなたの目に向けて光りが伝わるという現象は生じていないのです。

もっとも、「電球のような明るいものを見れば眩しいではないか」という反論があろうかと思いますが、それはあくまでも肉体としての身体の目に強い光があたったことにより生じる感覚であり、目の前に広がる世界においてあなたの見かけの目に強い光があたって生じたというものではありません。目の前に広がる世界においては、もともと光は存在せず、ましてや光が伝達しているなどということは有り得ないのです。

あなたは、目の前のコーヒーカップを見ていると思っているでしょうが、そうではありません。目の前のコーヒーカップは「見ている対象」ではなく「見た結果」であり、「見た結果」を更に見る、などということは有り得ないことです。目の前のコーヒーカップは「見た結果」としてそこに存在しているのです。要するに、見ていると思っ**て**はいるものの、実際は見ているわけではない、ということです。

窓の外に視線を向けると、目の前には家、立ち木、空などの様々な対象が見えますが、それらの対象をあなたは見ているわけではありません。それらは見るという行為の結果として、つまり「見た結果(心理現象)」としてそこに存在しているのです。

「私**が**いて、その私**が**見ているのだから」という思いは、目の前の身体は肉体としての身体であるという誤った思い込みによってもたらされる難解なトリックです。第4章第3節の「心の世界の中に、何故「私」が内在しているのか」の項でお話することになりますが、見かけの身体に「私」という思いが与えられることにより、目の前の対象をあたかも自分が見ているかのような思いを抱いてしまうわけで、表現が少々適切でないかもしれませんが、自分自身をも欺く巧妙なトリックであると言えます。

また、第4章第2節でお話することになりますが、目の前の対象は「見た結果」であり、「見た結果をさら**に**見る、ということは有り得ない」という事実からは、認識ということに関連して重要な考えが新

たに導かれることとなります。

逆さの網膜像に対する回答

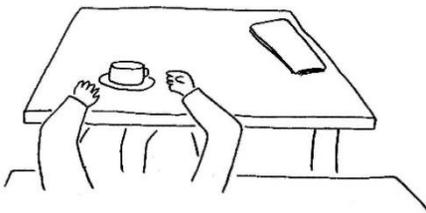
前節で「逆さの網膜像」という問題についてお話ししました。そのとき、この問題に疑問を感じるのは、目の前に見えている対象を「見ている対象」とは考えずに「見た結果」とであると解釈しているところに原因がある、とお話ししました。確かにその通りなのですが、実はこの問題には更に、自らの身体の解釈が関係しています。

図 3-11(a) 物質の世界



「何故外界が逆さに見えないのか？」という疑問を解消するには、何と何を比較しているのかという点を明らかにする必要があります。つまり、何を「見た結果」と解釈し、何を「網膜像」と解釈しているのか、ということを明らかにすることが必要です。

図 3-11(b) 目の前に広がる世界



この点を、図 3・1 1 の絵の中の人物が逆さの網膜像について疑問を感じている、という設定で説明してみることにしましょう。図 3・1 1 (a) は物質の世界を表しており、この人物の網膜上にコーヒーカップが逆さの像を結んでいる様子を、図 3・1 1 (b) はそのときのこの人物の目の前に広がる世界を表しています。

この人物にとって「見た結果」は、図 3・1 1 (b) の、正しくこの人物の目の前に見えているコーヒーカップです。もっとも当の本人は、目の前のコーヒーカップを普段は「見ている対象」と解釈しているのですが、この場合には「見た結果」と解釈しています。目の前に見えている対象はもともと「見た結果」なわけですから、彼のこのとき

の解釈は正しいと言えます

一方の「網膜像」ですが、この人物にとって比較されるべき網膜像は本来図 3・1 1 (a)の網膜像のはずです。当の本人もそうだと思っているのですが、しかしこの人物が自らの身体と思っているのは図 3・1 1 (a)の肉体としての身体ではなく、図 3・1 1 (b)に示されている見かけの身体です。もちろんその見かけの身体は肉体としての身体とは、全くの別物です。

目の前の見かけの身体の、もともと存在しない網膜に逆さまの像が結ばれていると思ひ込み、その架空の網膜像と目の前に正立して見えているコーヒーカップとを比較して、何故逆さに見えないのか、と疑問に思っているわけです。

逆さの網膜像という問い掛けに疑問を持つのは、目の前の対象を「見た結果」と解釈しているわけですが、一方、目の前に見えている自らの身体も見るという行為の結果としての「見た結果」であること、つまり「見かけの身体」であることに気がついていないことに原因があります。

話がややこしくなりますが、この問題に疑問を感じるのは目の前の対象を「見た結果」であると考えているからですが、それは正しい解釈ですが、同時に「見ている対象」とも考えているはずですが、何故なら、この人物は目の前に広がる世界は物質の世界であると思っているわけですが、見かけの身体の網膜に逆さの像を結ぶべき対象が目の前に広がる世界に存在していなければならず、かつその対象は正立していなければなりません。その条件に合致するのは、図 3・1 1 (b)の目の前のコーヒーカップということになるからです。目の前の対象は「見た結果」であると同時に「見ている対象」ともみなされているわけで、正しく目の前の対象は二面性をもって解釈されていることが分かります。

逆さの網膜像の問題は何ら不思議な現象ではありません。目の前に

見えている自らの身体は肉体としての身体ではなく「見かけの身体」なわけですから、その見かけの身体には網膜は存在せず、当然外界の対象が映っているなどということはありません。つまり、目の前に見えている対象と比較すべき網膜像は、見かけの身体にはもともと存在していないわけです。

この節のまとめ

肉体としての身体は確かに存在するが、目の前の自らの身体は肉体としての身体ではなく、見かけの身体である。「私がいて、その私が見ているのだから」という手強いトリックは、その見かけの身体を肉体としての身体であると思い込むところに端を発していることが分かる。

「目の前の対象を私が見ている」と思っているものの、目の前の対象は「見た結果」であり、「見た結果」を更に見るなどということ是有り得ない。目の前の対象は「見た結果」としてそこに存在しているのだ。

第4章 心はどこにあるのか？

第1節 心はどこにあるのか？

これまでの道のり

「心はどこにあるのか」、という一見捉えどころのない問い掛けも、実は具体的なかたちで回答の出せる問題であることが、これまでの話から徐々に分かってきたのではないのでしょうか。物質の世界は確かに存在します。そして、その物質の世界の中に存在する物質で構成された様々な対象と、自らの身体を構成する肉体としての身体は確かに存在します。しかし、一般常識で物質の世界であると考えられている目

の前に広がる世界は物質の世界ではありませんし、目の前の対象は物質ではありません。そして、目の前の自らの身体は肉体としての身体ではありません。それらのすべては、これからお話するように、あなたの心の世界の中のことがらです。

本稿のサブタイトルを「脳によって仕掛けられた難解なトリック」としました。心の世界をめぐるにはトリックと呼ぶべきものがいろいろとありますが、それらの中で一番難解なものが「私がいて、その私が見ている」という思い込みです。これは、目の前に広がる世界の中に「見かけの身体」が生み出されたことによって生じる思いであると考えられますが、この思い込みが心の世界の本当の姿を捉えづらくしています。第1章第2節でお話したトランプのトリックに喩えてみれば、背中に回した左手にカードは握られている、という思い込みにとらわれてトリックを見破れない状況にあるのと同じことです。

しかし、この難解なトリックにも綻びがあります。「目の前の対象は見ていゝる対象ではなく、見た結果である」という事実が、トリックを突き崩す糸口になります。つまり、見るという行為は「見ていゝる対象（物質）→見ていゝる身体（肉体）→見た結果（心理現象）」という一連の図式で表すことができますが、目の前に見えていゝる対象は、常識では「見ていゝる対象」であると考えられていゝるものの実はそうではなく、「見た結果」です。

例えば「コーヒーカップを見る」という行為を例にとれば、「見ていゝる対象」は物質の世界に存在する物質としてのコーヒーカップであり、「見ていゝる身体」はやはり物質の世界に存在する肉体としての身体ですが、「見た結果」は目の前に見えていゝるコーヒーカップそのものであるということです。更には、「目の前のコーヒーカップを見ていゝる」、とあなたは思っているものの実はそうではなく、あなたと目の前のコーヒーカップとの間には、「見ていゝる身体」と「見ていゝる対象」の関係は成り立っていません。何故なら、目の前のコーヒーカップは「見

た結果」であり、「見た結果」を更に見るということは有り得ないからです。目の前のコーヒーカップは「見た結果」として、そこに存在しているのです。

「見た結果」は、外界からの情報が脳に伝えられ、そこで処理されて始めて得られるものですから、それは物理的な現象ではなく心理的な現象です。あなたの目の前に見えている対象は物質ではなく「見かけの物質」であり、またそれらが存在している目の前に広がる世界は物質の世界ではなく「見かけの物質の世界」です。更には目の前に見えているあなたの身体は肉体としての身体ではなく「見かけの身体」です。つまりは、目の前の対象も、目の前に広がる世界も、目の前に見えている身体もすべてが心理現象です。従って、外界からの情報が処理された結果がどのようなものであるかを明らかにすれば、心の世界の輪郭を明らかにすることができるはずです。

外界からの情報を処理した結果

外界からの情報が脳に伝えられ、そこで処理されて得られる結果は、見るという行為によって得られる「見た結果」だけではありません。他の感覚についても同じことが言えます。

聞くという行為によって得られる結果は、いま正に聞こえている音そのものです。人の話し声、自動車のエンジン音、テレビの音声など、それらの音に対応する空気の振動は確かに物質の世界に存在していますが、いま聞こえているそれらの音は、空気の振動そのものではありません。耳に到達した空気の振動は、鼓膜、耳小骨、前庭階、鼓室階、基底膜、コルチ器という一連の過程を辿り、コルチ器の聴細胞で電気信号に変換され、聴神経を通じて脳の聴覚領に伝えられ、そこで処理された結果としてそれらの音が存在しているわけです。

また、いま聞こえている人の話し声は、あなたがその話し声を聞いているのではなく、いま聞こえている話し声そのものが聞くという行為

によって得られた結果であり、聞こえているその部位に存在しているのです。話し声はその人の口元に存在しているのであり、ピアノの音はピアノという楽器そのものに存在しているのであり、音そのものがそれらの部位に位置づけられて存在しているのです。それは、目の前の対象をあなたが見ているのではなく、対象そのものがそこに存在しているのと同じことです。

触覚などの感覚についても同じです。コーヒーカップを掴んだときに感じる、重さ、硬さ、温かさ、そしてコーヒーの香りなどはすべて、外界からの情報が処理された結果であり、それらは物理的な現象ではなく心理的な現象です。重さ、硬さ、温かさ、香り、を感じるのではなく、それらの感覚そのものが心理現象としてその部位に存在しているのです。

心と意識の、言葉の定義

これまで、心と意識という言葉は何ら定義することなく使ってきましたが、「心はどこにあるのか？」という問題に回答を出す前に、これらの言葉の定義をごく簡単に行っておきたいと思えます。深入りするつもりはありません。もともと心や意識について十分理解できているわけではないので、「心はどこにあるのか？」という話に耐えうるレベルのものでよしとしたいと思います。

心と意識の言葉の定義に先立ち、一般常識としての心の扱いを考えておかなければなりません。一般常識としての心は、「見かけの身体の顔の内側に位置づけられ、知、情、意という言葉で表されるような働きを司る」と考えられているものを指す、としていいかと思えますが、これまでの話からお分かりのように、心の本当の姿は一般常識としての心とは全くと言っていいほどに異なったものです。そこで、一般常識としての心について言及するとき、それが本論での心と区別がつくようにしておく必要があります、ここでその表現を取り決めておきた

いと思います。

一般常識としての心を「見かけの心」と表現することは、「見かけの身体」という表現の延長として使いやすいという利点があります。事実、第4章第3節でお話することになりますが、「私」という存在について考察するとき、目の前の手が見かけの手であるのと同様な意味合いから、一般常識としての心はやはり見かけの心と表現するのが適切であることが分かります。しかし、「見かけの身体」には「肉体としての身体」があり、物質の世界に一対一に対応する対象が存在していますが、それに対して、一般常識としての心を「見かけの心」と表現したとき、物質の世界にそれに対応するものが存在するわけではありません。また、一般常識としての心は、これからお話するように心の世界そのものではないものの、それも心の一部であることは事実であり、その点からすると「見かけの心」という表現を使うことにためらいを感じます。

そこで、第4章第3節では「見かけの心」という言葉を使うことはあるものの、これからは一般常識としての心を、少々使い勝手の悪い表現ですが、「いわゆる心」と表現することにして、話を進めることにします。

意識されている内容

意識そのものを定義することは、物質とは何か、空間とは何か、という問いに答えようとするのと同じことで、とても難しいことです。そこで、意識そのものを定義するのではなく、「意識されている内容」によって意識の定義の代わりにしたいと思います。それというのも、意識とか、意識するという言葉は、一般常識としての「いわゆる心」の中の現象というイメージが強く、何かしら臃げなもの、というイメージを伴いますが、これまでの話から分かるように、心や意識は、少なくとも目の前に広がる世界においては、もっと具体的な形で定義す

ることが可能です。そこで、意識の背景に存在するそれを生み出す脳の生理学的なメカニズムに言及することは避け、意識されている内容によって意識の定義に代えようというわけです。

意識されている内容という言葉の他に、意識されているものとか、意識されていることという表現も使うことにします、ほぼ同じ意味であると解釈して下さい。

では、意識されている内容とは何かということですが、まずは感覚器を通して得られる結果を挙げることができます。つまり、見えているもの、聞こえているもの、感じていること、などです。

「見えているもの」は、目の前に見えている対象そのものです。例えばコーヒーを飲もうとして視線を向けたその先に見えているコーヒーカップであったり、目の前のテーブルであったり、あるいは視野の片隅に見えている腕であったりします。

「聞こえているもの」は、身の周りにいま正に聞こえている音そのものです。目の前のコーヒーカップを掴もうとして腕を伸ばすときの衣服のたてるかすかな音、カップを皿から取り上げるときの陶磁器の擦れ合う音、コーヒーを飲み込むときの音などです。

「感じていること」は、身体の表面や内部で生じている感覚です。コーヒーカップの取っ手にかけた指先に感じる重さ、硬さ、温かさなどであり、コーヒーの香りそのものであり、コーヒーを飲んだときに味わう苦さと甘さの味そのものです。

視覚と聴覚については「意識されているもの」とし、触覚などについては「意識されていること」としましたが、視覚と聴覚は身体から離れたいわば遠隔的な現象であるのに対し、触覚などは身体に付随したいわば近接的な現象であることから、使い分けてみました。

さて、いま例に挙げたものは、何れも物質の世界にその元となる対象が存在しているケースですが、意識されている内容には更に、思っている内容、考えている内容、それに感情を含めます。例えばりんごと

いう言葉を聞いて頭の中に思い浮かべる「臃げなりんごのイメージ」、 $5 + 8 = 13$ という暗算をしているときなどのように、考えごとをしているときに頭の中に生じる「臃げな数字のイメージ」、好きなコーヒーを前にしたときの「くつろいだ気持ち」、などです。

「見えているもの」、「聞こえているもの」などは見かけの身体の外のことからであり、また「感じていること」、「匂っていること」、「味がしていること」などは見かけの身体にまつわることからであるのに対し、「思っている内容」、「考えている内容」、それに「感情」は、「いわゆる心」の部分でのことからです。

意識というと、雲を掴むような極めて抽象的なもの、という印象を持つとかと思います。確かにいまの例にもあるように、「いわゆる心」の中に思い浮かべるイメージであるとか、喜怒哀楽のような感情などはそのようなケースでしょうが、そうではなく、目の前に見えている対象、聞こえている音、感じている重さ、硬さ、温かさなどのように、具体性のあるものもたくさんあります。

心の世界

さて次に、心についても簡単に定義しておきたいと思います。心を定義するにあたっては、脳による情報処理の働きを心を含めるかどうかが一番の問題となります。それというのも、「一般常識としての心」がどのようなものであると考えられているかと言えば、「私」がいて、その「私」が、見たり、聞いたり、覚えたり、考えたり、話したり、喜んだり、決断したりする。そのような「私」は「私の身体」と「私の心」から成り立っていて、「私の身体」は肉体としての身体であるものの、「私の心」は非物質的な存在である、というものではないでしょうか。つまり、一般常識としての心のイメージは、心は非物質的な現象であるという思いが強く、心が脳による情報処理の働きと密接な関係があると考えられてはいるものの、それと心とは切り離して考え

るべきだ、という思いが強いように思われます。

確かにそのような捉え方があるのも事実ですが、心について考察を深めていくと、脳による情報処理も心に含めなければ、心というものを扱うことができなくなるのもまた事実です。心の働きとしては、知覚、記憶、学習、思考、言語、情動、意思などが挙げられますが、それらには何れも脳による情報処理が関係しています。例えば知覚の中の見るという行為を例に挙げた場合、目の前に見えている対象が見るという行為の結果であり、それが非物質的な現象であることは明らかですが、その背後には外界からの情報を処理する脳による働きが存在しているわけで、その働きを抜きにしては見るという行為を考えることはできません。あるいは思考を例に挙げた場合も同様で、ものごとを考える過程においてその内容が意識化するのは事実ですが、その背後には脳による情報処理の働きがあるのは間違いのない事実であり、脳に損傷を負った人の症例を考えてみれば明らかです。

これら一連の心理現象を取り扱う学問であるところの心理学は、歴史的な経緯から心や意識を直接取り扱うことはしてきませんでした。心をブラックボックスとみなし、その入口での刺激と、その出口での反応の関係から心の機構を明らかにしようとしてきたわけですから。そのブラックボックスとは、脳による情報処理の機構です。心理学が心理現象を取り扱う学問であるとはいっても、心そのもの、意識そのものを扱うことはしてこなかったわけであり、その背景には、心や意識は抽象的で漠としたものであり科学の対象にはなり得ない、という思いがあったからでしょう。

しかし、これまでの話でお分かりのように、心や意識は一般常識とはまったく異なったものです。確かに、知、情、意という言葉で表されるような抽象的な側面があるのは事実ですが、また一方で、目の前に見えている対象や、周りから聞こえている音などのように、具体的な側面があるのもまた事実です。これまで科学では扱われてこなかった

部分である心や意識の非物質的な側面についての考察は、心の世界の探究に必用不可欠であると思われます。

このような事情から、心を定義するに際しては、「脳による情報処理」と、その結果である「意識化されている現象」の2つの点に留意する必要があることが分かります。そしてこれら2つのことがらをどのように扱うかによって、心の定義には2つの立場が生じることとなります。つまり、後者の「意識化されている現象」のみを心として扱う立場と、前者の「脳による情報処理」と後者の「意識化されている現象」の両方を一括して心として扱う立場です。前者の「脳による情報処理」のみを心として扱う立場も考えられないことはありませんが、ここではその立場は除外しておくことにします。

狭義の心の世界と広義の心の世界

このような観点に立ち、脳の情報処理には直接関らず、その現れである意識化された現象のみを扱う狭い意味での心の世界を狭義の心の世界と定義することにします。従って、今しがた定義した意識されている内容のすべてが入ります。つまり、「見えているもの」、「聞こえているもの」、「感じていること」、そしてそれらに加え、現時点で意識されている「思っている内容」、「考えている内容」、それに「感情」を含めることとなります。

一方、意識化された現象に加え、更に脳による情報処理をも含めた広い意味での心の世界を広義の心の世界と定義することにします。

心ではなく、心の世界という言葉で定義するのは、心というどうしても一般常識での「いわゆる心」のイメージを引きづってしまいがちであり、それを避けたいという思いからです。

本稿は、「心はどこにあるのか？」という問い掛けに対して回答を出すことを目的としています。本来なら脳による情報処理の話にまで踏み込んだ議論が必用でしょうが、いま正に意識されているという意味

での狭義の心の世界に話を限定することとします。しかしそれでも、従来の一般常識としての心や意識についての考えを根底から問い直す契機となるはずです。

「心はどこにあるのか？」への回答

これまでの話、特に第3章の話で、心の世界は一般常識で考えられているものとはまったく異なるものであることが、既にお分かりいただいているのではないかと思います。心の本当の姿を分からなくしている一番の原因は、自らの身体の解釈にあると言えましょう。目の前の見かけの身体を肉体としての身体であると思い込むことで、心は見かけの身体の顔の内側にあると考えてしまい、その結果、心は抽象的で捉えどころのない存在であると解釈されることになるわけです。「私がいて、その私が見ているのだから」という思いが、そのこのところの事情を端的に表しています。

では、いまあなたがコーヒーを前にしてテーブルに向かって座っているものとして、まずは目を閉じてみて下さい。目を閉じるとそれまで見えていた対象が全て見えなくなり、目の前は薄い灰色をした平板なものに変わります。それでも周りからは相変わらず音が聞こえてきます。その音の方向と距離感で自分の周りに空間が広がっているのが分かります。また頭や腕などにまつわる感覚から、身体のおおよその姿が感じ取れます。

一方、一般常識での「いわゆる心」の部分では、何かしら移ろいゆくものが感じられます。他者とコミュニケーションをとるときは言葉を声に出しますが、このときの言葉を外言語と呼ぶのに対し、声に出すことなく心の中で使っている言葉のことを内言語と呼びます。「いわゆる心」の部分では、内言語を使っている活動が行なわれています。それとはなしに思い浮かぶイメージと共に、さしたる方向性を持たない思いが内言語という形をとって語られており、「いわゆる心」の部分

には、知、情、意という言葉で表される心のいわば抽象的な部分が位置づけられていると言えます。

では目を開けてみましょう。するとそれまでの薄灰色の世界が急に色彩豊かな世界に変わり、目の前に広々とした世界が広がることになります。目の前に広がる世界と表現してきたものであり、いわゆる「見かけの物質の世界」です。目の前のテーブル、コーヒーカップ、新聞、壁、床、天井、それらのすべてが見かけの物質であり、心の世界の中のことがらです。視線を手前に引いてくるとそこには自らの身体が見えることとなりますが、いわゆる「見かけの身体」であり、これも心の世界に属するものです。「いわゆる心」は見かけの顔の内側に位置づけられているわけですから、心の世界の中に更に心が内在しているということになり、入れ小細工のような様相を呈していることとなります。

春先ののどかな海辺の高台にたたずんで春の息吹を楽しんでいるとき、その目の前に存在する全てのものが心の世界のことがらだと第1章第1節でお話しました。大海原も、透明感のある空も、そこに一筋の直線を描く飛行機雲も、更には足元の崩れ易い砂地の大地も、海辺に向かって斜面を下りだしたあなたに向かって手を振っている老人と子どもも、そして何よりもあなた自身も、全てはあなたの心の世界の中に存在するものです。青い空を背景にあなたの頭上を優雅に舞っているカモメは、あなたの心の世界を飛んでいるのです。

人間の心の世界は小宇宙と呼ばれるにふさわしく、かくも広大です。「心はどこにあるのか？」という問い掛けに対する回答は、あなた自身をも含め、目の前に広がる世界のそのすべてが心の世界である、とすることができます。

心の世界、その出現と消失

心の世界は常に存在しているというわけではありません。目を覚ま

して活動しているときは意識があり、従って心の世界は存在しています。しかし眠っているときは、夢を見ているとき以外は意識は存在せず、心の世界は存在しているとは言えません。目を覚ましたとき、再び心の世界が存在することになります。従って、心の世界は出現と消失を繰り返していることになります。もっとも出現と消失とは言っても、無から有が生じ、有が無に帰すということではないでしょう。

心の世界全体についての出現と消失の他に、心の世界の中においても出現と消失が生じています。例えば目の前のコーヒーカップは、瞼を閉じると見えなくなると表現されます。確かに物質の世界においては、「見ている対象（物質）」で反射した光は「見ている身体（肉体）」の瞼に遮られて網膜に到達することはありません。従って物質の世界において、「見ている対象」からの光が遮断されることを指して見えなくなると表現されるのであれば、それは決して間違いではありません。

しかし、見えなくなるという表現は実のところ、目の前に広がる世界において使われている言葉です。つまり、「見た結果」である「見かけの物質」が視野から消えることを指して使われている表現であり、心の世界という枠組みの中で見えなくなると表現するのは、正しくありません。何故なら、見えなくなるという表現は、見ることができなくなるという意味であり、「見かけの身体」が「見かけの物質」を見ることができなくなる、という意味で用いられていることになるからです。

第3章第4節でお話したように、「見た結果」を更に見るということは有り得ません。心の世界という枠組みの中で見えなくなるという表現を使うのは間違いであり、正しくは目の前の対象が消失する、ということになります。また、瞼を開けると目の前の対象が見えるようになるということではなく、正しくは目の前に対象が出現するということになります。

物質の世界の中で視線を移動すると、同調のシステムにより見かけの視線が目の前に広がる世界の中を移動することになり、それにつれていろいろな対象が目の前に見えるようになり、また一方で見えなくなります。しかし、それはいまお話したように、目の前にいろいろな対象が出現し、消失する、と呼ぶべき現象です。記憶の糸を辿ることでいろいろなことがらを「いわゆる心」の中に呼び覚ますことができますが、それと同様に、見かけの視線を目の前に広がる世界の中を移動させることにより、様々な対象を心の世界の中に出現させることが可能になるわけです。

心の世界についての疑問と回答

「心はどこにあるのか？」という問い掛けに対するこのような回答に対して、いろいろと疑問を感じたことでしょう。それらの中から次の3つのことを取り上げ、補足の説明をしたいと思います。

(1) 目の前のコーヒーカップが、何故心の世界の中の存在なのか？

見かけの身体の内側辺りに位置づけられている「いわゆる心」の部分が心の世界のすべてであるとする一般常識からすると、いまのような回答に対し納得のいかない気持ちになるものと思います。その納得のいかなさは、「目の前のコーヒーカップだの、目の前の壁だの、何故心の世界の中の存在なのか？」という一言で言い表されるのではないのでしょうか。心といえば、知、情、意という言葉で表されるような高度な精神活動を意味するものであり、目の前のコーヒーカップやただぼんやりと突っ立っている壁などと一緒であるはずがない、ということではないのでしょうか。

理詰めで説明すれば、「目の前の対象は見た結果であり、物質の世界に属するものではなく心の世界に属するものである」ということで、これまでの話の蒸し返しになります。そこで、そのような説明ではな

く、コーヒーカップや壁が心理的な現象であり、心の世界に属するものであることを、別の角度から説明してみることにしましょう。

フェレット（西洋イタチ）という動物をご存知でしょうか。好奇心が旺盛でお茶目な性格の生き物ですが、フェレットがのんびりと昼寝をしているのを見ると思わず可愛いという感情が生じます。その可愛いと思う気持ちは「いわゆる心」の部分に生じる感情ではありますが、それと同時に目の前のフェレットそのものに可愛いらしさが備わっているものです。つまり、目の前のフェレットは無機質な単なる見かけの物質ではなく、感情を帯びた存在になっているのです。目の前の対象そのものに感情が伴うということは、目の前のフェレットがあなたの心の世界の中の存在であればこそです。小犬や小猫、そしてもちろん人間の子どものついても同じことが言えます。「情が移る」という表現がありますが、この言葉はこのような事情の背景を的確に表していると言えます。

鞘から抜き放たれたナイフには、威圧感ともいえる一種独特な存在感があるものです。鈍い光を放つ刃の部分、鋭さを秘めた切っ先、厚みを持った峰の部分の力強さは、見る者に強烈な存在感を示します。その存在感はそれを見た者の「いわゆる心」に生じた感情ではありますが、同時にナイフそのものにその存在感が備わっているのです。それは、目の前のナイフが「見た結果」としての心理現象であればこそです。

ご来光をご覧になったことがあるでしょうか。毎日毎日繰り返される日の出ではありますが、山頂からの雄大な景観の中で迎える日の出は、見る者に深い感動を与えます。東の空が明るみ、日の出の瞬間金色の光が四方八方へと放たれるその光景は、天地創造にも通じるような神々しささえあります。その感動はあなたの「いわゆる心」の中の感情ですが、それと同時に、日の出そのものに一種の神々しさがあるわけで、それは太陽があなたの心の世界に昇ったからこそです。

第3章第2節でお話した、目の前の鉛筆の先に感じるツルツル感も、目の前の鏡に映った頬に触覚を感じるのも、目の前に広がる世界が心の世界であることが理解できれば、何ら不思議な現象でないことが分かります。目の前の鉛筆も鏡に映った頬も、鉛筆の先に生じる感覚や鏡に映った頬に感じる触覚と同様に、心の世界の中のことがらであり、同質の現象だからです。

(2) 「いわゆる心」は特別な存在ではないか？

「いわゆる心」は、知、情、意の分野を司っているのだから、その内容からして特別な存在ではないか？、という思いが強いと思います。確かに知、情、意という言葉で表されるところの思考、情動、意思などは高次の心理機能が関係しているということで、その内容が特別であるということは事実です。ただし、その特別という意味は、思考、情動、意思などの脳による情報処理を含めて考えたときのことです。

「心と意識の言葉の定義」の項でお話したように、本論では脳の情報処理には直接関らず、意識化された現象のみを扱うという立場に立って話を進めています。従ってその立場からすれば、「いわゆる心」も、目の前のコーヒーカップと質的には何ら異なるものではありません。存在という観点からすれば、「いわゆる心」も目の前のコーヒーカップも同じ存在です。

つまり、目の前のコーヒーカップは、外界からの情報を処理した結果として目の前のその部位に位置づけられているわけですが、「いわゆる心」も、知、情、意に関する脳の情報処理の結果として見かけの身体の顔の内側に位置づけられているだけのことです。コーヒーカップも知、情、意も、情報処理の内容を反映したものであるという観点からすればそれぞれ特別な存在ではありますが、その現れである心理現象そのものにおいては、「いわゆる心」がコーヒーカップと異なり特別な存在である、ということはありません。

「いわゆる心」が見かけの身体の顔の内側に位置づけられているということには、当然ながら理由があります。それは、心は情報を処理する中枢であるという考えが反映されたものであり、その表れが「私がいて、その私が見ているのだから」という思いです。つまり、「見ている私」がどこに位置づけられているのが一番自然であるかと言えば、視線の逆方向です。ご自分の立場で考えてみると分かりやすいでしょう。自分に見えている外界は網膜の像に基づいているわけですから、視線の移動に連動して目の前に広がる世界は変わります。そのとき基点となるのは目であり、その目の背後に「見ている私」が存在していると考えるとつじつまが合うわけです。そこで見かけの身体の顔の内側に「いわゆる心」が位置づけられるようになった、と考えることができます。「私がいて、その私が見ているのだから」という表現が示すように、見ていると思われるところに「いわゆる心」が定位されるようになっているわけです。

かつては心臓に心があると考えられていた、というような話も聞きますが、それは知、情、意の中の感情の部分を司ると考えられていたのではないのでしょうか。現に、「胸が躍るような」とか、「胸が張り裂けるような」とか、「心臓が口から飛び出すような」とかの表現がありますが、何れも感情に関係する表現です。

(3) 心の世界の中に、何故「いわゆる心」が内在しているのか？

一般常識で心と考えられているものは「いわゆる心」であり、真の意味での心とは異なります。その「いわゆる心」が心の世界の中に存在しているわけで、いわば入れ小細工のような様相を呈していることとなります。そこで、「心の世界に、何故いわゆる心が内在しているのか？」という疑問が生じることとなります。この疑問に答えるには、「私とは何か？」という問い掛けに対する回答を待たなければなりません。何故なら、心の世界に内在するのはいわゆる心だけではありません。

せん。見かけの身体も見かけの外界も内在しており、「私」そのものが心の世界の中に内在していることになるからです。そこで、この問題は第4章第3節の「心の世界の中に、何故私が内在するのか？」の項で改めて取り上げ、お話することにします。

この節のまとめ

目の前の自らの身体は「見かけの身体」であり、目の前に広がる世界は「見かけの物質の世界」である。「心はどこにあるのか？」という問い掛けに対する回答は、「目の前の自らの身体を含め、目の前に広がる世界のそのすべてが心の世界である」、ということになる。知、情、意を司ると考えられている一般常識としての「いわゆる心」は、見かけの身体と共に自らの心の世界に内在していることになる。

第4章

第2節 心の世界における存在と認識

認識という問題

「心はどこにあるのか」という問い掛けについて考えてきましたが、心について語るには認識という問題を避けて通ることはできません。これまで主として見るという行為について分析してきたわけですが、見るという行為によって外界が認識されるとはどういうことなのか、という問題が残っていることとなります。

例えば、コーヒーカップを見てその存在が認識できるということについて考えてみましょう。それが人間型ロボットのような機械であれば、外界からの情報を処理して選択肢の中からコーヒーカップという1つの選択がなされれば、それで結果が得られたということになるでしょうが、人間のような意識活動を伴う生物の場合には、それで終わ

るわけにはいきません。外界からの情報が脳に送られ、そこで情報の処理が行われ、その「見た結果」として目の前にコーヒーカップが存在することになります。その目の前のコーヒーカップの存在が認識とどう結びつくのか、が問われることになります。

「デカルトの小人」という、デカルトの二元論を揶揄した言葉があります。デカルトは目から得られた外界の情報は、脳の中心部にある松ぼっくりに似た形をした松果体に運ばれ、そこで認識が生じると考えたようです。しかし、外界の情報が松果体に運ばれるとしただけでは認識を説明したことにはならず、「外界からの情報を読み解く人物が脳の中に必要になるではないか」と反論されたわけです。当時の解剖学のレベルを考えれば、その程度の推論でも止むを得ないかと思うのですが、脳の仕組みが明らかになりつつある現代においても、「認識とは何か？」という問題は依然として謎のままです。

認識についての根本的な回答が得られるというわけではありませんが、これまで行なってきた、見るという行為の分析をいま一歩進めることにより、興味深い事実を明らかにすることができます。それは、見るという行為により得られる「見た結果」が認識とどのような関係にあるのか、ということについてです。そしてこの分析にも、「目の前の対象は見ている対象ではなく、見た結果である」という事実が大きな役割を担うことになります。

認識という言葉の定義

認識という言葉の定義をまず行なっておきたいのですが、哲学論議のような奥深い話をしようというわけではありません。認識を高次と低次の2つのレベルに分けて話を進める、ということで、言葉を使い分けるといった程度の話です。つまり、認識には便宜上2つのレベルがあるとして考えを進めたいと思います。例えば、人の顔を見て誰だか分かるとか、時計を見ていま何時であるか分かるとか、目の前のカッ

プがコーヒーを飲むための器であることが分かる、というように、目の前の対象が何であるかが分かるという「高次のレベルの認識」と、何であるかが分かる分からないに先立ち、目の前に対象が存在していることが分かる、という「低次のレベルの認識」の2つです。

ここでは、低次のレベルの認識だけを扱うことにします。つまり、目の前に対象が存在していることが分かる、というレベルの認識に話を留めることにします。言葉遣いにおいては、認識する、分かる、知る、という3つの言葉を使うこととなります。「認識する」という言葉は主として高次のレベルの認識について、「知る」という言葉は低次のレベルの認識について、「分かる」という言葉はその双方について使うことが多いかと思いますが、これら3つの言葉はほぼ同義語として用いているとお考え下さい。

「目の前の対象を私が見て、その存在を私は知る」というトリック

「私が入て、その私が見ているのだから」という思いは難解なトリックであり、それが、目の前の身体が見かけの身体であることを、また目の前に広がる世界が見かけの物質の世界であることを見抜くのを難しくしています。

一方、ここで取り上げる認識については、「目の前の対象を私が見て、その存在を私は知る」という思いが難解なトリックとなり、認識の真の有様を見抜くのを難しくしています。つまり「目の前の対象を私が見て、その存在を私は知る」という表現から分かるように、一般的な解釈の下では、目の前の対象についての情報が見るという行為によって「いわゆる心」の中に取り込まれ、そしてそこで認識が生じる、と考えられています。そして、目の前の対象についての情報が「いわゆる心」の中に取り込まれるという思いから、認識とは抽象的なものである、という印象が持たれることとなります。

しかし、心には知、情、意という言葉で表される抽象的な部分がある

ものの、目の前のコーヒーカップそのものが心理現象であるというように具体的なかたちで存在する部分もあるのと同様に、認識にも具体的なかたちで示せる部分があります。

「目の前の対象を見て、その存在を知る」という表現について考えてみましょう。この表現には、「目の前の対象を私が見て」、そして、「その存在を私は知る」というように2つのステップがあることが示されています。言い換えれば、見ることによって始めて対象の存在を知ることができるということでしょう。「見もしないで、どうしてその存在を知ることができるのか」ということで、当たり前のことではないかと思われるでしょうが、しかし、ここに認識についてのトリックがあります。

具体的な例として、コーヒーカップを見る場合について考えてみましょう。見るという行為の図式では、「コーヒーカップ（見ている対

図4-1(a)

物質の世界



象)があり、それに視線を向けるとそこで反射された光により網膜に像が結ばれ、更に中枢（見ている身体）に情報が伝達され、その結果として目の前にコーヒーカップ（見た結果）が存在する」、となります。

この様子をまずは物質の世界で考えてみましょう。図4・1(a)、(b)は物質の世界を、それぞれ側面からと観察者の目の位置から表したものです。最初のステップである「(物質の世界における)目の前の対象を見私が見る」ということについては、物質であるコーヒーカップから肉体である身体に向けて光の伝達があり、網膜にコーヒーカ

図4-1(b)

物質の世界



ップの像が結ばれます。コーヒーカップと身体との間には「見ている対象（物質）」と「見ている身体（肉体）」の関係があり、この関係を指して「対象を見る」と定義することができます。これは間違いのない事実であり、どこにも問題はありません。

では次のステップである「その存在を私は知る」とはどのようなことでしょうか。網膜からの情報は大腦の後頭部の視覚野に伝えられ、更には2つのルートを辿って、最終的には前頭葉の視覚連合野に運ばれることが分かっています。しかしそれだけでは「その存在を私は知る」ということにはなりません。デカルトは外界からの視覚情報は松果体に運ばれるとしました。視覚野や視覚連合野は確かに視覚情報の処理を司る領域ではありますが、「その存在を私は知る」という認識の観点からすれば、松果体ではなく視覚野や視覚連合野に運ばれると言い換えられただけのことであり、認識そのものについては何ら説明しているとは言えません。

「（物質の世界における）目の前の対象を私が見る」という行為、つまり、「見ている対象（物質）→見ている身体（肉体）」という過程がなければ外界から情報が取り込まれることはなく、その点において必用不可欠なステップですが、「（物質の世界における）目の前の対象を私が見る」という行為は認識そのものとは直接関係のないことです。現に夢のことを考えてみれば明らかです。「対象を見る」という行為が行なわれていなくても、夢の中で対象を認識することは可能です。

第3章第4節で、「私がいて、その私が見ているのだから」という思いに潜むトリックのからくりを分析しました。「物質の世界に私がいる（肉体の存在）」ことも、「物質の世界で自分が見ている（光や電気信号による情報の伝達）」ことも事実ですが、しかし、この思いの中で示されている「私」の本当に意味するものは、目の前に広がる世界における目の前の「見かけの身体」を伴った「私」であるはずで

ところが、その「見かけの身体」を物質の世界における「肉体としての身体」であると思い込んでしまっている。そして、物質の世界とはこのようなものだ、という思いの表れである物質の世界のイメージを目の前に広がる世界に重ね合わせてしまう。その結果、「肉体としての身体を伴った私」がいて、その私が見ているのだから、目の前の対象は物質である」という思いを持つことになるのだ、とお話しました。

「目の前の対象を私が見て、その存在を私は知る」という思いを持つのも、同じところに原因があります。物質の世界と目の前に広がる世界とを重ね合わせ、両者が同じであるという考えのもとに、対象を見ている私を、そしてその対象の存在を知っている私を物質の世界における「肉体としての身体」を伴った「私」であると考えてしまう。しかし実のところ、この表現で示される「私」とは、目の前に広がる世界における「見かけの身体」を伴った「私」であるはずで

「私」がいて、その私が見ているのだから」という思いは物質の世界においてではなく、目の前に広がる世界においての思いであるのと同様に、「目の前の対象を私が見て、その存在を私は知る」という思いも、目の前に広がる世界においての思いであることに気付くことが、認識についてのトリックを見破るポイントになります。

認識についてのトリックのからくり

このような前置きの話のもとに、次に図4・1(c)に示す目の前に広がる世界において、「目の前の対象を私が見て、その存在を私は知る」という表現を検討してみましょう。

図4-1(c) 目の前に広がる世界



一般常識では、目の前のコーヒーカップは「見ている対象（物質）」であり、目の前に見えている身体は「見ている身体（肉体）」であると考えられており、

そこには「目の前の対象を見る」という関係が定義できると考えられています。しかし、既に第3章第4節でお話した通り、実際はそうではありません。目の前に広がる世界では「見ている対象」と「見ている身体」の関係は定義できません。何故なら、目の前に広がる世界においては、目の前のコーヒーカップは「見かけの物質」であり、目の前の身体は「見かけの身体」であり、「見かけの物質」から「見かけの身体」に向けて光が伝わるということはありませんし、見かけの身体にはもともと網膜は存在せず、存在しない網膜に像を結ぶということはないからです。従ってそこには、「見ている対象」と「見ている身体」の関係は存在していません。つまり、「目の前の対象を私が見る」という行為は目の前に広がる世界においては定義できません。それにもかかわらず、「目の前の対象を私が見て」という表現が使われるところに、認識についてのトリックが隠されています。

少し表現を変えて説明してみましよう。引き続き図4・1(c)の目の前に広がる世界についてです。あなたは目の前のコーヒーカップを見ていると思っていますし、また、目の前のコーヒーカップを見ることでそのコーヒーカップの存在が認識できる、と思っているわけです。

しかし、実際はそうではありません。あなたが自分の身体と思っているものは「見かけの身体」であり、あなたが見ていると思っているコーヒーカップは「見かけの物質」であり、そこには「見ている身体」と「見ている対象」の関係は存在しません。目の前のコーヒーカップは「見た結果」としてそこに存在しているのです。あなたは目の前のコーヒーカップを見ているわけではありません。事実、「見た結果」を更に見るなどということは有り得ません。見ているわけではないのにコーヒーカップの存在が分かるということは、そこに見えているコーヒーカップは、存在であると同時に認識でもあるということです。

「あなたの目の前にコーヒーカップは存在していないのでしょうか？」

「いいえ、存在しています。」

「あなたはそのコーヒーカップを見ているのでしょうか？」

「いいえ、見ているわけではありません。」

「あなたは目の前にコーヒーカップが存在しているのが分からないのでしょうか？」

「いいえ、分かります。」

見ているわけではないのにそのコーヒーカップの存在が分かるということは、あなたの目の前のコーヒーカップは存在であると同時に認識なのです。

「目の前の対象を私が見ている」という思いが、認識の本質を見誤らせる原因となっているのです。

低次のレベルでの認識の様式は高次のレベルでの認識と異なるかもしれませんが、しかし、少なくとも低次のレベルでの認識においては、「目の前の対象を私が見て、その存在を私は知る」という認識の様式は存在せず、「目の前に対象が存在することが、同時に認識である」こととなります。これは逆に言い換えることも可能でしょう。つまり、「認識は同時に存在である」と。もちろん、心の世界における存在の意味は、物質の世界での存在とは異なったものであろうかと思われま

す。
意識という言葉をここで用いるならば、意識に上ることが知ることの必要条件であるかどうかは明らかではありませんが、意識に上るとは知ることの十分条件であると言えましょう。

認識という観点からみた心の世界

「目の前の対象を私が見て、その存在を私は知る」という認識の様式は存在せず、目の前に見えていることが即ち認識である、言い換えて、目の前に存在していることが即ち認識である、ということですが、それは音や触覚などの他の感覚についても当てはまるだろうということは、容易に想像できるでしょう。

いま聞こえている音は「音を私が聞いて、その存在を私は知る」のではなく、音そのものがその位置に存在し、そしてそれが同時に認識でもあるわけです。ピアノの演奏による音色は、その音色そのものが存在であり、同時にあなたの認識です。聞こえている音を更に聞いているのではなく、また聞こえている音を認識するのではなく、いま聞こえている音そのものが存在であり、認識であるわけです。ピアノの演奏を聞いて受けた感動があなたの「いわゆる心」の中のできごとであるのと同様に、そのピアノの音色そのものがあなたの心の世界の存在であり、認識なのです。

触覚の場合も同じです。「触覚を私が感じて、その存在を私は知る」のではなく、その触覚そのものが見かけの身体、あるいは見かけの身体と接触する部位に存在し、同時にそれは認識なのです。

認識は外界（物質の世界）からの情報が心の中に取り込まれて生じるものである、という思いがあります。確かにそれは正しいのですが、問題は、その外界を目の前に広がる世界に重ね合せてしまうところにあります。「目の前の対象を私が見て、その存在を私は知る」という表現がそのこのところの事情を端的に示しています。認識は「いわゆる心」の中で生じるものであり、それには「見かけの外界」からの情報が一旦「いわゆる心」の中に取り込まれなければならない、と考えてしまうわけです。しかし、実際はそうではありません。目の前に広がる世界に存在することが同時に認識なのです。

認識は見かけの外界からの情報が「いわゆる心」の中に取り込まれて生じるものである、という一般常識としての考えは、言葉遣いにも表れています。目の前に広がる世界において「見かけの身体」の外の対象については、「目の前の対象を私が見て、その存在を私は知る」とか、「周りの音を私が聞いて、その存在を私は知る」というように、見かけの外界からの情報が一旦「いわゆる心」の中に取り込まれるという表現が使われます。しかし、もともと心の中の現象であると考え

られている感情については、「相手の人の悲しんでいる様子を私が見て、その人の悲しみを私は知る」と表現されることはあっても、「自らの悲しみを私が感じて、自らの悲しみを私は知る」と表現されることはありません。悲しみが「いわゆる心」の中のできごとであり、改めて心の中に取り込む必用がないと考えられているからでしょう。

喜びや悲しみなどの感情は、それそのものが認識であるという考えは一般常識としてもありますが、しかし、目の前のコーヒーカップそのものが認識であるという考えは一般常識にはありません。目の前に広がる世界に対象が存在することが同時に認識であるということも、目の前に広がる世界が心の世界であることを考えれば、格別不思議なことではないはずです。

この節のまとめ

「目の前の対象を私が見て、その存在を私は知る」ということではない。そもそも目の前の対象を更に見るということは有り得ず、目の前に対象が存在するということは同時に認識でもある。目の前に広がる世界が心の世界であることからすれば、目の前に対象が存在するということは、少なくとも低次のレベルの認識においては、認識としての条件を既に満たしていると言えるはずである。

第4章

第3節 私とは何か？

「私」という存在

心というものに興味が持たれる理由はいろいろでしょうが、突き詰めれば、「私とは何か？」という問いに関心があるからではないでしょうか。物心がついたときから、「私」という他のものでは置き換え

ることのできない独自の存在として、他ならぬ自分自身が感じ取っている思いですが、自分自身のことでありながら、答えることの難しい問い掛けです。

これまで行なってきた心の世界についての探究をいま一步進めることによって、「私とは何か？」という問いに対して、完全な回答が得られるというものではありませんが、この問題を考える上で興味深い事実を明らかにすることができます。それは、心の真の有り様が一般常識で考えられている心の姿とは根本的に異なっているのと同様に、「私とは何か？」という表現で言い表されている「私」は、一般常識で考えられている「私」とは全く異なるものであることが明らかになります。

では、「私」という存在について考えてみることにしましょう。「私とは何か？」という問い掛けで言い表されている「私」は、常に身体を伴った存在であると受け止める必用があります。事実、自分自身のことでも分かりますし、また他人について考えても分かります。「私」とは、「私の心」と「私の身体」を合わせ持った存在であり、「Aさん」とは、「Aさんの心」と「Aさんの身体」を合わせ持った存在であると考えられます。

「私の心」がなくて「私の身体」だけが存在するのであれば、それは植物人間のような状態にあると言えますし、その人自身、「私の身体」という思いは持っていないことでしょう。また、「私の身体」がなくて「私の心」だけが存在するというのであれば、何かしら超常現象のような話になってしまい、科学の立場に立つという本稿の範ちゅうを超えてしまうことになります。

そこで「私」とは、心と身体の双方を合わせ持つ存在であり、

「私」 = 「私の心」 + 「私の身体」 [1]

という図式で表すことができそうです。

いま一つ、「私」という言葉には、自己意識が含まれていることにも

注意する必用があります。自己意識という言葉は大変やっかいな概念であり、「私」というものについてすべてが分かっているわけではない現状で、それを明確に定義するのはとてもできることではありません。しかし、「私とは何か？」という問いに言及しようとしているわけですから、曖昧なままで済ますことはできません。心や意識、更には認識という言葉の定義のときと同様に、自己意識についても深入りすることなく、ここでの話に耐えうるレベルのものでよしとし、簡単に定義しておきたいと思います。

自己意識という言葉は文字通りに解釈すれば、自己を意識する、あるいは、自己が意識される、となるでしょうが、自己の存在を認識する、あるいは自己の存在が認識される、と言い換えることもできるでしょう。いわゆる自己認識という表現ですが、ただ単に意識を認識という言葉で置き換えただけのことですが、この方が扱いやすいでしょう。

では、自己の存在の認識とは何でしょうか。自らの身体が存在することの認識でしょうか？あるいは、知覚、記憶、学習、思考、言語、情動、意思などを司ると考えられている心が存在することの認識でしょうか？「私」＝「私の心」＋「私の身体」[1]という考えの下では、その両方であると考えるのが妥当でしょう。そこで、自己意識とは「私の心」と「私の身体」の双方の存在が認識されることである、と定義しておきたいと思います。不完全であることは承知していますが、取り敢えずこの定義のもとで話を進めたいと思います。

「私」という存在の問い直し

「私」＝「私の心」＋「私の身体」[1]という図式で示される「私の心」と「私の身体」は、一般常識ではどのようなものであると考えられているのでしょうか。

まずは「私の身体」についてですが、一般常識では「私の身体」は、肉体としての身体であると考えられています。人それぞれで身長、体

重、顔形、更には血液型などが異なっており、その人に固有のものであり、それは物質の世界の中に存在しています。一方「私の心」は、その肉体としての身体の脳によって生み出されるものであり、非物質的な存在であると考えられています。

一般常識ではという断りの下での話なので、その通りの常識的な話であり、何の変哲もないもので終わってしまいます。先ほどの図式は、

「私」 = 「私の心」 + 「私の肉体としての身体」 [2]

と書き表すことができます。確かに、この図式で表されるものを指して「私」である、と定義することに何ら問題はありませぬ。これはこれで正しい解釈だと言えます。私たちに固有の肉体としての身体が存在しているのは間違いのない事実であり、その身体の頭部に位置する脳によって心が生み出されるということも間違いのない事実でしょう。そのような存在を指して「私」、と定義することに格別異議を唱えるつもりはありません。それはそれで正しい解釈だと言えます。

しかし、これまで行なってきた心の世界についての考察と照らし合わせて考えてみると、私たちは果たしてそのような存在を指して「私」と言っているのだろうか、ということが疑問になります。そこで、「私」 = 「私の心」 + 「私の身体」 [1] という図式を常識からではなく、これまで行なってきた心の世界の分析を通して問い直してみたいと思います。

まずは「私の身体」についてですが、この図式で示される「私の身体」が果たして肉体としての身体を指しているのか、ということが疑問になります。確かに、物質の世界には肉体としての身体が存在しているわけで、それは間違いのない事実です。そして、それを指して「私の身体」と定義することにも何ら問題はありませぬ。しかし、いまあなたが「私の身体」と思っているものは、目の前で見えている自らの身体であるはずでず。視線を向ければそこに見て取れる、思いのままに操ることができるその身体であるはずでず。その身体は、物質の世界

に属する肉体としての身体ではなく心の世界に属する見かけの身体であることは、既に第3章第4節でお話した通りです。私たちは、心の世界の中の「見かけの身体」を自らの身体であると思い込んでいるわけです。肉体としての身体の存在は、知識として知っているだけのことです。

一方「私の心」についてですが、心の世界についても第4章第1節で分析した通りであり、心の世界は一般常識での心とはまるで異なったものです。あなたの「見かけの身体」を含み、あなたの目の前に広がる世界そのものが心の世界であり、それが「私の心」であるはずですが、しかし、いまこの原稿を読んでいるあなたに感じ取れる「私の心」は、目の前の「見かけの身体」の顔の内側あたりに存在すると思われているはずですが、それは一般常識での心であり、第4章第1節で「いわゆる心」と名付けられたものであり、本来の心の世界とは異なったものです。「いわゆる心」は心の世界の一部ではあるものの、心の世界そのものと一致するわけではありません。その「いわゆる心」が「私の心」と思われていることからすれば、それは「見かけの心」と表現することもできようかと思えます。

つまり、「私」の構成要素である「私の身体」は「見かけの身体」であり、また「私の心」も見かけの身体に宿る「いわゆる心」であると解釈されるべきものです。何れも心の世界の中に存在するものです。そこで、「私」についての先ほどの図式は、

「私」 = 「いわゆる心」 + 「見かけの身体」 [3]

という形に姿を変えることになります。また、「いわゆる心」を「見かけの心」と表現すれば、更に、

「私」 = 「見かけの心」 + 「見かけの身体」 [4]

と表されることになります。

私とは何か？

「私」という存在は、「私」＝「私の心」＋「私の身体」[1] という図式で表されるとして話を始めました。そして、前項での「私」という存在の問い直しの結果、私たちが「私」と思っているのは、「私」＝「私の心」＋「私の肉体としての身体」[2] と表せるものではなく、「私」＝「いわゆる心」＋「見かけの身体」[3] と表されるべきものである、ということでした。

これまでお話してきたことは、意識化された現象のみを心とする狭義の心の世界についてであり、また認識については、目の前に対象が存在することが分かる、という低次のレベルの認識についてでした。脳の情報処理を含む広義の心の世界については、また、ものごとの意味など高次のレベルの認識については何ら言及していません。そのような状況のもとで「私とは何か？」、という問いに回答を述べようとするのが適当でないのは承知していますが、前項での話からすれば、「私とは、自らの心の世界の中に生み出された存在である」という回答に辿り着くことになります。

確かに一般常識では、「私の身体」は物質の世界に存在する肉体としての身体であり、「私の心」はその肉体としての身体の頭部に位置する脳によって生み出されるものである、と考えられています。事実、私たちには肉体としての身体があり、その頭部に存在する脳を含め、その肉体としての身体が私たちを生理学的な側面から支えているのは間違いのない事実です。また、「私の心」として、脳による情報処理と、その結果としての意識化された現象が存在するのもまた事実です。従って「私」＝「私の心」＋「私の肉体としての身体」[2] の構成をもって「私」と定義することは可能であり、また間違いということはありません。

しかし、私たちに固有の肉体としての身体があるのは確かですが、では、その肉体としての身体はどこにあるのでしょうか。目の前に見え

ている身体を自らの肉体としての身体であると思っているのではないのでしょうか。しかしそれは、心の世界の中に存在する「見かけの身体」であり、肉体としての身体ではありません。

心は脳によって生み出されるという考えも、正しいでしょう。では、その心はどこにあるのでしょうか。顔の手前の辺りにあるようだ、という答えが返ってくるのではないのでしょうか。しかし、その顔は見かけの身体の顔であり、肉体としての身体の顔ではありません。従ってその内側には脳はありません。見かけの顔の内側をいくら探しても、私たちが探しているような心は現れてきません。そこに位置づけられているのは「いわゆる心」であり、心の世界の一部ではあるものの、知、情、意という言葉で表されるような部分はその部位に位置づけられているに過ぎません。そもそも見かけの顔の内側それ自体も、心の世界の一部です。

つまり、私たちには肉体としての身体があるというのは事実ですが、私たちが自らの身体と思っているのはその肉体としての身体ではなく、心の世界の中の「見かけの身体」です。また心が脳によって支えられているのは事実ですが、私たちが自らの心と思っているのは、心の世界の中の「見かけの心」です。目の前のコーヒーカップがコーヒーを飲むための器である、という意味を伴って心の世界の中に存在するのと同じように、「私」は「私」という思いを伴って心の世界の中に存在しているのだと言えます。

このような回答に対し腑に落ちなさを大いに感じられることと思います。その理由はいろいろとあるでしょうが、一番の原因は「では、肉体としての身体の存在はどうなるのか？」というところにあるのではないのでしょうか。

確かに私たちには肉体としての身体が備わっています。私たち人間の存在に先立ち物質の世界は存在するという前提のもとで話を進めてきたわけですから、肉体としての身体は間違いなく存在しています。

ただし、自らの肉体としての身体について語る事ができるのは、自らの肉体としての身体が存在が認識できて始めて可能になる、ということをおぼれてはなりません。

物質の世界の中に物質としてのコーヒーカップが存在していても、それが認識される事がなければ、コーヒーカップの存在について私達は語る事はできません。もちろんここでも認識に先立って物質の存在を認めています。しかし、認識されなければコーヒーカップについて語る事はできません。そして、認識されるのは物質としてのコーヒーカップそのものではありません。見るという行為にまつわる一連の過程を経て、目の前にコーヒーカップが存在していることが認識であり、その目の前のコーヒーカップは物質としてのコーヒーカップではなく、見かけの物質としてのコーヒーカップです。

私たちの肉体としての身体についても同じことが言えます。認識に先立ち肉体としての身体は確かに存在しています。ただし、肉体としての身体が存在していてもそれが認識されなければ、それについて語る事はできません。私たちが自らの身体について語る事ができるのは、目の前に自らの身体が存在して始めて可能になります。そしてその身体は肉体としての身体ではなく、見かけの身体です。つまり、私たちが「私の身体」として認識できるのは目の前に存在している「見かけの身体」であり、「肉体としての身体」ではないということです。

「私」という存在を「私」＝「私の心」＋「私の身体」[1] という図式で表しました。この図式では、「私の心」と「私の身体」は別々の存在であるかのような表現となっています。確かに、「私」＝「私の心」＋「私の肉体としての身体」[2] という図式であれば、「私の心」と「私の肉体としての身体」とは異質な存在です。しかし現実には、「私の心」は「見かけの心」であり、「私の身体」は「見かけの身体」であり、両者は共に心の世界の中の存在です。従って、「私」はそれ

ら2つの異質な要素から成り立っているというものではありません。両者は心の世界の中の存在であり、渾然一体となった存在です。事実、私たちは「私の心」と「私の身体」の両者は切り離せない存在であると感じていますが、その心と身体の切れ目を感じさせない一体感は、両者が共に心の世界の中の存在であり、「見かけの身体」と「見かけの心」という同質の存在であることに由来するものと思われま

自己意識

前の項で、私たちが「私」と捉えているものは、「いわゆる心」と「見かけの身体」から成り立つものである。「私」＝「いわゆる心」＋「見かけの身体」 [3] という回答を出しましたが、「私」という存在について考える上でいま一つ重要な要因である、自己意識について考えてみましょう。

本節の最初の項で、自己意識とは「私の心」と「私の身体」の双方が認識されることである、と定義しましたが、それぞれが「いわゆる心」と「見かけの身体」であると解釈されていることからすると、自己意識とは「いわゆる心」と「見かけの身体」の双方が認識されることである、ということになります。

「見かけの身体」の存在が認識されるということは、単純な話です。前節でお話したように、目の前に広がる世界の中に存在することが同時に認識であるわけですから、視線を自らの身体に向けることによってそこに「見かけの身体」が立ち現れ、それが「見かけの身体」の存在の認識ということになります。もっとも、それが自らの身体であるという解釈がなされるには、高次のレベルの認識が関与することになります。従って「私の身体」の存在が認識されんとするには、より高次の認識についての検討が必用となるでしょう。しかし、「見かけの身体」の存在が「私の身体」の存在の認識につながるだろうということは、想像するのにさして難しいことはないでしょう。

しかしもう一方の、「いわゆる心」の存在が認識されるということになると、話は厄介です。何故なら、それは見かけの身体の顔の内側あたりに位置づけられていると考えられてはいるものの、見ることも触ることもできない極めて抽象的な存在だからです。

見かけの顔の内側に「いわゆる心」が存在するという思いは、どのようなことから生じるのでしょうか。第4章第1節でお話したように、そこが視線の逆方向であることが大きな要因になっていると考えられます。視線の移動に伴い目の前に広がる世界に様々な対象が立ち現れるわけですが、その視線の逆方向にそれらの対象を見ている「私の心」が存在する、と考えるとつじつまが合うからです。

「私がいて、その私が見ている」という思いが、そのこのところの事情を端的に表しています。「私がいて」というときの私とは、「私の心」と「私の身体」の双方のうち「私の身体」の意味合いが強く、「私が見ている」というときの私とは「私の心」の意味合いが強いと解釈できます。従って、「私がいて、その私が見ている」という思いは、言い換えると、「私には自らの身体があり、その身体に宿る私が見ている」という表現になるでしょう。

もっともこれは常識としての思い込みであり、正しくは、目の前の見かけの身体を自らの身体であると思い込み、その見かけの身体の顔の内側から目の前に広がる世界を見ている、と思い込んでいるということです。つまり、私が見ているという思いは、言い換えて、「いわゆる心」という思いは、自らの「見かけの身体」に付随する思いであり、「見かけの身体」と独立に存在する思いではないようです。

このように、「いわゆる心」は、もともと間接的な形でしかその存在を表し得ないもののようです。それというのも、「私の心」という言葉で言い表されるべき本来の姿は、自らの見かけの身体を含めた目の前に広がる世界そのものです。従って「私の心」の存在の認識は、見かけの身体を含めた目の前に広がる世界の存在の認識と同じであるは

ずです。それらが目の前に広がる世界に存在することが即ち「私の心」の存在であり、同時に認識であるはずはです。

しかし実のところ、一般常識で「私の心」と思われているものは「いわゆる心」です。「いわゆる心」は、その「いわゆる心」そのものが認識されるのではなく、私が見ている、私が聞いている、私が感じている、私が記憶する、私が話す、私が考える、私が決める、などというように間接的にしか表し得ません。それらの行為にまつわる「私が何々する」という思いが「いわゆる心」の思いであり、同時に認識でもあると言えましょう。これらの思いは何れも自らの「見かけの身体」に付随する思いであり、「見かけの身体」に付随する形でしか表し得ないもののようです。ちょうどそれは、目の前のコーヒーカップにコーヒーを飲むための器という意味が付随しているのと同じであり、それと同じようにして、「いわゆる心」は「私の心」という意味を獲得し、「見かけの身体」の顔の内側に位置づけられていて、それが同時に「いわゆる心」の存在の認識であると言えるようです。

自己意識とは「いわゆる心」と「見かけの身体」の双方が認識されることであると、この項の最初でお話しました。これまでの話から分かるように、「見かけの身体」の認識は目の前に広がる世界に「見かけの身体」が存在することが即ち認識であり、一方、目の前に広がる世界で展開する「見かけの身体」に伴う、例えば私が見ているというような見かけの行為が、「いわゆる心」の存在の認識につながると結論できるようです。

「私」という存在の形成

ここで話している「私」は、

「私」 = 「いわゆる心」 + 「見かけの身体」 [3]

という図式で表される「私」です。従って、「私」は覚醒時にのみ存在するものであり、肉体としての身体のように常に存在しているとい

うものではありません。例えば睡眠中は、夢を見ているときを除いて「私」は存在していません。見かけの物質が出現と消失を繰り返しているのと同じように、出現と消失を繰り返していると考えべきものです。消失から出現の間の空白を埋めるのが記憶であり、記憶が「私」の同一性を維持する上で大切な役割を担っているものと思われま

す。「私」は「いわゆる心」と「見かけの身体」とを伴って存在しているわけですが、生まれながらにして存在する、というものではありませんし、また、ある日突然降って湧くようにして生じるというものでもありません。乳幼児の発達に見られるように、生命の誕生以来、外界との関わりの中で長い時間をかけて心の世界の中に形成されると考えるべきものです。

「私」という存在の形成に一番強く寄与するのは、「見かけの身体」が心の世界の中に生み出されることだと思われま

す。それはちょうど、個体が環境から分離、独立して生命が誕生するのと同じようなもので、見かけの身体が目の前に広がる世界の中で周りの対象から分離、独立して自らの身体という意味を持つことが、「私」の誕生につながるとみることができそうです。

「見かけの身体」が自らの身体であるという思いが生じるその背景には、高次のレベルの認識の機能が必用だと思われま

す。見る、聞く、感じるなどの機能を通して心の世界の中に外界が構築されることとなりますが、当初は不完全なものであろうと推測されます。乳幼児が自らの身体を使って外界に働きかけることで徐々に改善され、いま私たちが得ている目の前に広がる世界と同じレベルのものが形成されるようになるのでしょ

うでしょう。

目の前の「見かけの身体」が自らの意思に基づいて運動を起こすことで、「肉体としての身体」という意味を持つようになる。身体の運動を通して周りの対象に働きかけることで、目の前の対象は硬さ、重さ、温かさなどの性質を示し、そのことで目の前の対象は「物質」として

の意味を持つようになる。更には、加速度や平衡にまつわる感覚により、見かけの物質の世界は固定され、その中を見かけの身体が移動するようになり、見かけの物質の世界と見かけの身体の間、「物質の世界とその中に存在する肉体としての身体の関係」が形づくられることになる。

一方、目の前に広がる世界が見かけの身体の視線の先に広がることから、視線の手前には特別な意味が与えられることになる。そして、記憶、学習、思考、言語、情動、意思などがその見かけの顔の内側に位置づけられることにより、「見かけの身体の顔の内側に心がある」という思いが生まれることになる。

このようにして心の世界の中に見かけの物質の世界、見かけの身体、見かけの心が形成され、私たちはそれらを物質の世界、肉体としての身体、私の心であると誤って解釈することになり、ここに、「見かけの身体」と「見かけの心」より成る「私」が生み出されることとなります。その結果、心の世界は私の心として閉じた世界であると解釈されることになり、また認識も私の心の中に閉じ込められ、存在から切り離されて解釈されることとなります。主体と客体の関係はここに端を発しているものと思われまます。

心の世界の中に、何故「私」が内在するのか？

心の世界の中に見かけの物質の世界、見かけの身体、そして見かけの心が内在していて、それらを私たちは物質の世界、肉体としての身体、そして私の心であると思い込んでいるということですが、では何故このような、私たち自身さえも欺くようなトリックが仕掛けられているのでしょうか。

もっとも、欺くとは言っても、また、仕掛けられているとは言っても、手品のトリックとは違います。意図的であるということではありません。見かけの物質の世界と「私」が心の世界の中に内在していること

から、私たち自身がその本当の姿を見抜くことができないでいる、ということなのです。

心の世界の中に見かけの物質の世界と、見かけの身体と見かけの心より成る「私」が内在するのは、それら見かけの物質の世界と「私」は、自らの行動をコントロールするシステムの一環として欠くことのできない大切な役割を果たしているからだろう、と考えることができそうです。つまり、私たち生体は外界から情報を取り込み、分析、判断を行い、行動しているわけですが、見かけの物質の世界と「私」は、情報の処理の過程で欠くことのできない役割を担っているものと思われます。

私たちの行動は、意識化されている部分と、意識化されていない部分とから成り立っていますが、意識化されている部分のごくわずかで、そのほとんどが意識化されていません。例えば、手を伸ばして目の前のコーヒーカップを掴むという例を取り上げてみても、コーヒーカップの位置を知る、手を伸ばす方向を判断する、などのように、その要所、要所は意識されているものの、その大部分は意識されることなく自動的にこなされています。

見かけの世界と「私」は意識化された現象です。当然その背後には脳によるバックアップがあり、脳の生理学的なシステムによる情報処理の過程が存在していますが、それら脳による生理学的な過程そのものは意識化されることはありません。生理学的な過程に加え、見かけの物質の世界と「私」という意識化された現象が存在するのは、それらが情報処理の過程で、認識という点において欠くことのできない役割を担っているからだと思われます。

それを裏付けることからの一つは、目の前に広がる世界や目の前の身体が、外界の写しという形で、また肉体としての身体の写しという形で存在しているという事実です。つまり、外界や肉体としての身体が写しという形で心の世界の中に存在しているのは、情報の分析や判

断を行なう上で、そのような写しという形をとることが効率的だからだろう、と考えられそうです。

例えば手を伸ばしてコーヒーカップを掴もうとするとき、それがコンピュータによって制御されたロボットであれば、数値化された情報に頼ることになります。そこには私たち人間の場合にみられるような、意識化された現象が生じているということはないでしょう。しかし私たち人間の場合には、目の前に広がる世界にコーヒーカップと手が存在していて、同時にそれらが認識であるという構図になっています。それら目の前のコーヒーカップと手が、その具体的な仕組みは分からないものの、手を伸ばしてコーヒーカップを掴むという行動を行なうに際し、「私」が見ているわけではなく、「私」が認識しているわけではなく、対象そのものとして情報処理に役立てられているのは、ほぼ間違いないのではないのでしょうか。

事実、同調のシステムのもと、目の前の手が目の前のコーヒーカップに向けて行動を起こすことは、物質の世界の中で肉体としての手が物質としてのコーヒーカップに向けて起こす物理的な運動と対をなしています。情報を得るには目の前に広がる世界の中でその対象に視線を向ければいい。それによって、数値化された情報などではなく、目の前に対象そのものが立ち現れることになる。手とコーヒーカップの距離や方向という位置関係は、数値化されたデータで示されるよりは、他ならぬ外界の写しという形で存在し、かつ認識であることの方が、情報としての活用度は飛躍的に高まるはずです。

この項のテーマである「心の世界の中に何故「私」が内在するのか？」、という問い掛けについてですが、ここでの「私」は「見かけの身体」と「見かけの心」から成り立っている「私」を指します。従って、この問い掛けの半分は「見かけの身体」に関連したものであり、いまお話しした通り、見かけの身体が肉体としての身体の写真として目の前に広がる世界の中に存在していることが情報処理の上で効果的である、

ということが回答になるのではないのでしょうか。

問い掛けのいま半分は「見かけの心」に関連したものであり、それは、「私」という思いの存在により私たちの行動は、「私」という思いの存在しないときとはまったく異なる新しいステージに到達できるからではないのでしょうか。

「私」は、「私」が見ている、「私」が聞いている、「私」が感じている、「私」が記憶する、「私」が話す、「私」が考える、「私」が決める、などの思いと共に心の世界の中に存在しています。しかし、第3章第4節でお話したように、「私」が目の前の対象を見ている、「私」が周りの音を聞いている、「私」が身体にまつわる感覚を感じている、などというようなことは現実には有り得ません。それらはいわば見かけの行為なわけです。それにもかかわらず、「私」が肉体としての身体を伴って物質の世界の中に存在し、かつ、いま挙げたそれらの行為を行なっているかのような思いが持たれるような仕組みになっています。

それによって得られることは何でしょうか。例えば、目の前のコーヒーカップに手を伸ばしてコーヒーを一口飲むという行動について考えてみたいと思います。もし「私」という思いを消し去ってその一連の過程を表現すると、次のようになります。

コーヒーが飲みたいという欲求が生じ、欲求に基づいて手が伸びる。コーヒーカップと手の位置関係は、両者が目の前に広がる世界に存在していることで認識となっている。コーヒーカップが引き寄せられ、コーヒーが飲み込まれる。コーヒーの味が生じ、憩いの感情が生じる。

このように、「私」という思いを消し去ると極めて機械的な印象になりますが、ここに「私」という思いが関与すると、これら一連の行為は次のように言い換えられます。

「私」がコーヒーを飲みたいと思う。「私」が自らの意思でコーヒーカップに手を伸ばす。「私」がコーヒーカップと手の位置関係を把握

している。「私」がコーヒーカップの取っ手を掴む。「私」がコーヒーカップを引き寄せる。「私」がコーヒーを一口味わう。「私」は憩いを感じる。

このように、「私」が思う、「私」が決める、「私」が知っている、「私」が行動する、「私」を感じる、ということで、「私」という行為する者という思いが存在することによって、私たちの行動はまったく新しいステージで展開することになります。情報を得るには「私」が目の前の対象に視線を向ければよい。それによって外界の情報を「私」が手に入れることができる。その情報の分析は「私」がすればよい。対象に働きかけるには「私」が決断すればよい。このように、「私」という思いの存在により情報の収集、分析、判断、決断、実行という、私たちの行動にまつわる一連の過程はスムーズに運ぶことになります。

このような思いは、私たちが常識として抱いている心、身体、外界についての考えそのものです。私たちは、心、身体、外界についての一般常識を疑うことなく信じていますが、第1章第1節でお話したように、実はその常識は誤りです。心の世界の中に物質の世界と肉体としての身体の写し作り上げられていて、私たちはそうとは気付くことなく、それらを物質の世界と肉体としての身体であると思い込んでいます。その結果、肉体としての身体に「私」が宿っていると思い込み、「私」が物質の世界で行動していると思い込むことになります。

物質の世界において現実に行動するのは肉体としての身体です。ただし、肉体としての身体だけでは機械的な行動しかとることはできません。複雑な環境の下で高度に適応した行動ができるようになるには、それをコントロールするシステムが必用です。そのシステムは一方で神経回路網であり、それが行動を身体的な側面から支えている。また一方で、心の世界の中に見かけの物質の世界が存在し、また見かけの身体と見かけの心から成る「私」が内在することで、行動を認識という側面から支えている。つまり、肉体としての身体に「私の心」が宿

り、「私」が物質の世界の中に存在し、そして行動している、という一般常識での図式が構成されることになります。

このようなシステム、つまり、脳による生理学的な側面からの情報の処理と同時に、意識化された世界が認識という側面から情報の処理を支えるというシステムにより、私たちの行動は成り立っているのではないのでしょうか。見かけの物質の世界と「私」は、自らの行動をコントロールするシステムの一環として存在しており、そのような情報処理のシステムは情報処理の進化とでも、心の進化とでも呼べるものではないのでしょうか。

見かけの世界は空虚な世界ではない

心の世界の中に、見かけの物質の世界、見かけの身体、見かけの心が存在している、ということで、何れも見かけのという表現を使ってきました。見かけのという言葉からは、見せかけのとか、無意味なとか、無価値な、という意味合いが感じ取れますが、決してそのようなことはありません。物質の世界に存在することが実在である、と定義されているのに対し、心の世界の中に存在してはいるものの、それそのものは物質の世界に存在しているわけではないという理由から、見かけのという表現が使われているだけのことです。

目の前の身体は、また、目の前に広がる世界は、それ独自のかたちにおいて存在するものであり、存在しないなどということでは決してありませんし、見せかけのとか、無意味なとか、無価値な、ということではありません。それらは見かけの、と表現されてはいるものの、それ独自のかたちでの存在であり、同時に認識です。それらは前の項でお話したように、私たちがまだ知らないような仕組みで、情報の処理を行なう上で欠くことのできない要因となっていることでしょう。

また、目の前に広がる世界は私たちが日頃慣れ親しんでいる世界であることから、十分に分かっているつもりではいますが、これまでの

話でお分かりのように、実はそうではありません。そこには、いまだ私たちが知らない重要な事実が潜んでいるに違いなく、それは視点を変えることで自然と浮かび上がってくるように思えるのです。

この節のまとめ

心の世界の中に見かけの物質の世界、見かけの身体、見かけの心が存在し、その見かけの身体と見かけの心とから「私」は成り立っている。見かけの物質の世界や見かけの身体が物質の世界や肉体としての身体の写しという形で存在し、また「私」が心の世界の中に内在することは、情報の収集、分析、判断、決断、実行という私たちの行動にまつわる一連の過程がスムーズに運ぶ上で好都合であり、そのことによって、複雑な環境に高度に適応することが可能になるものと思われる。

あとがき

最初にお断りしておいたように、本稿は楽しく読めるというような内容ではありません。最後まで読み通していただけたのであれば、幸いとするところです。

「コーヒーカップを見る」というような、ごく日常的なことがらの中に潜む矛盾点を手掛かりにして、心についての一般常識を根本から覆そうというのが本稿の目的です。それには理詰めの分析が必用であり、理屈っぽい話にならざるを得ません。皆さんご自身に、心についての考えを見直す努力を強いることになります。更には、「見ている対象」、「見ている身体」、「見た結果」などという一般的ではない言葉を用いていることが、読みづらさ、分かりづらさに拍車をかけているのではないかと気掛かりです。

一時代前には考えられなかったことですが、心や意識という問題に科学の立場から取り組もうとする研究者の数が、わずかずつではありますが、確実に増えてきています。それにつれて、目の前の対象が物質そのものではなく心理現象であることに言及する科学者の数も、わずかながら増えてきています。

事実、目の前の対象は物質そのものではなく心理現象であるわけですが、そのこと自体は比較的理解しやすいようです。難解なのは目の前の自らの身体（目・鼻・舌・耳・皮膚）の解釈であり、それが肉体としての身体ではなく「見かけの身体」であることを理解するのは容易ではありません。その一番の原因は、「私」という存在が身体と密接な関係にあるという思いがあるからでしょう。つまり、「私」は肉体としての身体と共に存在するものであり、その身体は目の前に見えている身体であり、従って目の前の身体は肉体としての身体である、という常識としての理屈が用意されているからでしょう。

「心はどこにあるのか？」という問題を解くためには、目の前の対象は物質ではなく心理現象であることを見抜くことが、越えなければならない第一のハードルであり、その上で、目の前の身体が見かけの身体であることを見抜くことが第二のハードルとなります。それには、理詰め（論理的）の分析で得られた事実を事実として認め、その事実を常識にとられることなく正しく解釈する姿勢が大切です。

「私がいて、その私が見ているのだから」とか、「目の前の対象を見て、その存在を知る」という思いは、心や認識の本当の姿を覆い隠すトリックですが、それを見破るための鍵は極めてシンプルです。外界からの情報が脳に伝えられ、そこで処理された「結果」が何であるかを見極めればいいだけのことです。

ただし、それによって得られることがらは常識と真っ向から対立するものであり、それを事実として受け入れるのは容易ではありません。また、その事実を覆い隠そうとする常識としての理屈が用意されてい

ることが、事実を事実として受け入れることを尚更難しいものにしていきます。しかし、目の前の自らの身体の正しい解釈が心や認識の本当の姿を理解する鍵となり、更には、「私」という存在を理解する鍵となることは間違いありません。

目の前の身体を肉体としての身体であると誤って解釈することにより、心は自分自身にとってさえも捉えどころのない閉じた世界であると解釈され、また認識も存在から切り離されて解釈されてしまうことになります。しかし実はそうではなく、目の前に広がる世界は心の世界であり、認識は存在と一体をなすものです。

本稿では主に見るといふ行為についてだけ分析し、また意識されている内容だけを扱ってきたわけで、いわば狭い意味での心の世界についてお話しただけです。脳による情報処理を含んだ広い意味での心の世界についての考察が欠けており、また、認識についても高次のレベルの認識については何ら言及していません。従って、本稿でお話した心の世界について、あるいは「私」という存在の解釈について、何かしら腑に落ちない思いを持たれたのではないかと思います。それが解消されるには、広義の心の世界と、高次のレベルの認識についての考察が必用となるでしょう。

そのような不備があるのは事実ですが、しかしここでお話したことは「そういう考え方もある」、という類のものではありません。「コーヒーカップを見る」といふ行為を理詰めで分析していくと、目の前のコーヒーカップは物質ではなく心理現象であり、心の世界の中の存在であること、そして、その存在は同時に認識であること、更には、「私」という存在そのものも自らの心の世界の中に内在しているということが、必然的に導かれることになります。

私自身、本稿でお話してきたような考えの下に日々暮らしているの

かということ、そうではありません。目の前の対象は見かけの物質である、目の前の身体は見かけの身体である、向こうから歩いてくる人も見かけの存在である、すべては私の心の世界の中の存在である、と考えて暮らしているわけではありません。常識通り、目の前の対象は物質であり、目の前に広がる世界は物質の世界であり、目の前の身体は肉体としての身体であり、目の前の人はその人本人である、と思っています。

ただし、心や意識について考えを巡らすときは別です。「私」が自らの心の世界の中の存在であるというそのトリックの巧みさに、また、いのちの仕組みの奥深さに思わず言葉を失うことがあります。しかしまた一方で、美しく、雄大な風景に接し、それが自らの心の世界の中の存在であることを思うとき、心の世界の素晴らしさを、そして生命のかけがえの無さを改めて感じます。

I. ニュートンが「プリンキピア」を発表したのが1687年であり、そこに古典力学は完成されました。また、R. フックが自作の顕微鏡でコルクの断片を観察し、それが蜂の巣のような小箱からできているのを発見して細胞と名付けたのが1665年のことです。何れも17世紀半ばのことです。それから3世紀半が経過しましたが、その間に物理学も生物学も飛躍的な発展を遂げました。科学的な研究の手法が、未知なる現象を解明する上で有効であることを示していると言えます。

その科学が脳科学の進展とともに、20世紀末に心や意識の問題に取り組み始めたと言ってもいいでしょう。この分野においても科学が成果を収めるのはまず間違いないでしょうが、それには、目の前の自らの身体も含め、目の前に広がる世界がどのような世界であるかの理解が不可欠であり、それが出発点になるはずです。

本稿でお話したことは、心の世界についての探究のほんの入り口に

過ぎません。この先には解明しなければならないことがたくさんあります。脳の情報処理を含めた広義の心の世界において意識化された現象がどのような役割を果たしているのかが、まず解明されなければならないでしょう。また、心や意識、更には認識も存在という観点から捉え直される必用があり、同時に、存在も認識という観点から解釈し直される必用があるのではないのでしょうか。

人間のような精神活動を営む生命の存在の如何にかかわらず物質の世界は存在する、という前提のもとで話を進めてきました。そして、目の前に広がる世界が心の世界であることが明らかになった現時点においても、その前提に何ら変わりはありません。ただ、「心はどこにあるのか？」という問い掛けは、「物質の世界はどこにあるのか？」という形に姿を変え、そのまま投げ返されてくることになります。

2020年11月

白石 茂